

石川県埋蔵文化財情報

第 2 号

平成10(1998)年度下半期の発掘調査	(1)
発掘調査略報	(5)
1 梅田B遺跡(第6次調査)	2 大長野A遺跡(第3次調査)
3 四柳白山下遺跡(第5次調査)	4 四柳ミッコ遺跡(第2次調査)
5 観法寺古墳群	6 藤江C遺跡(第7次調査)
7 藤江B遺跡(第6次調査)	8 戸水B遺跡(第12次調査)
9 柴山出村遺跡	10 指江遺跡群
11 矢崎宮の下遺跡	12 三引C・D遺跡(第5次調査)
13 真脇製塩遺跡(第2次調査)	14 近岡遺跡
15 倉見オウラント遺跡	16 金沢城跡(いもり堀)
17 能登空港関連遺跡群(第2次調査)	
春期の整理作業報告	整理課... (55)
[発掘余話] 金沢城跡五十間長屋出土の「鍬始」刻石	北野博司... (57)
金沢城跡石垣調査と刻印	土田友信... (65)
「九泉」	田村昌宏・滝川重徳... (69)
弥生時代中期の複合口縁壺について	林 大智・河合 忍... (75)
吉崎・次場遺跡出土の板状鉄斧について	今井淳一・林 大智... (83)

1999年10月



真脇製塩遺跡調査区全景（南から）



溝状の製塩炉（南西から）



炉床部が土器敷きの製塩炉（南西から）

平成10(1998)年度下半期の発掘調査

調査部長 小嶋 芳孝

平成10(1998)年度の上半期は、(財)石川県埋蔵文化財センターの開館準備などで忙殺されたが、下半期は順調に調査業務が遂行できた。県教育委員会から受託した発掘調査は26件で114,710m²、出土品整理・報告書作成事業は21件だった。発掘調査の内訳は、建設省事業が6件で40,190m²、鉄道建設公団が1件で4,000m²、県農林部4件で4,050m²、県土木部が13件で52,680m²、県企画部が2件で13,790m²である。

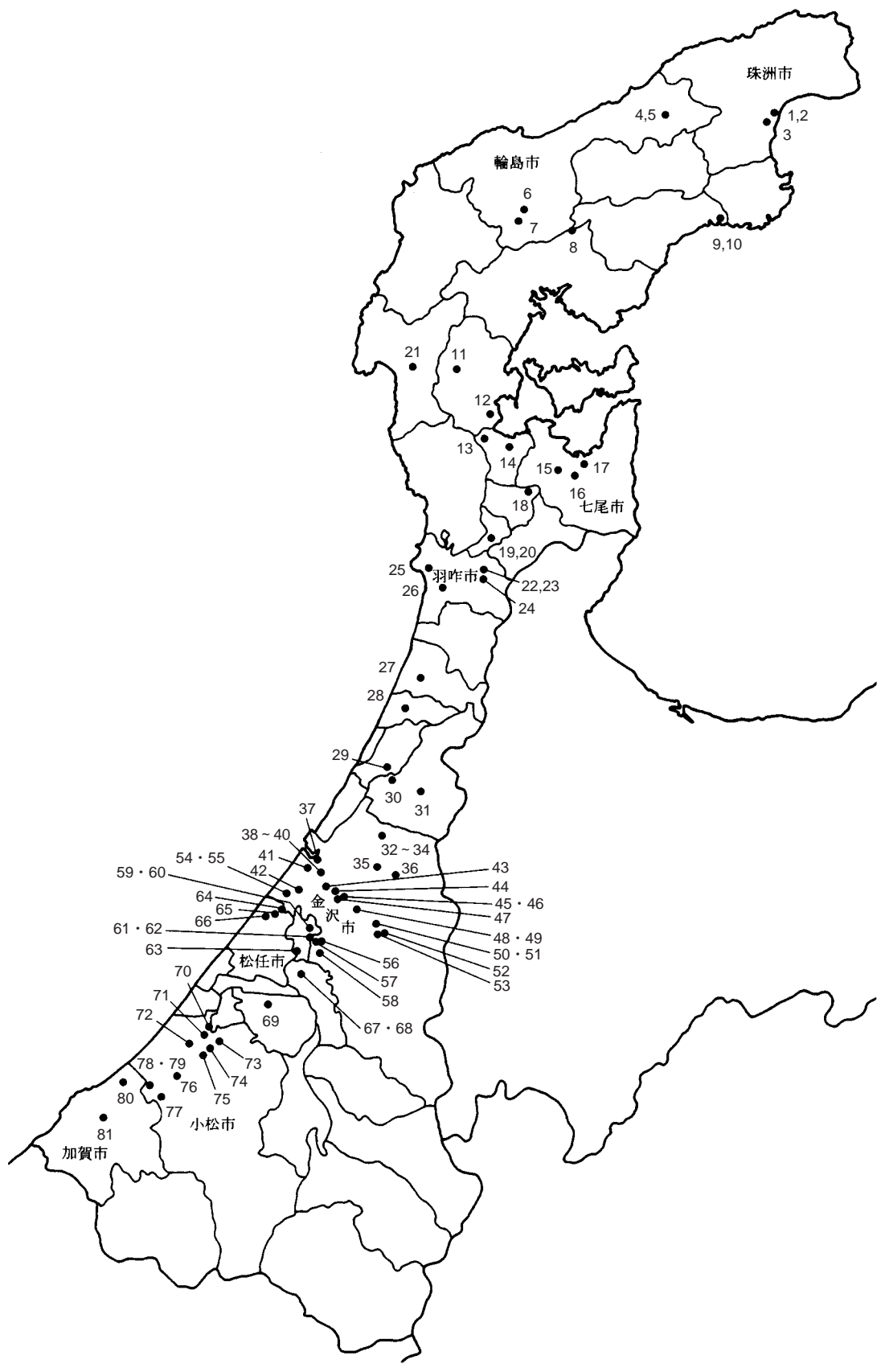
鹿島バイパス改築工事に係る羽咋市四柳ミッコ遺跡では、古墳時代中期の竪穴住居跡から鞆羽口と粒状滓を検出している。県内では過去に七尾市藤橋遺跡や鳥屋町でこの時期の鉄滓や鞆羽口などが検出されていたが、いずれも包含層資料であり、鍛冶作業の実体はわからなかった。今回、竪穴住居跡から鍛冶関係資料を検出したことは、北陸における初現期の鍛冶作業を解明する上で重要な成果である。さらに四柳ミッコ遺跡では、8世紀の河道跡から木沓が出土している。木沓は南に接する四柳白山下遺跡でも出土しており、大町から四柳に広がる8世紀代の遺跡が一般集落ではなく、官衙的な性格をもっていた可能性を示す資料である。

金沢西部土地区画整理事業に係る発掘調査では、金沢市藤江B遺跡・藤江C遺跡・戸水C遺跡を調査している。この内、藤江C遺跡B2調査区では9世紀代の大型掘立柱建物と井戸が検出されている。過去の調査では、当該地区の南に接して倉庫建物群が検出されており、今回検出した建物と関連があると思われる。藤江C遺跡の周辺では戸水大西遺跡や戸水C遺跡など、9世紀代に大型建物をもつ遺跡を多く見ることができるが、これらは今回検出した建物群も含めて弘仁一四(八二三)年の加賀立国の事情を解明する手がかりをもつ遺跡群と思われる。戸水B遺跡では、弥生時代中期の平地式住居と布掘建物を検出している。この遺跡は、石川県における弥生時代中期末の標識となっており、これまでの西高校の校舎建設に伴う調査や、工業試験場建設・区画整理事業等の調査で遺跡の全貌がほぼ明らかになってきた。今回の調査で、平地式建物が遺跡の北部・南部・中部に集中していることが明らかとなり、集落構造を解明する手がかりを得ることができた。

県営ほ場整備事業に係る宇ノ気町指江遺跡の調査では、古墳～平安時代の河跡から多量の木製品・土器などを検出している。このうち、8世紀～9世紀代と考えられる棒状木製品には「大国別社務……」と墨書されており、また伴出した8世紀中頃の須恵器坏には「大宮」と墨書されている。この溝の下層からは、5世紀後半に比定できる須恵器や土師器が多量に出土し、滑石製の白玉・土玉・ガラス玉なども検出されている。この河跡の上流で祭祀が5世紀後半に行われ、さらに8～9世紀代にも神社に関わる施設が周辺に設けられていたようである。また、須恵質の円筒埴輪も出土しており、祭祀に伴って埴輪が樹てられたのか、もしくは背後の丘陵に埴輪を伴う古墳が造営されているのか、今後の検討課題である。この遺跡は平成11年(1999)年度も調査予定であり、遺跡の性格の解明をはかっている。

金沢城跡は、シェルターの中で五十間長屋石垣の解体調査を継続している。三引遺跡は、当初の予想以上の規模で貝塚が出てきたため、文化財課・県土木と協議のうえ調査を平成11年度に継続することとなった。

当センターの調査だけでなく市町村教委の調査成果もあわせて紹介したいと思っていたが、今回は一覧表の掲載しかできなかった。石川県の埋蔵文化財に関する情報誌としてどのように充実していくか、次回以降におむけて検討を進めたい。



平成10年度に発掘された遺跡〔遺跡分布図〕

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査主体	時代	面積 (m ²)
1	北方E遺跡	珠洲市上戸町	H10年6月1日～9月30日	珠洲市教委	古墳～中世	2,000
2	北方遺跡	珠洲市上戸町	H10年6月8日～10月31日	珠洲市教委	古代～近世	1,900
3	南黒丸遺跡	珠洲市南黒丸	H10年5月18日～9月18日	埋文センター	縄文・中世	2,600
4	善願寺跡遺跡	輪島市町野町	H10年4月20日～7月21日	輪島市教委	古代	1,500
5	粟蔵遺跡	輪島市町野町	H10年5月18日～7月31日	輪島市教委	弥生・古墳・中世	900
6	興徳寺C遺跡	輪島市三井町	H10年9月7日～9月30日	輪島市教委	中世	200
7	三井小泉遺跡	輪島市三井町小泉	H10年11月11日～11月30日	輪島市教委	縄文・平安	660
8	能登空港関連遺跡群	輪島市三井町	H10年4月16日～10月16日	埋文センター	近世	11,000
9	真脇遺跡	鳳至郡能都町真脇	H10年8月5日～12月2日	能都町教委	縄文	260
10	真脇製塩遺跡	鳳至郡能都町真脇	H10年10月13日～H11年1月22日	埋文センター	古代	400
11	虫ヶ蜂炭窯跡	鹿島郡中島町町屋	H10年8月31日～9月14日	中島町教委	近世	20
12	河崎エンザキ遺跡	鹿島郡中島町河崎	H10年5月6日～7月3日	中島町教委	古墳・古代	2,000
13	大津くろだの森遺跡	鹿島郡田鶴浜町大津	H10年7月28日～9月30日	田鶴浜町教委	縄文	200
14	三引C・D遺跡	鹿島郡田鶴浜町三引	H10年4月27日～H11年1月12日	埋文センター	縄文・古墳・中世	5,300
15	国分遺跡	七尾市国分町	H10年10月1日～12月24日	埋文センター	弥生・古墳・中世	1,000
16	七尾城下町遺跡	七尾市古城町・古屋敷町	H10年8月18日～H11年3月31日	七尾市教委	中世	350
17	万行遺跡	七尾市万行町	H10年6月12日～H11年3月31日	七尾市教委	縄文・弥生・古墳	1,000
18	川田古墳群	鹿島郡鳥屋町川田	H10年8月3日～8月12日	鳥屋町教委	古墳	3,000
19	沢ソウダケ遺跡	鹿島郡鹿西町金丸	H10年8月18日～9月16日	鹿西町教委	古代	70
20	金丸宮地遺跡	鹿島郡鹿西町金丸	H10年9月18日～11月17日	鹿西町教委	古墳・古代	250
21	富来城跡	羽咋郡富来町八幡	H10年7月27日～11月27日	富来町教委	中世	1,760
22	四柳白山下遺跡	羽咋市四柳町	H10年5月12日～12月28日	埋文センター	縄文～近世	7,900
23	四柳ミッコ遺跡	羽咋市四柳町	H10年5月7日～12月20日	埋文センター	古墳～中世	5,200
24	永光寺遺跡	羽咋市本江町	H10年4月19日～6月26日	羽咋市教委	中世	900
25	一ノ宮遺跡	羽咋市一ノ宮町	H10年7月1日～9月4日	羽咋市教委	中世・近世	300
26	吉崎・次場遺跡	羽咋市吉崎町	H10年5月11日～6月26日	羽咋市教委	弥生	100
27	御館遺跡	羽咋郡押水町御館	H10年5月27日～9月30日	押水町教委	中世	1,000
28	中沼コノダン遺跡	河北郡高松町中沼	H10年5月14日～9月21日	高松町教委	古代～近世	1,500
29	指江遺跡	河北郡宇ノ気町指江	H10年9月16日～12月25日	埋文センター	古墳～平安	2,400
30	能瀬小学校遺跡	河北郡津幡町能瀬	H10年4月1日～8月24日	津幡町教委	古墳～近世	1,200
31	倉見オウラント遺跡	河北郡津幡町倉見	H10年7月21日～11月26日	埋文センター	弥生	3,000
32	梅田B遺跡	金沢市梅田町	H10年5月18日～12月26日	埋文センター	弥生～中世	17,000
33	梅田B遺跡(新幹線A区)	金沢市梅田町	H10年5月6日～7月14日	埋文センター	古墳・古代	1,000
34	観法寺古墳群	金沢市観法寺町	H10年7月7日～12月28日	埋文センター	古墳・古代	3,000
35	堅田B遺跡	金沢市堅田町	H10年8月18日～12月22日	金沢市教委	中世	1,700
36	正部・薬師遺跡	金沢市正部町・薬師町	H10年4月6日～5月15日	金沢市教委	古代～近世	2,000
37	近岡遺跡	金沢市近岡町	H10年9月1日～12月25日	埋文センター	弥生・古墳	2,000
38	戸水B遺跡	金沢市戸水町	H10年9月16日～H11年1月8日	埋文センター	弥生	2,790
39	藤江C遺跡	金沢市藤江	H10年5月11日～H11年1月8日	埋文センター	縄文～中世	18,040
40	藤江B遺跡	金沢市藤江	H10年7月27日～10月26日	埋文センター	弥生～中世	2,460
41	畝田・寺中遺跡	金沢市寺中町	H10年4月1日～4月14日	金沢市教委	古墳	160
42	北塚遺跡	金沢市北塚町	H10年5月6日～6月11日	埋文センター	弥生・古代	480
43	醒ヶ井遺跡	金沢市醒ヶ井町・広岡町	H10年7月1日～10月30日	金沢市教委	弥生・近世	1,200
44	高岡町遺跡	金沢市高岡町	H10年5月11日～11月30日	金沢市教委	古墳～近世	300
45	金沢城跡	金沢市丸の内	H10年5月6日～H11年3月31日	埋文センター	近世	11,000
46	金沢城跡(いもり堀)	金沢市丸の内	H10年7月21日～10月30日	埋文センター	近世	3,300
47	広坂遺跡	金沢市広坂町	H10年4月2日～12月22日	金沢市教委	弥生～近世	9,000
48	宝町遺跡	金沢市宝町	H9年11月4日～継続中	金沢大学	近世	15,604
49	経王寺遺跡	金沢市経王寺・宝町	H10年5月6日～9月25日	埋文センター	近世	1,600
50	田上北遺跡	金沢市田上町	H10年8月24日～11月11日	金沢市教委	古代・中世	2,300
51	田上西遺跡	金沢市田上町	H10年6月8日～8月21日	金沢市教委	古代・中世	2,700
52	角間遺跡	金沢市角間	H11年2月22日～継続中	金沢大学	古代	3,000
53	田上本町遺跡	金沢市田上町	H10年10月19日～12月14日	金沢市教委	古墳～中世	600
54	上安原遺跡	金沢市上安原	H10年5月6日～11月30日	金沢市教委	縄文・弥生・近世	5,000
55	神野遺跡	金沢市神野町	H10年4月27日～12月28日	金沢市教委	弥生・古代	10,000
56	高尾天神堂遺跡	金沢市高尾台	H10年4月3日～4月28日	金沢市教委	弥生・古代	180
57	額新町遺跡	金沢市額新町	H10年7月22日～9月30日	金沢市教委	弥生～中世	1,000
58	額谷遺跡	金沢市額谷町	H10年4月30日～8月31日	埋文センター	弥生・古墳	850
59	富樫館跡	石川郡野々市町扇が丘	H10年5月8日～5月29日	野々市町教委	中世	300
60	富樫館跡(埴土居地区)	石川郡野々市町扇が丘	H10年7月30日～10月15日	野々市町教委	中世	2,070
61	扇が丘八ワイゴク遺跡	石川郡野々市町扇が丘	H10年5月7日～8月20日	野々市町教委	古代・中世	1,800
62	扇が丘ヤグラダ遺跡	石川郡野々市町扇が丘	H10年5月13日～10月13日	野々市町教委	古代・中世	5,000
63	未松A遺跡	石川郡野々市町未松	H10年5月6日～7月15日	埋文センター	古代・中世	800
64	横江荘遺跡	松任市横江町	H10年7月24日～10月12日	松任市教委	弥生・古代	410
65	宮永ほじ川遺跡	松任市宮永町	H10年9月28日～10月23日	松任市教委	中世	350
66	竹松遺跡	松任市竹松町	H10年11月27日～12月16日	松任市教委	弥生	150
67	七原町A遺跡	石川郡鶴来町七原町	H10年8月21日～9月24日	鶴来町教委	弥生・古代	2,500
68	七原町B遺跡	石川郡鶴来町七原町	H10年9月28日～12月28日	鶴来町教委	弥生・古代	3,000
69	湯屋窯跡	能美郡辰口町湯屋	H10年5月11日～12月1日	辰口町教委	古代	700
70	大長野A遺跡	小松市大長野町	H10年5月14日～12月25日	埋文センター	縄文・弥生・中世・近世	5,550
71	白江梯川遺跡	小松市白江町	H10年5月18日～8月12日	埋文センター	弥生・古墳	1,500
72	八日市地方遺跡	小松市日の出町	H10年4月13日～H11年1月25日	小松市教委	縄文・弥生	5,316
73	佐々木遺跡	小松市佐々木町	H10年4月6日～H11年3月31日	小松市教委	古代	4,000
74	打越遺跡	小松市佐々木町	H10年6月25日～9月30日	小松市教委	弥生～中世	1,200
75	吉竹遺跡	小松市吉竹町	H10年6月4日～6月18日	小松市教委	弥生・古墳	66
76	矢崎・宮の下遺跡	小松市矢崎町	H10年10月27日～11月20日	埋文センター	中世	150
77	矢田借屋古墳群	小松市月津町	H10年10月13日～H11年1月28日	小松市教委	古墳	350
78	額見町遺跡(C地区)	小松市串町・額見町	H10年4月7日～12月18日	小松市教委	古代	6,500
79	額見町遺跡(D地区)	小松市串町・額見町	H10年6月15日～10月6日	小松市教委	古代	3,500
80	柴山出村遺跡	加賀市柴山町	H10年7月21日～10月16日	埋文センター	古代・中世	700
81	弓波麁寺	加賀市弓波町	H10年5月11日～H11年3月31日	加賀市教委	古代	980

[発掘調査略報] 1 ^{うめだ}梅田 B 遺跡 (第 6 次調査) [遺跡分布図 No.32]

所在地 金沢市梅田地内

調査期間 平成10年 5月18日～平成10年12月26日

調査面積 A地区 1,000m²

調査担当 岡本恭一 柿田祐司 松浦郁乃

B地区 700m²

宮川勝次 荒木麻理子 河村美紀

C地区 8,600m²

F地区 4,700m²

本遺跡は金沢市の北東部、森下川と河北潟に挟まれた丘陵裾部に広がる縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。発掘調査はすでに6次を数える。今年度は約17,000m²の調査が行われており、その調査成果について、順に説明をしていきたい。



遺跡位置図 (S=1/10,000)

[A地区]

A地区は平成4(1992)年度(第1次調査)で隣接区域の発掘調査が行われており、建物や井戸が区画溝内に整然と配置された中世の集落跡が確認されている。

今年度の調査では第1次調査と同様に、総柱の掘立柱建物と井戸がセットになり、それらを他の建物と井戸と区画するように巡らされた溝が検出された。そのような区画は2区画みられ、いずれも少なくとも3回は建替えが行われているとみられる。建物の規模は3間×3間のものがほとんどであった。柱穴には柱根

部分や、柱の沈下を防ぐための礎板や石が遺存しているものが多く見られた。また、中には廃絶時に何枚もの薄い板状の木片が無造作にいれられたものや、底面に土師器の小片が据え置かれたようになっている柱穴もみられた。

井戸は3基検出しており、2基はすでに井戸側は抜き取られており、埋土中からは、その材かと思

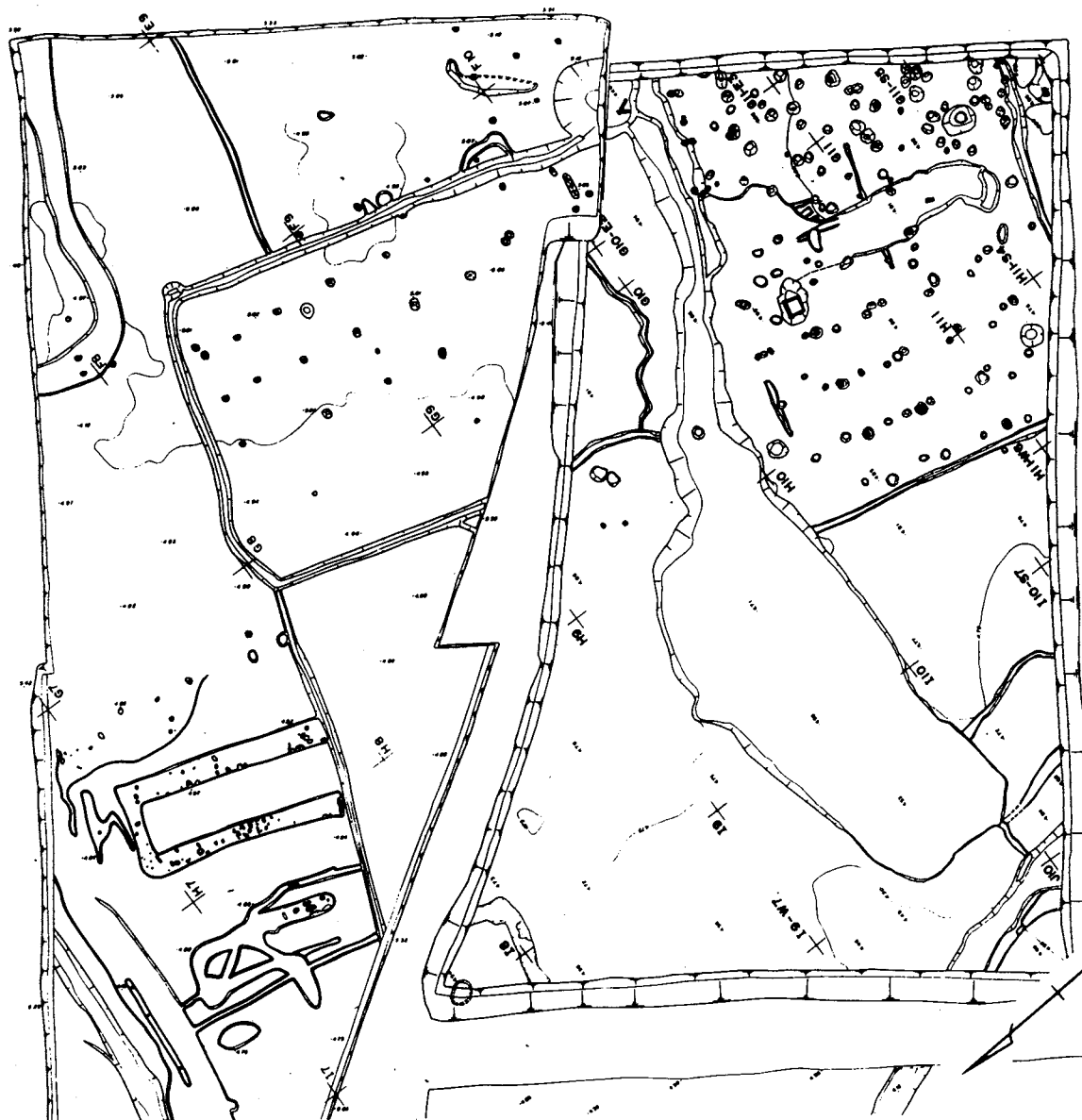


A地区航空写真

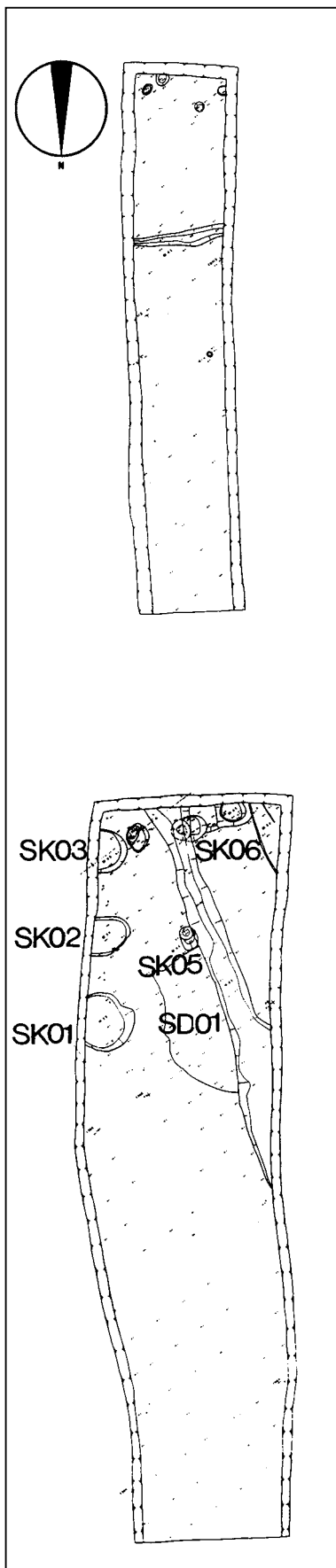
われる木片がみられた。残り1基は井戸側が良好な状態で遺存していた。縦板組横棧どめで、3段遺存する横棧の1段目と2段目の間にのみ支柱がみられた。横棧は目違い柄で組まれていた。埋土中からは箸状木製品が多く検出された。また、井戸掘方より曲物の底板と鋤身が出土した。県外で平安時代に井戸掘方から犁が、中世では一木鋤が出土した例がみられ、理由は不明としながらも何らかの祭祀的行為を行っていたとする考えもある。当遺跡で出土したものが祭祀行為によるものと断定はできないがその可能性も考えていきたい。

遺跡の時期は13世紀から15世紀の遺物がみられ、13世紀から14世紀前半にかけてのものが多く見られた。

調査区内の区画溝より西側は不整形の深さ20~30cmの落ち込みと、南北方向に流路をもつ時期不明の溝がみられるのみとなる。第1次調査区を見ても同様に溝が確認されているだけの空閑地となっており、その土地利用等についても考えていかなければならない。(松浦)



A地区及び第1次調査区(一部)接合図(S=1/300)



B地区 全体図

[B地区]

B地区で確認した主な遺構は、弥生時代の土坑6基、古代の溝である。過去の調査区と比べて遺構密度が薄く、古代と中世のそれぞれの遺構密集地に挟まれる形で位置する。

溝(SD01)は、幅が約90cm、深さが約30cmを測る。遺物は6世紀後半から7世紀前半にかけての須恵器の甕等が出土している。その他の溝2条は、小規模なもので遺物が伴っていないため時期は明らかでない。

土坑(SK01~03)は、径約1.4~2m、深さ約80cmを測り、ほぼ円形である。断面形は袋状を呈しており、中程を境に上層と下層とでは覆土堆積状況に顕著な相違がある。上層は自然堆積と考えられ、部分的に炭化物が多く含まれている。下層は、崩れ落ちたのか人為的要因なのか判断しがたいが、一気に埋まった様相を呈し、単層による堆積である。遺物は、主に弥生時代後期後半の土器片が出土している。

今回検出した土坑の用途としては、粘土採掘坑、貯蔵穴、墓穴等が考えられるが結論には至っていない。過去の調査及びE区(創刊号参照)においても今回に類似した土坑が密集して検出されており、それらを含めて今後の検討を要する。

SK05とSK06からは、それぞれ弥生後期後半の高杯と甕が出土している。その他の遺構として、径約25cm、深さ20~30cmのピットを確認しているが、出土遺物がなく検出数も少ないため、時期や性格は明らかでない。

(宮川)



遺物出土状況写真

[C地区]

本年度の当調査区は、両側に山が迫る梅田の集落に隣接して位置しており、これまでの調査区とは異なり最も山沿いにあるもので、標高11.5mを測る元宅地と元水田である。

当地区は上層、下層の2遺構面があるが、拡張部では上層面が削平されてしまっていた。

上層面では平安時代後半から鎌倉時代にかけての3間×3間以上の総柱掘立柱建物6棟以上と、平安時代後半の土器埋納土坑3基、時期不明の土坑10数基、中世の井戸3基、中世の溝5条、近世の溝5条なども検出している。井戸の内の1基からは加賀焼の壺1個体、他の1基からは曲物を検出している。掘立柱建物は調査区中央部から南東部に中心を置き、柱根や礎板も遺存するものが多い。また、割と小さな柱穴でもきれいに並ぶことから、上層面も削平を受けているものと考えられる。

下層面では幅1.5m前後、深さ60～80cmの直線的な溝3条が検出され、古墳時代と認められる土師器片10数点を検出した。その他、曲がりくねった溝5条を検出しているが、トチ、クルミなどの自然遺物を多量に出土している。人の手が加わった遺物としては磨石、敲石がともに1点出土しており、縁辺部の山麓に縄文時代の遺跡が存在することを示しているのかもしれない。

上層の掘立柱建物群は第1次調査で確認された建物群と同等ないしはそれ以上の規模を持つものであり、現存する梅田の集落内にも続くものと考えられ、謡曲「鉢の木」の舞台として登場する梅田庄として知られるだけの内容を持つものである。 (岡本)



C地区 上層面航空写真



C地区上層面遺構配置図 (S=1/400)

[F地区]

本調査区では、上層と下層の2面にわたって調査を行った。

上層における遺構検出面は、森本丘陵側から国道159号線側へ南東 - 北西方向に傾斜しており、調査区の両端で標高5.5m ~ 7mと約1.5mの差が見られた。弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての遺構・遺物が検出されたが、これは前年度までの調査で下層とされていた層位に相当する。上層で確認できた主要な遺構として、土地の傾斜方向に対してほぼ垂直に調査区内を貫流する4条の溝（SD01～04）があり、その周辺には土坑やピット、不定形の遺構などが広がっている。

SD01～04の4条の溝は、それぞれ第3次調査〔平成7（1995）年度〕のC地区を横断するSD11・25・31、SX01に続くものと思われる。これらの溝は比較的短期間で作り替えられていったものと思われるが、出土遺物があまり多くなく、それぞれの詳細な存続期間は定かではない。しかし、溝の斬り合い関係などより少なくともSD04が最も新しく、古墳時代初頭から前期までのものであったことが分かっている。また、溝底レベルを見ると、これらの溝はほんのわずかだが、南西から北東方向に向かって低くなっている傾向があるものの、流れの方向を断定しがたい。なお、第4次調査〔平成8（1996）年度〕において水田跡が検出されている。これは、弥生時代後期後半に起きた大規模な地震により崩壊した集落の跡に営まれたものと見られている。本調査区では水田跡は確認されなかったが、これら4条の溝は水田に関連した遺構と考えられる。

主にSD02～04の周辺で確認された不定形の遺構は、比較的浅く、その内部にいくつもの不定形の小穴を持つなど複雑な構造を示し、人工物というよりも、何らかの自然条件により形成されたものと思われる。

上層での出土遺物は面積の割にはそれほど多くなく、建物も検出されなかった。従って、本調査区は、当時の居住域から外れた集落の縁辺部に当たるものと思われる。

下層では、数条の短い溝が検出された他には遺構がほとんど検出されず、遺物も縄文時代後期から晩期の土器がごくわずかに出土しているのみである。また、遺構ではないが、断層に伴う地形が確認されており、上記で述べた弥生時代後期後半頃のものと思われる。 （荒木）



F地区上層面航空写真

2 おおながの 大長野 A 遺跡 (第 3 次調査) [遺跡分布図 No.70]

所在地 小松市一針町

調査期間 平成10年5月14日～平成10年12月25日

調査面積 5,550m²

調査担当 田村昌宏 布尾幸恵



遺跡位置図 (S=1/25,000)



9区下層 木組み

当遺跡は、能美郡寺井町大長野・小杉から小松市一針地内にかけて所在する。地形的には、北を八丁川、南を梯川に挟まれた鍋谷川右岸に位置し、現況は水田地帯である。第三次調査となった平成10(1998)年度は、縄文・弥生・古代・中世が主体となっている。以下は、調査区毎にその概要を述べたものである。

8区では、第二次調査から続く溝跡や、ピット群が数基確認された。この地区では、弥生時代の堰跡も確認されている。

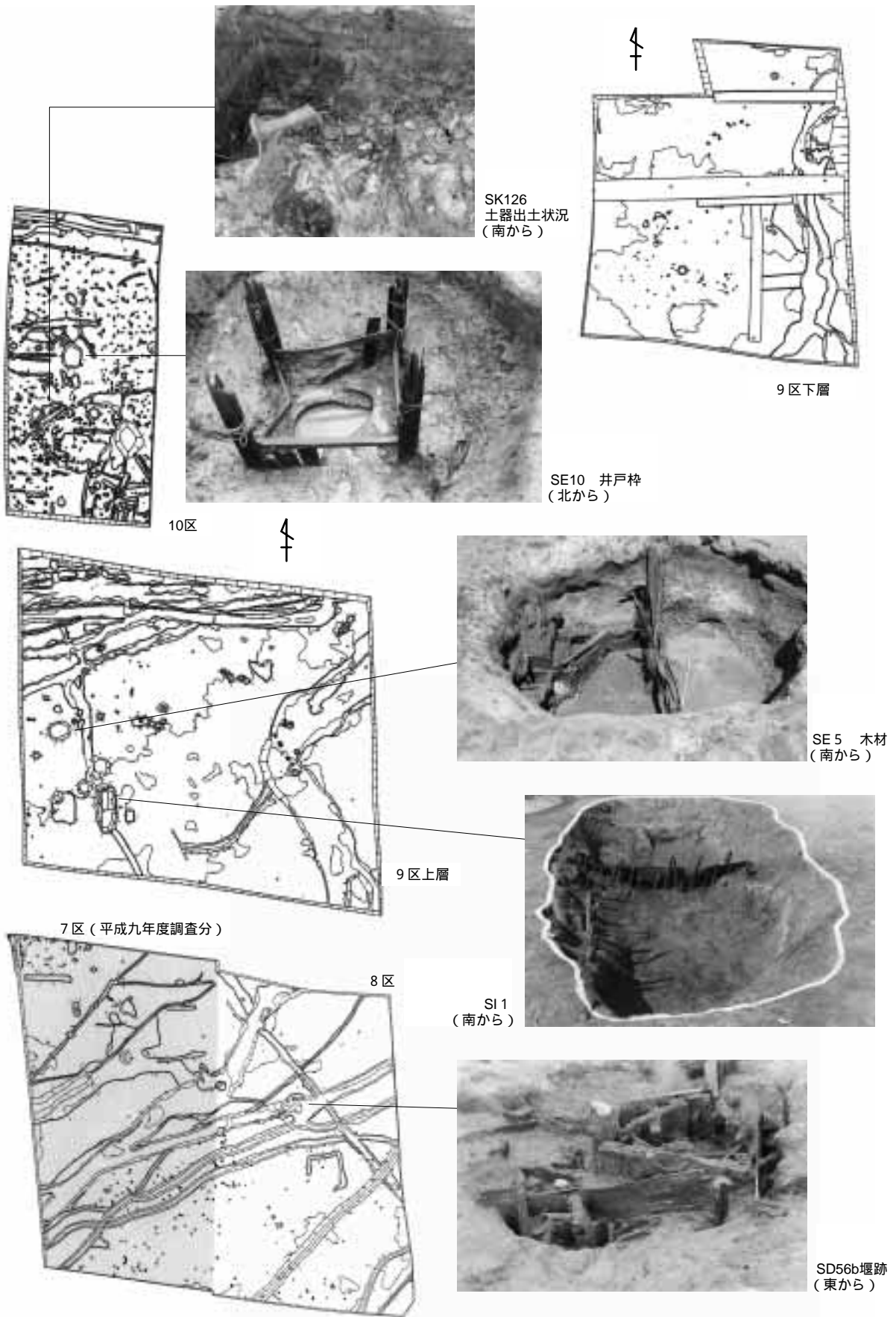
9区では、下層の存在が初めて確認された。上層では、弥生時代前期～後期のピット群・土坑群・溝跡、古代の溝跡、中世前半のピット群・井戸・溝跡が調査されている。弥生時代では、土器が投棄された土坑が数基確認されている。古代の溝跡からは9世紀の須恵器が少量確認されている。中世は、ピットは少ないものの、井戸4基ほかが発見された。井戸は、曲物井戸枠が遺存していたものや、木材が多量に廃棄されたものがあるが、いずれも息継ぎ竹が中央に入れられ、埋め井戸儀礼が行われたことを示している。中世の遺構

としては、加工木材が多く出土した方形土坑と、中央部に板で仕切りが施された遺構(SI1)が存在する。ここでは、漆椀・箸・曲物蓋などの木製品が多く出土した。9区北側には上幅約3～5mの溝も存在し、集落の区画的な意味があるとも考えられる。9区下層は、縄文時代後期が主体である。ここには、水さらし場遺構と思われる、河道に木組みを施した場所もあり、堅果類が多く出土した。ピットや貯蔵穴も確認されている。

10区は、今回調査を行った場所としては、最も遺構密度が高い地区である。弥生時代の遺構としては、ピット・土坑が主であり、土坑からは多量の土器が発見されている。中世はピット・井戸・溝跡が主体である。ピットには、セットでは出土しなかったが、礎板・柱根が見られるものがあった。調査区のほぼ中央に位置する井戸(SE10)からは、木組みの中央に曲物を設置した井戸枠が見つかった。調査区西側の井戸からは、白磁片と押敷が出土している。なお、この西側井戸は、若干木組みの痕跡が確認されている。10区では、古代の土坑も確認された。

以上、平成10年度調査では、前年度に引き続き、当地に弥生と中世の集落が存在していたことが明らかにされている。今後、下層として確認された縄文時代の遺構の広がりや、水さらし場と思われる遺構の検討を行っていきたい。

(布尾)



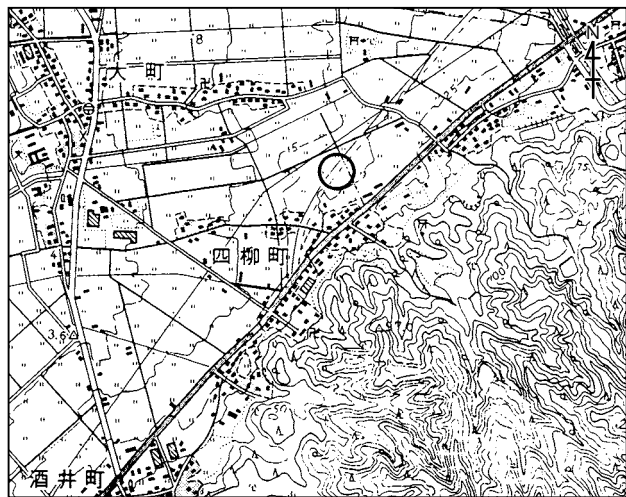
よつやなぎはくさんした
3 四柳白山下遺跡 (第5次調査) [遺跡分布図 No.22]

所在地 羽咋市四柳町地内

調査期間 平成10年5月12日～同年12月28日

調査面積 7,900m²

調査担当 川畑 誠 加藤克郎

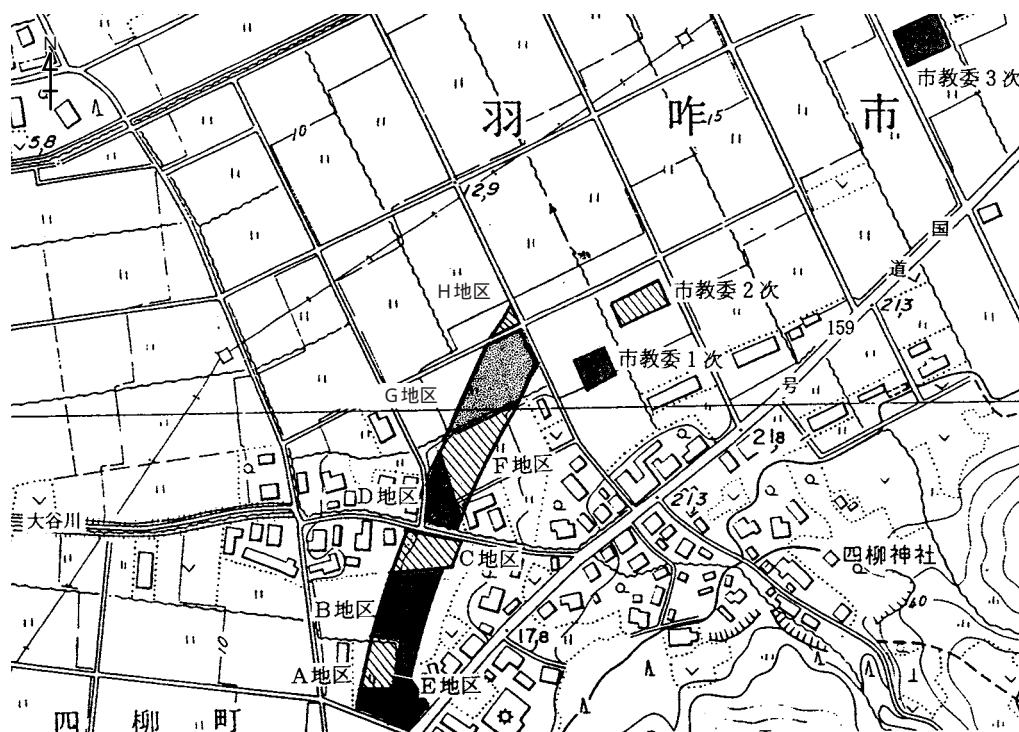


遺跡位置図 (S=1/25,000)

本遺跡は、一般国道159号線鹿島バイパス改築工事に伴い、平成6(1994)年度より発掘調査を実施し、平成10(1998)年度は第5次調査となる。平成元(1989)・2(1990)・5(1993)年度には羽咋市教育委員会によっても3次にわたり調査が行われている。現在までの調査により、縄文時代中期～近世初頭の集落・耕作地が度重なる土砂災害に遭いながら断続的に営まれたことが判明している。

平成10年度は、第4次調査によって平安時代中期～中・近世(第 面～第0・ 面)の調査を完了したG地区を掘りげると共に、新たに隣接するH地区の調査に着手した。集落跡はH地区第0・ 面(中世～近世初頭)、G・H地区第

面(奈良～平安時代前期)、G地区 1面(弥生時代～古墳時代前期)、G地区第 2面(弥生時代中期)、G地区第 1面(縄文時代晩期)、G地区第 2面(縄文時代中期)が確認されている。耕作地跡では、G・H地区第 面(平安時代中期)、G地区第 面(古墳時代)で水田面を確認している。以下、より新しい時期の生活面から順次その特色を述べる。



調査区 区割 (S=1/5,000)

(1) H地区第0・面(中世末~近世初頭の集落跡)



H地区0・面完掘状況(北から)

C地区に南限を持つ生活面で、約100m²を調査した結果掘立柱建物の柱穴、土坑などを検出した。現耕土直下であることに加え、現代に至るまでの耕作や2度の大規模な耕地整理により、遺存状態はよくない。平成9年度に調査されたG地区第0・面に連続する生活面であると考えられる。柱根の内には直径12~18cmの柱根(樹皮のみ残存)も検出されている。遺物としては珠洲焼の甕の破片、漆器椀の一部が出土している。これらの遺物からだけではこの生活面

の時期の特定は難しいが、G地区との連続性から15~17世紀代に主体を持つものと考えられる。

(2) H地区第1面(平安時代中期の水田跡)



H地区-1面完掘状況(北から)

第4次調査において、G地区第1面北側で確認された水田と連続した面である。第0・面との間の洪水土砂層の存在から、第1面は短期間で埋没したと考えられる。南北方向には畦畔状の高まりが認められるが、これはG地区で検出された畦畔とほぼ平行な位置関係にある。この畦畔はSD3101によって分断されている。また当遺構面からは複数の足跡または耕作痕らしき窪みが多く検出されている。

(3) G地区第2面(平安時代前中期の畝溝群)

当遺構面は調査区ほぼ中央を東西に貫流する古代河跡以北で検出されたもので、第4次調査第1面の耕作土を除去した状態である。溝に関しては総じて深く、肩部は立ち上がりの急なものが目立つ。また、溝によっては深浅の確認ができることと、SD3523、3524の切り合い(方位のずれ)から少なくとも2期に分かれるものと考えられる。また溝の開削時期については明確にはできていない。ただ一部の溝が水田区画からはずれのものもある。

(4) G・H地区第3面(奈良~平安時代前期集落跡)

当遺構面は遺構密度が高く、掘立柱建物約20棟、井戸1基、ピット多数を検出している。この集落跡は平安時代前期に土石流災害により廃絶したことが判明している。特にG地区南半部で検出した井戸は横板井籠組であることから注目される。掘り方は二段掘りで、上段のものは楕円形を呈し長径は



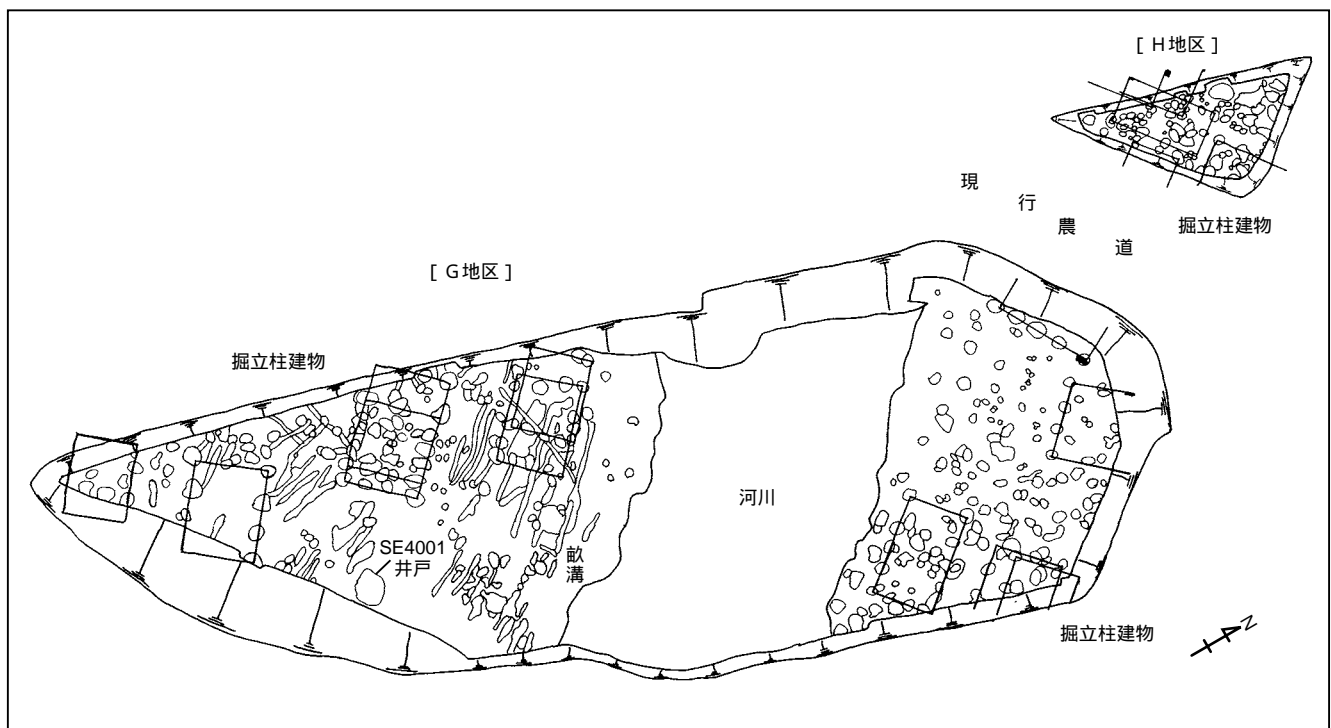
G地区 -2完掘状況(西から)

約4mである。下段は一辺約2.2mの隅丸方形の掘り方を持ち、その掘り方は南側にややふくらんでいる。上面に折り重なるようにして残存していた側板を別にする、4段残存していた。造りは稚拙であったようで、南・北の側板の最下段のものは東・西の側板の切り込みとうまくかみ合わず、井戸底面との間に隙間を生じ、そのため側板の更に内側に板を一枚ずつ当てて杭で押さえつけ、以て井戸内への土砂の浸入を防いでいる。井戸内の遺物としては齋串5本、刀

子の柄2本、桃の種子、土錘、曲げ物の破片、挽齒横櫛各1点ずつ出土している。

他の遺構からの遺物としては多数の須恵器、土師器、フイゴの羽口、鉄滓の他、調査区南半部のベース上より刀状鉄製品が出土している(直下に遺構を伴わない)。墨書土器としては昨年度以前からも発見されている「(田?)地」「寺」や人名と考えられる「粳女」の他、「服?木」「得」や、何らかの記号と考えられる「+」などが出土している。G地区では柱穴に柱根が残存しているものは一つもなかったが、H地区においては10本残存していた。

(5) G地区第 面(古墳時代水田跡)



G・H地区遺構略図(S=1/1,000)

当遺構面では古代河川以北で傾斜方向に高さ5cm弱の幅広の畔状の起伏が認められる。また傾斜に対して垂直方向には部分的ではあるが、やや明瞭な段がある。これらのことから当遺構は自然地形



G地区 面河跡護岸北肩部断面（西から）



G地区 面刀状鉄製品出土状況（西から）



G地区 面SE4001（西から）



G地区 面SE4001(側板3段目まではずした状態))

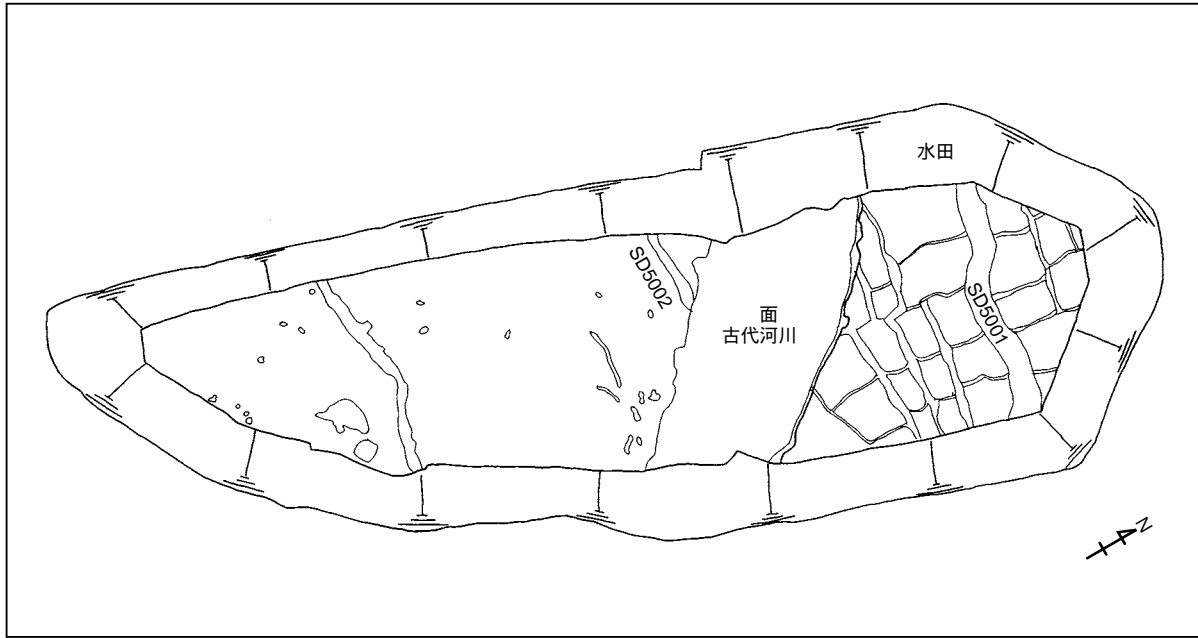
を利用した小規模水田と考えられ、その南側にはSD5002がある。洪水砂により一挙に埋没した時点では既に耕作が放棄されてから相当の時間が経過していたものと考えられる。それは、水田の水平レベル維持の欠落、畔の起伏の低さからも裏付けられ、F地区第 面水田と比べて前出的といえる。また耕作期間は、耕作土形成の不安定さから比較的短期間であったと考えられる。なお土層観察により下層第 1面集落との間に一定の空白期間を想定できる。

(6) G地区第 1面(弥生時代末~古墳時代前期の集落跡)

当遺構面はG地区を東西に貫流する古代河跡以南にて検出した。淡灰黄色粗砂をベース土としていて、溝、土坑、浅い落ち込みなどが見られたが、総じて遺構密度は低い。目立った遺構としてはSK6001竪穴状遺構があるだけである。これらのことから集落跡の中心域は調査区外の隣接した地点に存在するものと思われる。遺物は包含層から出土したにとどまる。

(7) G地区第 2面(弥生時代中期集落跡)

当遺構面は新たに確認された生活面で調査区北半部に偏在する。溝、略円形・略方形を基本とする



G地区 面遺構略図 (S=1/1,000)

多数の土坑、落ち込みなどを検出している。遺物は余り多く出土していないが、散布の状況から遺跡が北側に伸びている可能性が高い。

(8) G地区第 1面 (縄文時代晩期集落跡)

当遺構面においては、調査区の北半部が弥生時代中期の洪水に伴う土石流により大きく削り取られている(第 3面)。この第 3面のSD6801・6802は第 2面のベースをなす土層で、第



G地区 -1 竖穴状遺構 (西から)

2面形成前に一挙に流れた土石流と考えられる。砂利中には弥生時代中期の土器が混じり、第 3面土石流層形成の直後にシルト～細砂が堆積して第 2面が展開したものと考えられる。

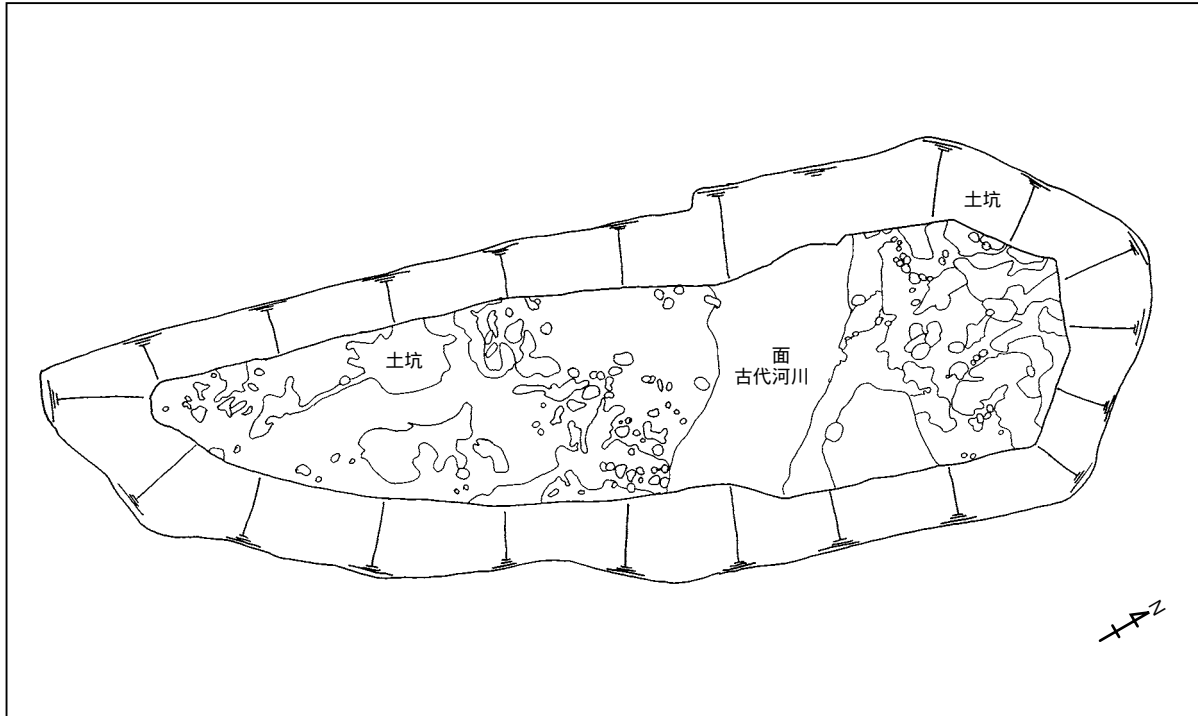
さて第 1面の遺構についてであるが、方形土坑を伴う竖穴状遺構を除けば目立った遺構が少なく、大部分は包含層の起伏と考えられる。覆土は暗灰褐色砂質土を基本としている。調査区南端部においてF地区第 1面において検出された縄文時代晩期の河跡の北肩部が認められる。

部が認められる。

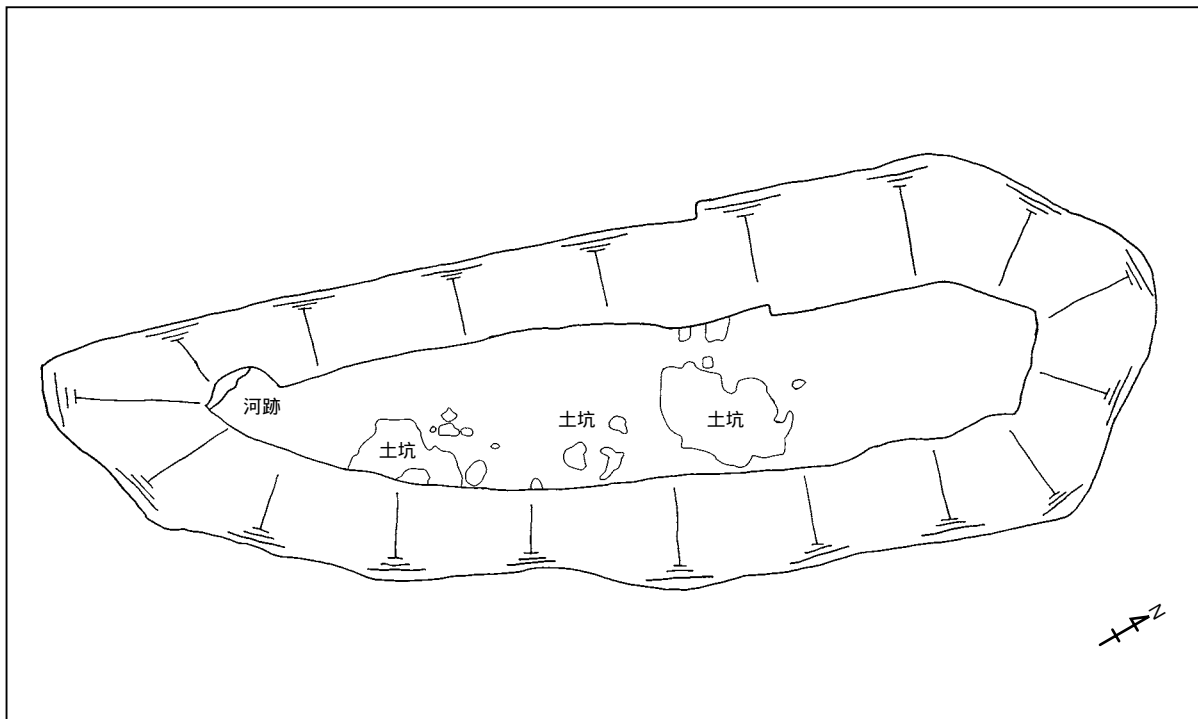
当遺構面においては、第4次調査F地区北側河跡の以北と以南とでは層位、遺物量ともに異なっていたが、G地区についても様相がかなり異なっている。遺構面の上に淡灰緑色粗砂層(洪水砂層)は存在するものの、明確な灰オリーブ色砂質土層(第 1面ベース土)は確認できなかった。おそらく、洪水砂層によりベース土が削平されたものと考えられる。

(9) G地区第 2面(縄文時代中期集落跡)

当遺構面においては土坑や大きな落ち込みなどを検出しているが総じて遺構密度はかなり低い。集落の中心地は調査区外にあるものと考えられる。遺物の散布地を確認した程度であるが、調査区北側に向かって遺物包含層が続いている。



G地区 - 2面遺構略図 (S=1/1,000)



G地区 - 2面遺構略図 (S=1/1,000)

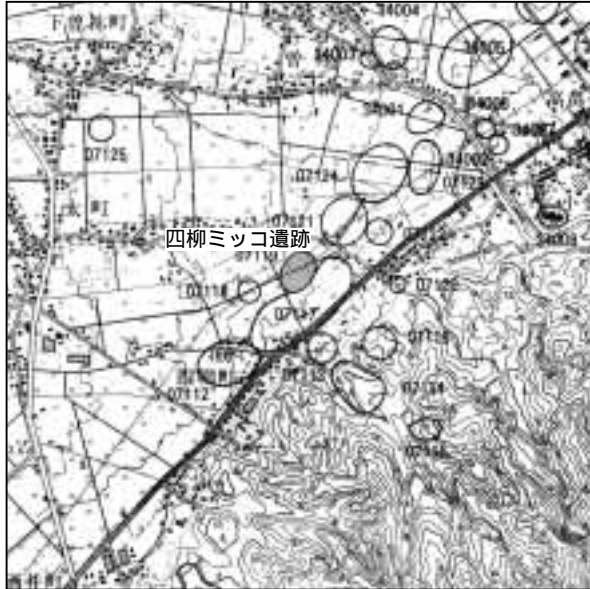
4 ^{よつやなぎ}四柳ミッコ遺跡 (第2次調査) [遺跡分布図 No.23]

所在地 羽咋市四柳町

調査期間 平成10年5月7日～12月20日

調査面積 5,200m²

調査担当 白田義彦 林 大智



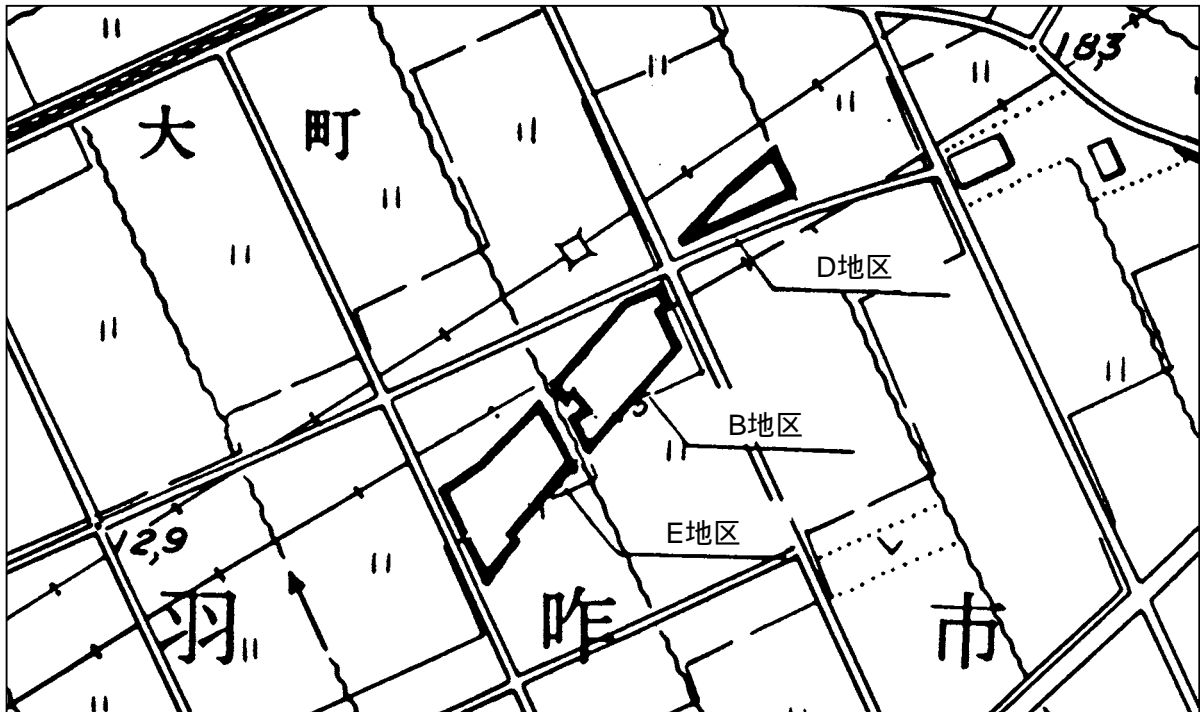
第1図 遺跡位置図 (S=1/25,000)

羽咋市四柳ミッコ遺跡は、能登半島の基部西側から七尾湾にかけて存在する、大きな帯状の平野部（邑知地溝帯）の南東側山麓地域に位置し、碁石ヶ峰山地を開析して流れる地獄谷川によって形成された、小規模な扇状地の扇端部に立地している。遺跡の南西側には、極めて近くまで旧邑知潟がひろがっていたと考えられる。

また四柳町周辺は、古代の行政区画では能登国能登郡与木郷に比定される。この郷内には、北陸道能登道に設置されていた撰才駅の所在が想定されている。

これらのことから、遺跡の所在地が港湾的性格を併せもつ、交通の要所であったことが推測できる。

本遺跡の発掘調査は、国道159号鹿島バイパス改築工事に伴うものである。平成9(1997)年度には、(社)石川県埋蔵文化財保存協会によって調査が実施され、中近世の水田跡、奈良・平安時代の集落跡、古墳時代中～後期の集落跡などが検出された。今年度は第2次調査にあたり、B地区(1,400m²)、D地区(500m²×2面)、E地区(1,400m²×2面)の3地区(計5,200m²)の調査を実施した。以下、各地区の概要を述べる。 (林)



第2図 調査区区割図 (S=1/2,500)

〔B地区の調査〕

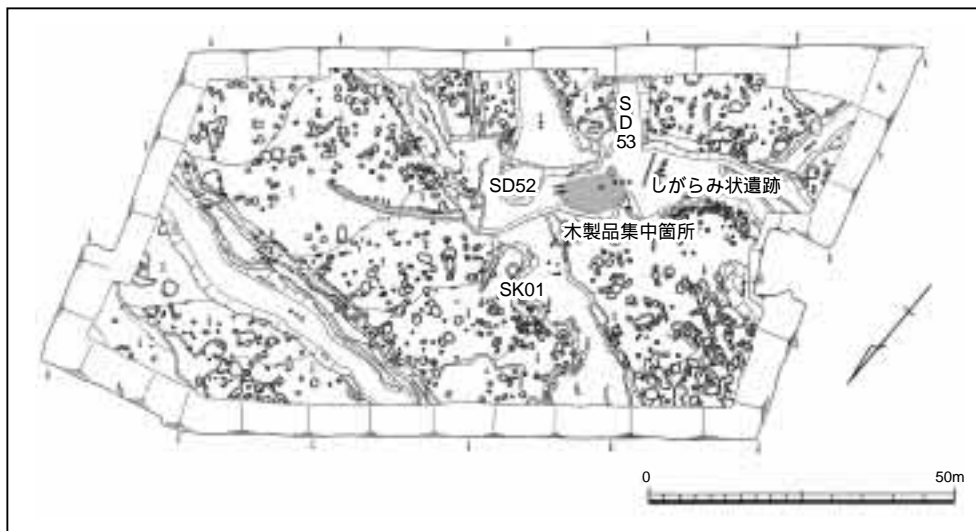
B地区は3面の遺構面が存在し、上層3面は(社)石川県埋蔵文化財保存協会によって発掘調査が終了している。今年度は最下層である面(面積1,400m²)の調査を行った。

遺構は、土坑、溝、河道などを検出した。時期は、古墳時代後期～平安時代に比定できる。

土坑(SK01)は、古墳時代中～後期の集落域の南西端付近に検出した。古墳時代後期の多量の土師器が出土したことから廃棄土坑と考えられる。

河道は調査区全面に認められ、北東の丘陵から西側に存在した旧邑知瀧に流れていたと考えられる。河道(SD52)と他の河道(SD53)が合流する箇所からは、しがらみ状遺構を検出した。しがらみ状遺構は、丸太を流れに直交して2本置き、下流側を4本の杭で留める簡単な構造のものである。水量調節および治水機能があったと考えられる。しがらみ状遺構から下流の河道肩部には杭列が認められることから、下流部が用水に用いられていた可能性が高い。上流からは木製品が数点まとまって出土した。出土した木製品には、槽、木製盤、曲物、木沓、ヒョウタンの果皮などが認められる。曲物の内面には漆が付着しており、底板および側板にはハケ状のもので漆を掻き取った痕跡が認められる。漆の運搬もしくは貯蔵に用いられたと考えられる。木沓は隣接する四柳白山下遺跡につづき県内で2例目の出土である。これらの木製品は、東側に存在した居住域から廃棄されたものと考えられる。時期は8世紀後半～9世紀前半に比定できる。

以上のことからB地区周辺は、古墳時代中期～平安時代において集落の縁辺部であり、農作物の生産および各種廃棄行為の行われる場として機能していたものと考えられる。(林)



第3図 B地区 面全体図(S=1/500)



写真1 しがらみ状遺構(南東から)



写真2 木製品出土状況(南西から)

〔D地区の調査〕

D地区では2面の遺構面を検出した。

面（面積500m²）は、調査区北半部が耕地整理時の削平を受けていたため、南半部のみ遺構・遺物を確認した。

遺構は、掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構1棟、畝溝などを検出した。掘立柱建物跡は梁間2間で、主軸は東西方向である。竪穴状遺構は一辺4m程度で、隅丸方形の平面形を呈する。南東隅に粘土塊を検出した。時期は8世紀後半頃に比定でき、掘立柱建物跡もほぼ同時期と考えられる。畝溝は東西方向に9条検出した。時期は中世と考えられる。

面（面積500m²）では、古墳時代中期（5世紀中葉頃）の集落跡を確認した。

遺構は、竪穴住居跡6棟、溝数条などを検出し、多くの土器が遺構にともなって出土した。

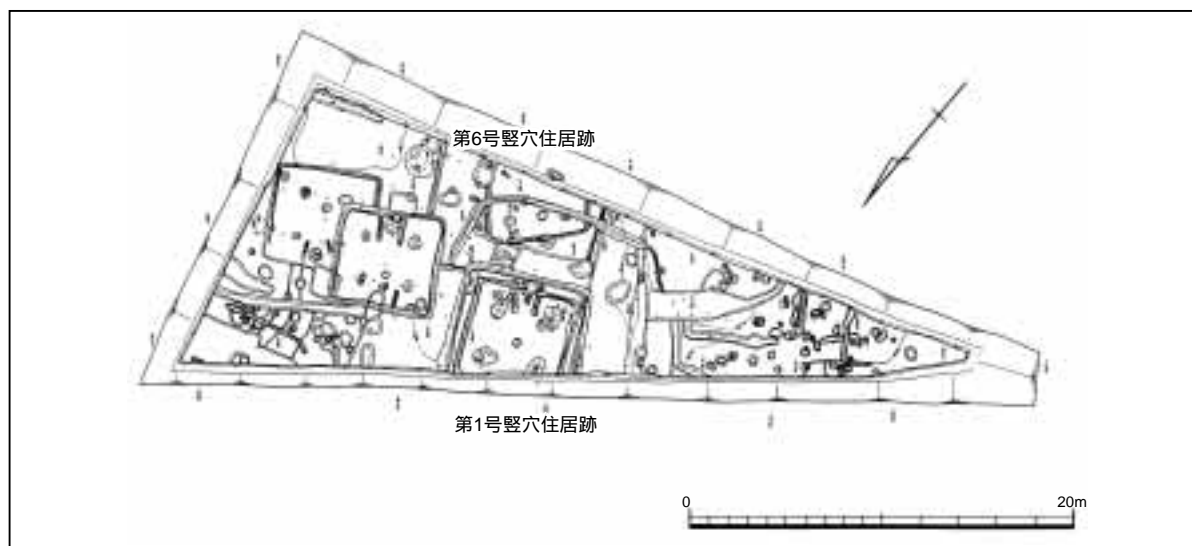
すべての竪穴住居跡は、支柱穴が4本で、中央付近に炉を備えている。また全周する壁溝をもち、東もしくは西側の壁際には2本の溝に挟まれた2段掘りの土坑が存在する。土坑の脇には台石を設置している。第1・2号竪穴住居跡には、他の住居跡に規制されながらも外周溝が存在する。

第1号竪穴住居跡は約7.1×6.5mを測り、隅丸方形の平面形を呈する。この住居跡は建て替えが行われており、古い住居跡（約7.1×6.5m）から新しい住居跡（約5.6×5.9m）に縮小している。新しい住居跡の床面（古い住居跡の床面から3cm程度上）からは、多くの土器が出土し、それらに混じって、鞆の羽口が2点出土した。1点は高杯の脚を転用したもので、もう1点は専用のものである。また、住居跡東壁付近からは台石を検出した。このことから、竪穴住居内での鍛冶作業が想定されたため、住居跡の覆土を洗浄・磁選した結果、微量ながら粒状滓に類似する資料を得ることができ、1点ながら鉄滓も出土している。また、出土した土器のなかには、陶器古窯跡群で生産されたと考えられる須恵器が出土しており、ON46段階（5世紀中葉）に位置づけられる。以上のことから、第1号竪穴住居跡では、5世紀中葉に小規模・短期間ながら鍛冶作業が行われていたものと考えられ、その技術は畿内から導入されたものと推測できる。この住居跡からは滑石製白玉も30点以上出土している。

第6号竪穴住居跡は一辺約9.2mを測り、遺跡中最大の規模をもつ。

調査は、来年度も北東に向かって継続して行われ、工事着工前にはA地区とD地区の間にある農道部分の調査を行う予定である。

（林）



第4図 D地区 面全体図（S=1/400）



写真3 D地区 面調査区全景（北東から）



写真4 D地区 面第1号竪穴住居跡土器出土状況



写真6 D地区 面完掘状況（南から）



写真5 D地区 面第1号竪穴住居跡完掘（西から）

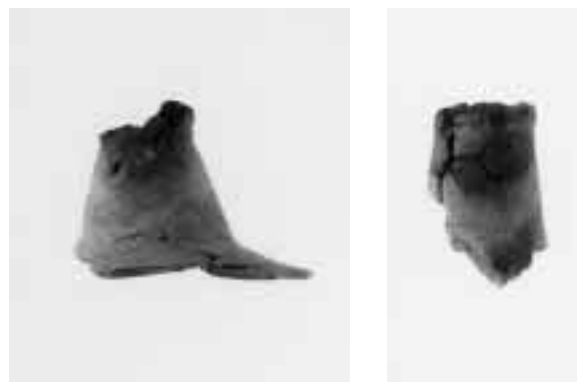


写真7 竪穴住居跡出土のフィゴ羽口（S=1/3）

〔 E 地区の調査 〕

調査区南東コーナー付近で、狭い範囲ではあるが、現地表下約 1 m にて水田面が検出された。地元の発掘調査作業員の話によると、戦後の耕地整理前の水田より古いそうである。また、平成 9 年度の四柳ミッコ遺跡の調査（第一次）で検出された近世前半期の遺構面の上層にあたるので、その水田面の年代はその間となる。その下層において、平成 9 年度の調査で検出された中世の水田面と同一の水田面を検出した。その面は、現地表下約 1.5 m である。

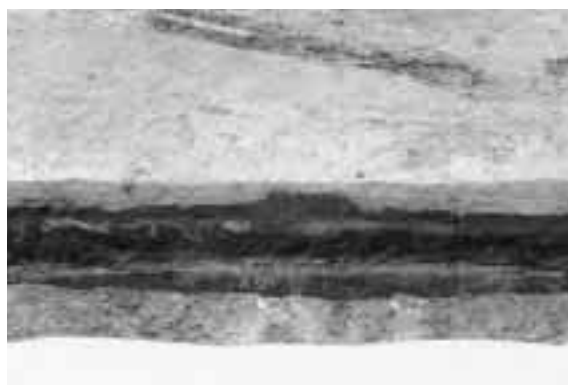
平成 10 年度の調査では 2 面の水田面が検出された。検出された水田面は 2 面とも、乳灰褐色砂に覆われていた。この覆土は洪水時に堆積したものである。隣接する四柳白山下遺跡でも古墳時代、古代、中世の水田面が検出されている。このように水田面が頻繁に検出されることは稀である。このことは両遺跡の背後の山々が地滑りを起こしやすいという特性による。したがって、大きな雨が長く続くと大量の土砂を排出する。洪水とともにこの土砂が水田を覆ったので、当時の状態で水田面が保存されたのである。

中世の水田は合計 26 枚検出された。1 枚の水田の最小面積は約 9 m²、最大面積は約 70 m² である。南北方向に平行して伸びる畦は 6 本あり、それらは真北より東へ約 15° 傾いている。それにほぼ直交する東西方向の畦は 3 本ある。これらの畦によって水田はほぼ正方形か、長方形に区画される。調査区南側の畦は、直線的に伸びない。よって水田の形も三角形、五角形、不定形なものも様々である。畦の規模は一律で、高さは 15 cm 前後、幅は 25 cm 前後である。また、一部の畦上には足跡がある。足跡列は畦が直線的に伸びる北側の水田に多くみられる。足跡列は南北方向に並ぶものと東西方向に並ぶものに分かれるようである。それらの平均的な足跡の規模は長さ 20 cm 前後、幅 10 cm 前後、深さは 5 cm 前後である。

（白田）



近世水田？畦検出状況



中世水田の畦の断面



中世水田足跡検出状況



中世水田完掘状況（南西から）



ドット部分は畦



E 地区中世水田遺構図 (S=1/400)



E 地区中世水田面完堀状況

5 かんぼうじこふんぐん 観法寺古墳群〔遺跡分布図 No.34〕

所在地 金沢市観法寺町地内

調査面積 3,000m²相当

調査期間 平成10年7月7日～12月28日

調査担当 安中哲徳 河合 忍



遺跡位置図 (S=1/25,000)

観法寺古墳群は、河北潟南東の丘陵から北西方向に派生した尾根上、標高約60mに位置し、丘陵裾の北側には梅田B遺跡が、丘陵南側には観法寺瓦窯が所在する。平成10(1998)年度から一般国道8号東部環状道路改築工事に伴い調査が行われた。

当初は2基の古墳の発掘を目的として調査に入ったが、調査範囲外にも古墳の存在が想定されたため、協議の結果、調査範囲が拡張され、拡張する部分を優先して発掘調査を行うこととなった。

調査の結果、残念ながら新たに古墳を発見するには至らなかったが、調査区西側から中央付近にかけて、やせ尾根頂部を尾根筋に沿って東西に切

られた幅80cm前後・深さ1m前後のV字形の溝及び、溝の終わる箇所の周囲に6～7基の方形の土坑が確認された。また、調査区西端の溝近くや、東端にも同様の土坑1基づつが検出されている。土坑の底中央部分が窪んでいることから、柱が立っていた可能性があり、調査区中央付近の土坑群は掘立柱建物の柱穴になる可能性も指摘されている。溝の底及び土坑からは遺物の出土は認められず、時期は不明であるが、溝の上部から北側斜面にかけて古代末のものと思われる柱状高台を有する土師器が集中して発見されている。意図的に土器を打ち欠き、高台部のみを廃棄していたと判断できることから、溝が埋まりかかった時期に何らかの祭祀行為が行われていたと推測される。このような尾根頂部を縦断するV字形の溝についてはこれまで類例もなく、その性格については判断し難い。地境のような機能を推測しているが、土坑との関係も不明であり、今後の各地での類例の増加を待ちたい。

また、調査区東側では尾根を南北に横断して切る幅3～4m・深さ1m前後のV字形の溝が検出されている。出土遺物もなく時期は不明であるが、観法寺城が存在するとされる丘陵上部にかけての尾根上に同様のものと思われる溝がいくつか見られることから、城に伴う掘割の可能性がある。

初年度の調査では、古墳に伴う大きな調査成果は得られなかったが、かわりに性格不明の溝や土坑が確認され、出土遺物もおもに古代から中世にかけての土師器が点在して出土するにとどまった。溝については次年度の調査区にも延びるため、今後、何らかの性格が明らかになることを期待したい。(安中)



調査区全景(西から)

6 藤江^{ふじえ}C遺跡 A2・B2・C・D・F地区(第7次調査)[遺跡分布図 No.39]
 所在地 金沢市藤江北1,2,3丁目地内 調査期間 平成10年5月11日~平成11年1月8日
 調査面積 A2地区 2,300m² D地区 1,970m² 調査担当者 中森茂明 本田秀生 久田正弘
 B2地区 3,000m² F地区 1,200m² 岩瀬由美 大西 顕 西田昌弘
 C2地区 890m² 浅香直子 藤井秀明 春田幸恵
 加藤裕介

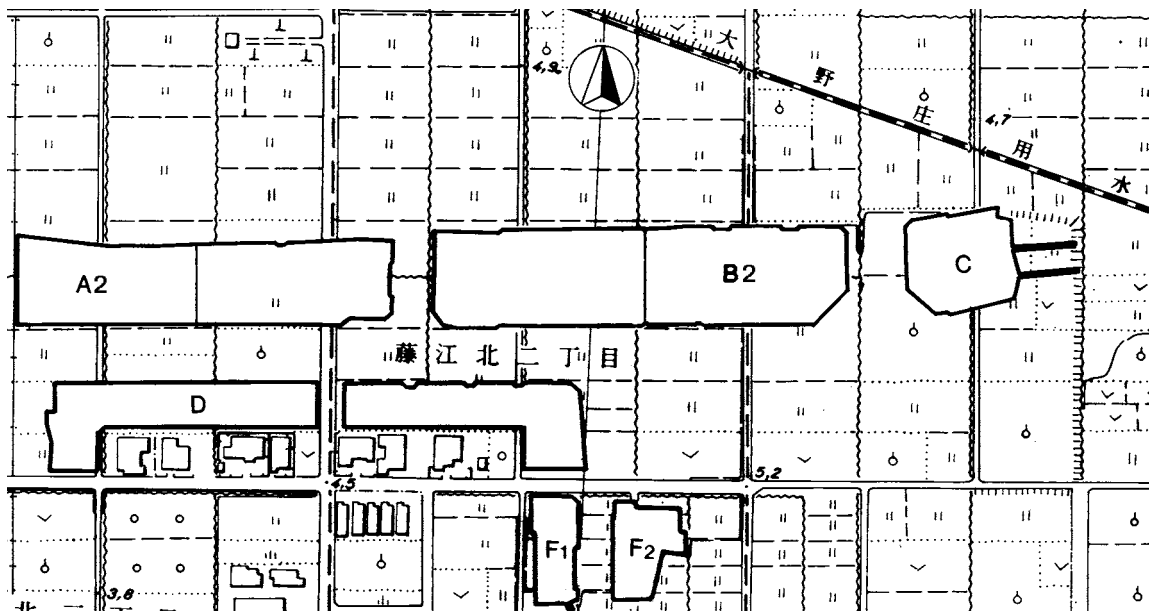
本調査は、金沢西部地区土地区画整理事業に係るものである。平成2(1990)年度から調査が実施され、これまでに54,070m²が調査された。そのうち、最終年度にあたる昨年度は9地区、18,040m²の調査を実施した。

本遺跡は金沢市街地の中心部から北西約5km、犀川と浅野川に挟まれた沖積平野の微高地上に位置する。これまでの調査で、縄文時代から近世・近代にわたる複合遺跡であることが確認されている。特に、広範囲にわたり縄文時代から鎌倉・室町時代にかけての集落跡が確認されたことが注目される。昨年度調査においても、古墳時代から奈良・平安時代を中心に縄文時代から近世・近代にかけての住居跡・井戸跡・墓跡・区画溝・自然河道などの遺構とそれらに伴う遺物が確認された。



遺跡位置図 (S=1/10,000)

現在本報告に向けての遺物整理が行われているところであり、詳細については不明瞭であるため、本書では先に刊行された創刊号ですでに紹介されているA1・B1・Eの3地区を除く6地区の内、A2・B2・C・D・Fの5地区、合わせて9,360m²について概略を紹介するものとする。(藤井)



藤江C遺跡全体図

【A2地区】

A2地区は、本遺跡の西端部分2,300m²である。確認した遺構は土坑24基、溝跡96条、ピット52基である。しかし大半は近世・近代の遺構とみられ、又、遺物出土も極めて少ないため、時期を特定できる遺構は少ない。

調査区のほぼ全面に土取溝や近世・近代の溝跡がみられるため、土坑としたものの中には、本来溝の一部であった可能性があるものが含まれる。遺物を伴うものは5基である。そのうち2基については石鍬・須恵器・弥生土器などが出土しており、古代の井戸跡の可能性もあるが、井戸枠等の木製品は出土していない。溝跡96条についても削平により寸断されたとみられるものが多く、実数は約3分の1、30条程度とみられる。そのうち大半は近世・近代のものともみられる。遺物出土はないが、過年度調査の成果等から、古代とみられるものが3条確認された。性格は不明である。52基のピットについては、遺物を伴うものは2基のみである。柱穴とみられるものが2基確認されたが、建物跡は確認されなかった。

以上の状況から、近世・近代の遺構を除くと遺構密度は極めて低く、削平によるものとも考えられるが、周辺の調査区の状況から見て、本調査区は集落縁辺部にあたるものと推定される。（藤井）

【C地区】

C地区は、遺跡の北東部に位置する。本調査区の西部と南部は、平成3(1991)年度に調査が実施されている(石川県立埋蔵文化財センター 1997 『金沢市藤江C遺跡』)。本調査区では弥生時代から古代にかけての遺構を確認したが、遺跡の縁辺部のために、遺構や遺物は少ない。確認した主な遺構は、掘立柱建物、溝、土坑、井戸等である。

掘立柱建物は2棟を検出した(SB001・002)。SB001は調査区の北西で検出した2×3間の側柱建物である。SB002はSB001の南で検出した。規模は2×3間と考えられるが、北部の柱穴は近世溝によって壊されている。

調査区の中央を南北にはしるSD001は、過年度調査区より続く溝である。遺物は古代のものが大半を占める。調査区の南西を北東方向へはしるSD006・008も過年度調査区より続く溝であるが遺物は出土していない。

土坑は、SB001南西角の主柱穴の西側に弥生中期の土器が出土したSK001の他は、時期の特定や性格は不明である。

本調査区は、遺跡の縁辺部であるために確認できた遺構は少ないが、他の調査区や過年度調査とあわせて、遺跡の性格を検討するための一助となるだろう。（三谷）



A2地区全景



C地区全景

[B 2 地区]

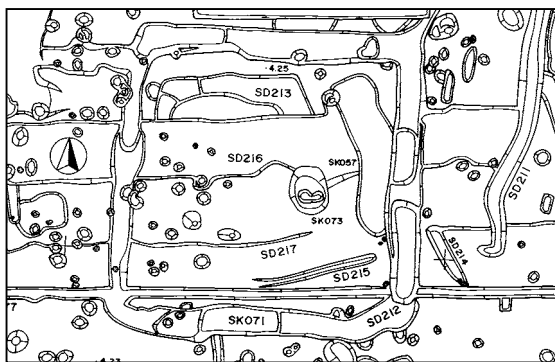
本地区は、藤江C遺跡中枢部から東縁部に位置する。検出面での標高は4.2m前後である。

古墳時代前期では、布掘建物2棟（礎板出土）、掘立柱建物8棟、床面残存の竪穴式建物1棟（SI004）、周溝をもつ平地式建物1棟（SH002）がある。SI004は地山質土で床を貼っている。また、北西隅が土坑状にくぼんでおり、そこから多量の土器が出土した。SH002は4本主柱で3回の建て替えがある。また布掘建物（SB038）及び土拵（SK053）と重複しており、数時期の変遷がたどれる。またすぐ東側に比較的大きな溝（SD147）が流れており、多量の土器が廃棄されていた。この溝の東側では当該期の遺構が極端に減ることから、集落東縁を区画する性格があるものと推定される。SK053は長辺約3m、短辺約80cmの長方形の平面形態をもち、覆土からは土器片とともに管玉が出土しており注目される。掘立柱建物は、柱穴掘方が大型な2棟や、1×1間タイプ3棟を含み、これら建物の性格付けが今後の課題である。

古墳時代後期の井戸（SE015）からは口縁部が欠損した土師器甕が出土している。当該期の建物はこの井戸を取り囲むように配置されている。

平安時代では9世紀代の掘立柱建物（SB032の柱穴から土師器の一括遺物を得られた）を確認したほか、掘方2m前後の大型井戸（SE008）も検出した。井戸側の抜き取り穴からは、横板組の部材とも思われる木製品が出土しており注目したい。また、この後に続く遺構群として、9世紀末～10世紀代の井戸を多数確認している。このうちSE007は縦板組隔柱横棧止めの井戸側（60×45cm）を採用している。しかし、この時期は井戸の数に比して建物数が少ないのが気になるところである。

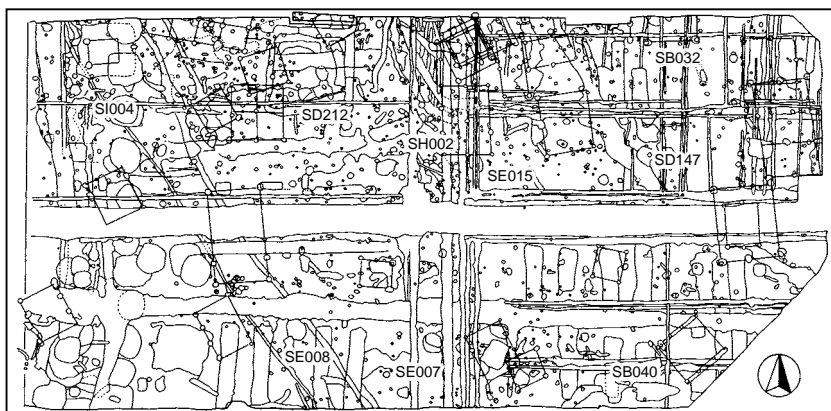
中世では方形周溝状遺構（SD212）がある。一辺約6.5mの方形を描くもので、溝内には長さ2m前後の土坑状の落ち込みが4カ所確認された。周囲への排水が目的と思われる溝もある。さらにSD212の内側を沿うようにSD213も存在し2重の溝となっている。溝覆土内では多数の土器片が出土した（石は無い）が小片で遺構所属時期の判断は難しい。白磁片（類）を含むことから11世紀後半～12世紀初頭に所属を求めることは可能である。墓、堂などの性格が考えられる。 （大西）



方形周溝状遺構（S=1/200）



SH002及びSE015周辺建物群



SE008

B 2 地区全体図（S=1/700）

[D地区]

本調査区では、古墳時代および中世を中心として、近代に至るまでの遺構を検出している。

古墳時代の遺構としては、調査区南東部に前期に比定される井戸を1基確認した（SK013）。井戸枠は出土しなかったものの、土層の断面観察および山陰系甕の出土状況などから井戸と推測している。周辺には、特徴の類似した覆土をもつ溝や土坑、ピットが検出されたが、いずれも遺物が小片のため時期の決定は難しく、関連性を捉えるまでには至らなかった。

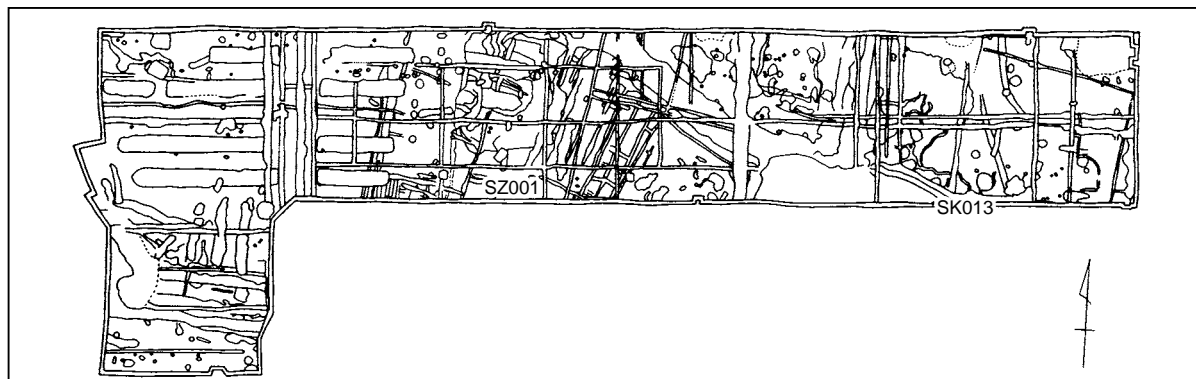
中世の遺構としては、調査区中央部で周溝をもつ墓跡（SZ001）を確認している。周溝の形状はほぼ方形を呈しているものの、南部で舌状部をもつといった特異な形状をみせている。方形の一边は約10mを測り、舌状部を含めると約13mとなる。周溝部は幅3m程で、弧状ないし逆台形状を呈する。遺物の出土は少なく、13世紀から14世紀に比定される土師器皿や珠洲焼の破片が数点出土したにとどまる。それとともに、焼石は少なかったものの、拳大から幼児頭大ほどの礫が散在してみられた。また、周溝の西溝においては、土坑を5基確認している。平面形は、現状で長軸1m～2.8mの不整楕円形を呈する。いずれも、上層では炭化物とともに、骨片を多く含む層が確認できた。この内、北西隅に位置する土坑からは木箱と考えられる木製品の底板が出土している。側板はその痕跡を残すのみであったが、法量約73×54cmの長方形を呈し、確認面からの深さは最大12cmを測る。後世の削平を大きく受けているとはいえ、上層の存在から、火葬跡とも思われたが、そういった痕跡は確認されなかった。また、流れ込みと考えられるが、五輪塔（火輪）の一部も本土坑上層より出土している。土坑群の時期に関しては、15世紀頃に比定される土師器皿が出土していることから、周溝との間に時期差を想定している。現段階では、出土遺物や北西端の土坑の一部が周溝から突出し、北東方向にその平面プランを延ばしていることなどから、溝が形成された後、それを意識したかたちで土坑群が形成されたものと考えている。南部にみられる舌状部の性格等は掴みきれておらず、今後既調査で確認されている屋敷跡などを含めた全体像の把握につとめていきたいと思う。 （西田）



周溝をもつ墓跡完掘状況（北東から）



木箱跡枠内半截状況（南西から）



D地区全体図（S=1/700）

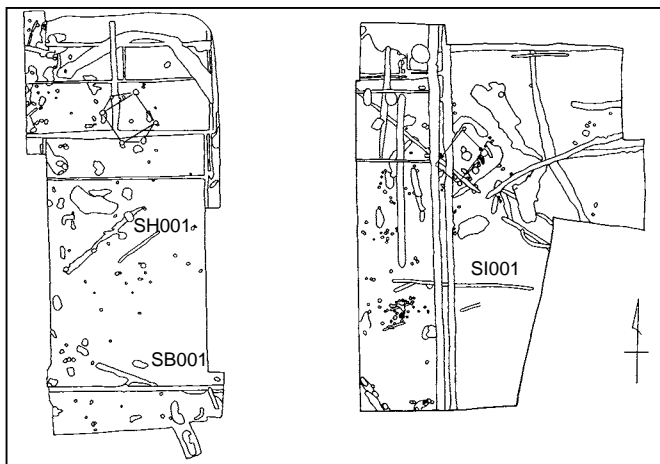
[F 地区]

本調査区は、遺跡の最南端に位置し、中央を南北に通る現道をはさんで西側を F 1 地区、東側を F 2 地区とした。

F 1 地区では、古墳時代前期の遺構として平地式建物跡 1 棟、布掘り式建物跡 1 棟が確認できた。平地式建物跡 (SH001) は隅丸形状に巡る周溝をもち、その内径は約 14m を測る。本遺跡で確認した当該期の建物跡のなかでは最大規模のものである。支柱穴は北西 - 南東方向を軸として方形に 4 基、あるいは 6 基配置されるものと思われる。また、同一地点における建て替えをおこなっているようであり、建物の一定期間の存続が認められるであろう。また、遺構の西端を削平されてはいるものの、おおよそ建物の南東に開口部をもつものと思われる。布掘り式建物跡 (SB001) は遺構の大半が調査区外に及んでいたため、一部調査区を拡張して調査をおこなった。柱穴は北西 - 南東方向を長軸として 1 × 3 間が確認できた。

F 2 地区では、古墳時代前期の遺構として竪穴式建物跡 1 棟、布掘り式建物跡 1 棟、溝数条を確認した。竪穴式建物跡 (SI001) は土坑が連なった状態の周溝をもち、支柱穴は北西 - 南東方向を軸に 1 × 1 間の方形に 4 基配置されると思われるが確認できたのは 3 基のみである。また、住居内ほぼ中央では土坑が 2 基確認できたが焼土や炭化物等の出土は見られず、現在のところ性格は明らかではない。また、床面、周溝部ともかなり削平されており全プランを確認することはできなかったが、周溝の南東では入り口付近のスロープ形成の為と推測できる周溝の張り出しが認められ、同方向に開口部をもつものと思われる。布掘り式建物跡は大半が現道下にかかるため壊されているものと思われるが、北西 - 南東方向を長軸として北東列の柱穴 3 基が確認できた。

本遺跡では、F 地区北側に位置する自然河道跡以北において、古墳時代前期の集落跡が大きく展開していることが明らかとなっている。本調査区で確認した建物跡はすべて北西 - 南東方向を軸としていること、概ね住居の南東に出入り口である開口部をもつことから当該期の集落跡とほぼ同時期のものと思われる、自然河道跡以南にまで集落が展開していたことが窺える。また、本調査区南端は鞍部に近いことから、本調査区南端を以って古墳時代前期に営まれた集落の縁辺部にあたる可能性が高い。



F 1 地区 (左) ・ F 2 地区 (右) 全体図 (S=1/700)

(加藤裕)



平地式建物跡



竪穴式建物跡

7 ^{ふじえ} 藤江B遺跡 (第6次調査) [遺跡分布図 No.40]

所在地 金沢市藤江北1・2丁目地内

調査期間 平成10年7月27日～平成10年10月26日

調査面積 2,460m²

調査担当 中森茂明 藤井秀明



遺跡位置図 (S=1/25,000)

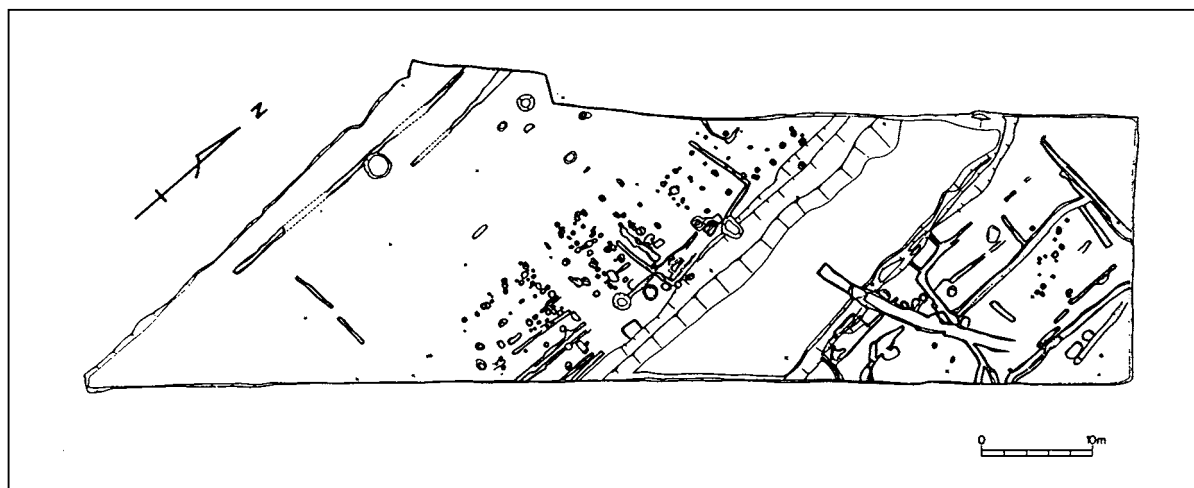
藤江B遺跡は、金沢西部土地区画整理事業に伴い平成6(1994)年より発掘調査が行われ、本年度は最終年度として第5次調査と第6次調査が行われた。ここでは、第6次調査について報告したい。

遺構面は調査区の西側約3分の1で近世・近代の攪乱が著しく、この地点での遺構の検出・遺物の出土は若干量にとどまっている。したがって、遺構・遺物は調査区中央部付近より東側からのものが主である。

本年度の調査では、掘立柱建物2棟、土坑32基、溝34条、井戸3基を検出している。2棟の掘立柱建物(SB01・SB02)は古代のものと考えられる。このうち、SB01は、2間×2間の総柱建物であり、SB02は2間×2間の側柱建物であった。SB02の柱穴の1つからは礎石が検出されているが、柱穴は2段になっており、礎石は上段から検出されている。他の柱穴も同様に2段になっていることから、同じ場所で同じ規模の建て替えが行われたと考えられる。2棟の掘立柱建物の間には井戸(SE01)があった。SE01は径約1.2mを計り、曲物埋設の井戸枠を持つものであった。井戸枠の残存状態は比較的良好であった。



SE01井戸枠出土状況



遺構全体図



近世大溝（北から）

調査区中央を南北にはしっているのは近世～近代の大溝である。遺物の量はあまり多くないが、溝の最下層から、下駄・櫛・黒地に赤絵の椀などの漆器が十数点出土している。この他に樽の部材が出土している。これらの中には、「小松屋」・「辰巳屋」と焼印が入ったものも含まれていた。樽は部材とともに出土した栓の形状からそれは醤油樽であったと考えられる。

第6次調査をもって藤江B遺跡の発掘調査は完了した。今後は、過年度の調査成果や、遺物整理作業を通して集落全体の構造、あるいはその変遷が明らかにされていくことが期待される。（中森）



SB01完掘状況（東から）



SB02完掘状況（東から）



調査区全景

8 とみず 戸水B遺跡(第12次調査)(遺跡分布図 No.38)

所在地 金沢市藤江北4丁目地内

調査期間 平成10年9月16日～平成11年1月8日

調査面積 2,790m²

調査担当 本田秀生 岩瀬由美 中西洋司
西田昌弘 宮川彩子

第12次調査区は旧金沢西高等学校のテニスコートからグラウンド部分に位置し、南北に細長いL字型で、推定される本遺跡の範囲のちょうど中心部分にあたる。本遺跡は弥生時代中期末の土器の標識遺跡であり、今回の調査でも「戸水B式」の土器が多く出土している。遺構は、周溝を持つ平地式建物跡4棟、布掘り建物跡2棟、掘立柱建物跡数棟、溝・土坑・ピット多数などを検出した。また、調査区南東端で検出した溝の内外では遺構密度が異なることから遺跡の南東部縁辺が確定された。



遺跡位置図 (S=1/25,000)

平地式建物跡は調査区南端部に3棟、中央部に1棟確認された。このうち、後者は第10次調査で検出されたものの続きである。平地式建物跡は第6次調査分を合わせ、これまでに3棟確認されている。本調査の結果から、これらが北部域、南部域の2箇所、或いは中央域を設けた3箇所に収束することが推定され、居住域がグルーピングできる可能性が指摘される。北部域の平地式建物跡では支柱穴が6本確認されるのに対し、南部では4本という違いが見られた。また、柱の据え方にも差異がみられ、北部では根がらみ遺構などが確認されたのに対し、南部では横木を渡しただけのものなど様々である。これらの違いが時期差なのか、それとも住民の出自の違い等によるのかは遺物の詳細な検討結果を待たねばならないが、周溝部からの出土土器はいずれも戸水B式期に属するものである。布掘り建物跡は、本遺跡では初めて検出されたものである。柱根は確認されなかったものの、柱の沈下を防ぐための構造が見つかったため、建物跡と判断した。その構造は柱の下に当たる部分に木材を据えたもので、樹皮付きの丸太を半截し、切断面を下にした状態で溝に対して直角に3本ないし2本上下に重ねていた。丸太1本で半截材2本と同じ高さが得られるにもかかわらず、わざわざ半截しているのは、切断面を下にした方が接地面積が増大し、沈下防止の効力が高められるという知恵からであろう。見方を変えれば、そうした工夫なしには住めないほど地盤の軟らかい土地であったに違いない。布掘り建物跡は、弥生時代終末～古墳時代前期に多く見られる遺構であるが、本遺跡での年代は、出土土器、切り合い関係などから戸水B式期のものと考えられ、北陸地方において最古級に位置付けられるものと言える。

上記以外の建物跡としては、掘立柱建物跡が数棟検出されたが、出土遺物が少なく、時期は特定できていない。いずれも1間×2間の小規模なもので、柱穴も径20cm前後と小さい。その他の遺構としては割り貫きの井戸枠が遺存した井戸跡が2基、枠はないが井戸とみられる土坑が1基、甕類が多く入った一括土器出土土坑3基、ドングリやトチの貯蔵穴が数基確認された。

遺物では、土器のほか、平地式建物跡の周溝から直径約2cmの石製の指輪が1点出土している。石製の指輪は全国的に見ても珍しく、弥生時代のものとしては北陸では初めての出土である。それ以外の特筆すべき遺物には、溝内から出土した木製高坏が挙げられる。下半部しか出土していないが、底面にコブ状の突起を有する特異な製品で、突起は11個と推定される。いずれも戸水B式期に帰属する遺物である。

(岩瀬)



南側調査区全景



平地式建物跡完掘状況



木製高杯出土状況



布掘り建物跡完掘状況



同横木出土状況

9 ^{しばやまでむら}柴山出村遺跡〔遺跡分布図 No.80〕

所在地 加賀市柴山町地内

調査期間 平成10年7月21日～10月16日

調査面積 700m²

調査担当 安 英樹 立原秀明



遺跡位置図 (S=1/25,000)

柴山出村遺跡は加賀市の北東端、柴山台地の南西部斜面から旧柴山潟縁にかけて立地する。約70,000m²にわたって広がる大規模な遺跡であるが、その中央部分は戦後の土取りにより消滅し、潟縁の低地 (A地点) と丘陵斜面 (B地点) に分断されて存在している。

A地点は昭和13(1938)年・昭和31(1956)年の発掘調査で弥生時代前・中期の土器が出土した地点が含まれ、柴山水底遺跡とも重複する。県下を代表する弥生時代の遺跡として周知されているのはこの部分である。

B地点は今回の発掘調査地点が含まれる。調査は県営ほ場整備事業に起因し、農道が建設される部分について平成9(1997)年度から継続して実施している。現在までに確認された主な遺

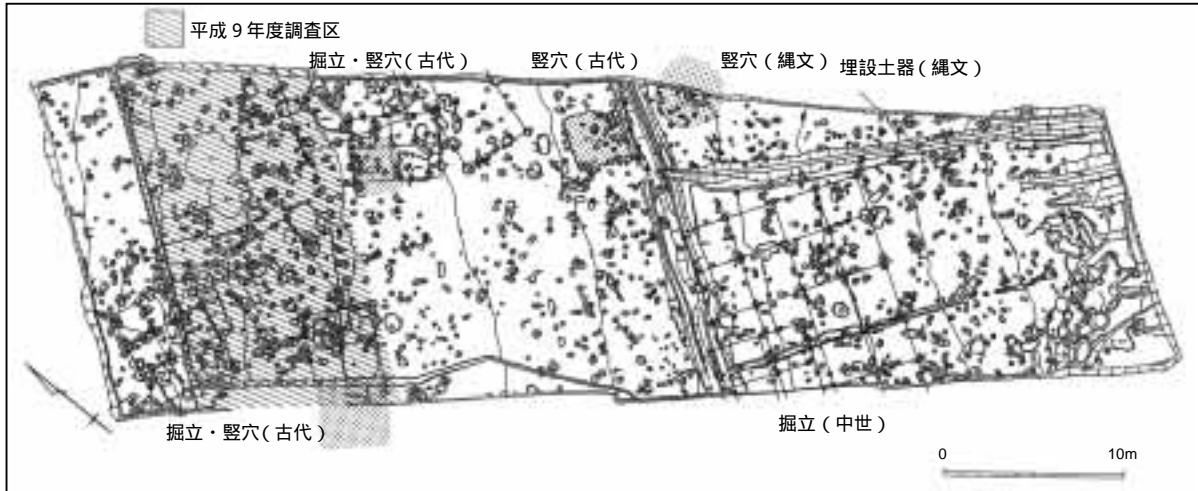
構・遺物の時期は、縄文時代、古代、中世である。以下、時期別に紹介していきたい。

縄文時代では石囲炉をもつ竪穴建物1軒、埋設土器1基を検出した。石囲炉は長さ約70cm×幅約50cmの大きさで、囲い石の一つに縄文土器が組み合って発見された。埋設土器は、竪穴建物の南に約15m離れた地点で発見された。正立した状態で埋め置かれた縄文土器の底は打ち抜かれており、何らかのまじないの意味があるものと考えられる。時期は縄文中期頃と推定しているが、土器の遺存が悪く、詳細は不明である。この時期は遺跡の西方約500m先に柴山貝塚(市指定史跡)が存在しており、当時の柴山丘陵にいくつかの集落が展開していた可能性が高くなったと言える。

古代は8～9世紀代に中心時期がある。平成9年度の調査と通算すると竪穴建物3軒、掘立柱建物5軒以上を確認している。竪穴建物の平均的な規模は一辺約3mのほぼ正方形で、うち1軒には炉が付いている。竪穴には確実な柱穴が見つかっておらず、小型で簡易な構造が推定される。掘立柱建物は方形掘り方の柱穴で中世の建物と区別でき、2×3間規模の側柱構造が主体であるが、例外的に3×3間の総柱構造のものが1軒検出されている。各種の建物は、おそらく、竪穴が作業所や物置き、掘立柱は側柱が住居、総柱が倉庫として使い分けられていたものと考えられる。ただし、2×2間の総柱建物については、時期が古代か中世か検討中である。

中世は12世紀代の掘立柱建物1軒を検出した。柱間隔が約2.5mで、東西4間以上×南北4間規模で、床面積は100m²を超える大型建物である。中世の遺跡周辺は北野社領「^{とみつかのしょう}富墓庄」の比定地であるが、中世の建物跡が確認されたのはこの遺跡が初めてであり、希少な資料である。

以上から、B地点で確認される主な遺構・遺物の内容は縄文時代、古代、中世の集落であり、周知されている弥生時代の遺構・遺物の分布は希薄であることが明らかになった。柴山出村遺跡の実態は、縄文時代から中世にかけての複合集落遺跡が、低地(A地点)と丘陵(B地点)で時期を異にしているものと推測されよう。今後は、各時代で遺跡の性格を検討する作業が必要である。また、隣接地の発掘調査が平成11(1999)年度に予定されており、その成果も期待される。(安)



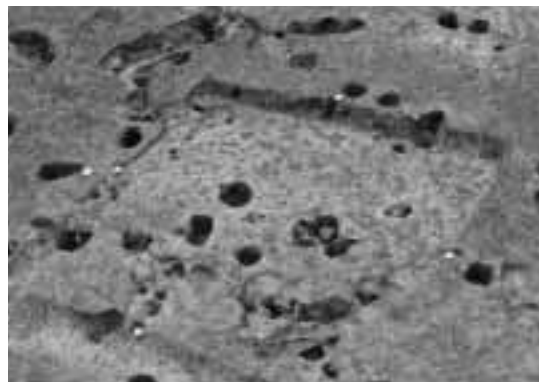
調査区全体 (S=1/400)



調査区全景 (南西から)



縄文時代の石囲炉 (南西から)



古代の竪穴建物 (東から)

10 ^{さっせ}指江遺跡群〔遺跡分布図 No.29〕

所在地 河北郡宇ノ気町指江地内

調査期間 平成10年9月16日～平成11年12月25日

調査面積 2,400m²

調査担当 久田正弘 三谷正輝



遺跡位置図 (S=1/25,000)

指江遺跡群は河北瀧に面した丘陵裾から丘陵部に立地する遺跡である。遺跡と河北瀧の間には北陸道能登街道が存在した。北側には指江遺跡、南側には指江B遺跡が存在し、県営ほ場整備事業に伴う発掘調査である。

指江遺跡は古墳時代後期～平安時代の遺構と遺物が出土している。指江B遺跡A区は古墳時代後期～平安時代の溝と柱穴が確認され、2×2軒の総柱建物を1棟検出した。B～D区は溝や埴輪片などが出土した。

E区はA区の東(山)側では面的調査を実施し、古墳時代後期～中世前半の遺構・遺物が出土した。自然河道を挟んで大きく2地区に別れる。北側には古墳時代後期の鞍部と古代の掘立柱建物群が存在し、南側には古代の掘立柱建物

1棟と土坑、中世の土坑などが存在した。

自然河道からは古墳時代後期～平安時代にかけての非常に多量の土器・木製品・石製品などが出土した。須恵器のなかには墨書土器が多く存在し、8世紀中頃の坏には「大宮」がある。木製品は棒状木製品、曲物、容器、多脚机(?)、板、柱などが出土した。棒状木製品の1点は、長さ約86cmで断面4角形をしており、「大国別社務 略撰被集厄・・・」など27文字の墨書が存在した。曲物底板一面に漆が付着しているものがあり、漆を入れた容器の可能性もある。また古代の土師器にも漆が付着したものが2個体存在する。銅製品が出土しており、太さ約1mmの純銅の針金を直径約1.6cmの環を作り出しており、耳環ないし飾金具と思われる。玉類は、ガラス玉4点、白玉約350個、管玉2点、土製玉10数点が出土した。管玉の1つは出雲産であり、長さ2.7cm、幅9mmの大きな管玉である。白玉は滑石製であり、直径3.5～5mm、厚さ1～4mmのものである。これらの銅・石製品は、古墳時代後期に属するものと思われる。

F区はE区の南側に位置し、自然河道と数条の溝を検出した。自然河道からは多量の土器・木製品が出土した。時期は9世紀後半であり、「大」「井」などの墨書土器、漆器鉢、斎串、木皿、ヒョウタン容器などが出土した。漆器は底部の厚さ約1mm、口縁部から体部にかけては2～3mmであり、非常に薄く仕上げられている。口縁部には布着せを施している可能性がある。河道の南岸には多量のトチの実を貯蔵した小穴が存在し、なかには実が腐っていないものも多く存在した。

指江B遺跡の南側調査区とその周辺からは、須恵質の円筒埴輪破片10点ほどが出土しており、南側に隣接する津幡町領家地内の丘陵部には埴輪を持った古墳が存在した可能性がある。指江B遺跡は古墳時代後期には自然河道に水辺の祭祀を行なったことが伺え、古代は集落が確認された。墨書資料では「大宮」や「大国別社」などから神社との関係が伺え、また漆器椀などの漆関係遺物や斎串や多量の墨書土器などが出土していることから、一般集落というよりは官衛的性格を持った集落ではないかと想定される。

(久田)



E区全景



E区自然河道



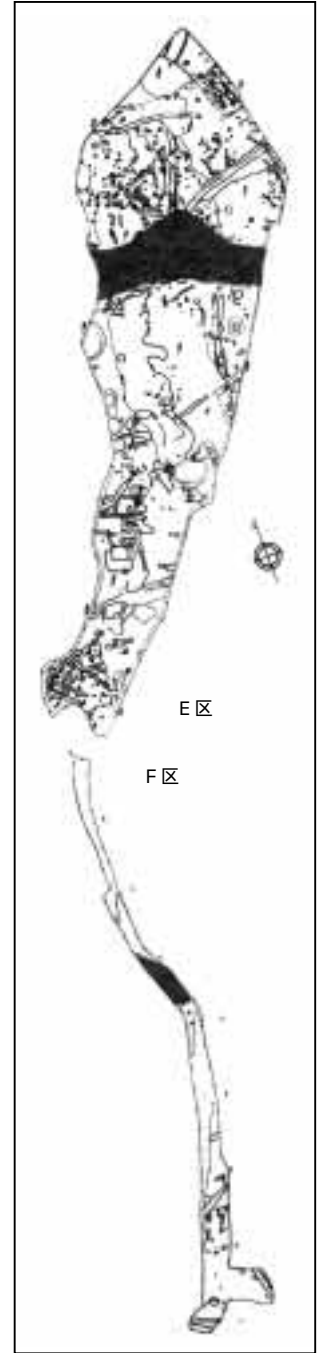
E区自然河道
木器出土状況



F区自然河道



トチの実ピット



調査区全体図 S=1/1,000

11 やざきみや した 矢崎宮の下遺跡〔遺跡分布図 No.76〕

所在地 小松市矢崎町地内

調査期間 平成10年10月27日～平成10年11月20日

調査面積 150m²

調査担当 安 英樹 立原秀明



遺跡位置図 (S=1/25,000)

本遺跡は、今江潟（現在は消滅）・木場潟・柴山潟に囲まれた月津台地（三湖台）の東側裾部に立置している。

遺跡から東方約400mの距離には木場潟がある。調査地点は現在水田となっているが、地山が黄灰色砂層であることから、以前は潟の一部であったことがわかる。

発掘地点は2カ所であり、それぞれ北・南調査区とした。北調査区の全域と南調査区の北部では、地山直上には厚さ約10cmの砂礫層があり、縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世の遺物が混在していた。出土状況から、調査区西の台地側から流れ込み堆積したものと考えられる。南調査区の南部では、黄灰色砂層の下位にピート層がみられ打欠石錘と縄文土器が少量出土した。

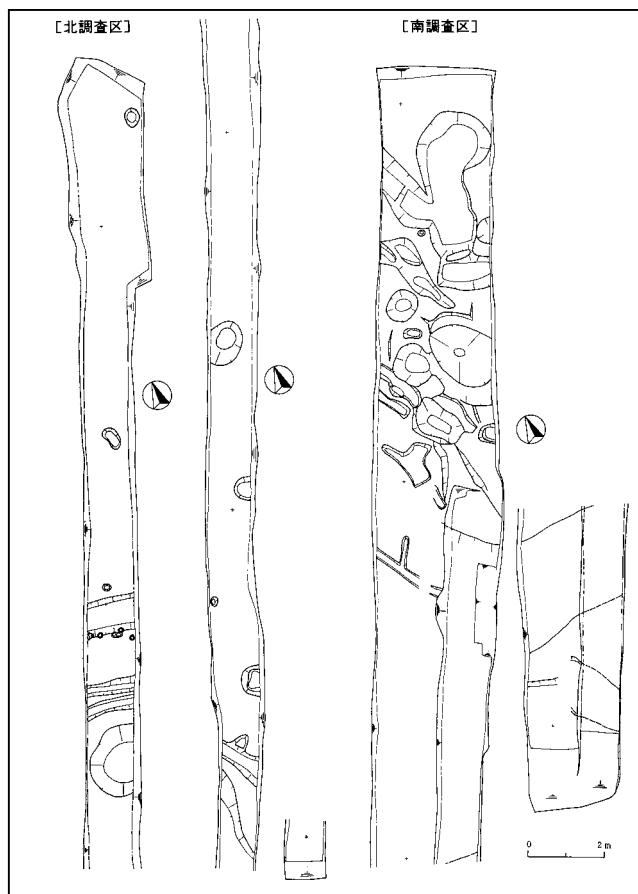
検出した遺構は溝8条、小穴9基、落ち込み5である。溝と小穴は砂礫層の上から掘り込んでおり、中世以降のものと考えられる。溝は東西に走るものが多く、台地側と関連があるように思われる。以上のことから、調査区は台地側に展開する集落の縁辺部と考えられる。（立原）



北調査区 (北から)



南調査区 (北から)



調査区全体図 (S=1/200)

12 ^{みびき}三引C・D遺跡(第5次調査)[遺跡分布図 No.14]

所在地 鹿島郡田鶴浜町三引地内

調査期間 平成10年4月27日～平成11年1月12日

調査面積 5,300m²

調査担当 金山哲哉 湊屋玲美



遺跡位置図 (S=1/25,000)

三引C・D遺跡は、鹿島郡田鶴浜町三引地内に所在する。能越自動車道とその側道建設を原因として、平成6(1994)年から継続して調査を行っており、今回は第5次調査となる。本年度の調査区は、既に供用を始めている能越道の北側に平行する形で設定した。

調査は、標高約1.7mに分布する縄文時代後晩期～中世遺構面と、標高約0m付近に位置する縄文時代前期初頭遺構面の、上下2面に分かれる。

上層調査は、調査区を西側から順に10～13区の4調査区に分け、約3,500m²を対象として調査を行った。また下層調査については、10・11区の約1,300m²を対象として実施した。以下、上・

下層に分け、調査概要を紹介する。

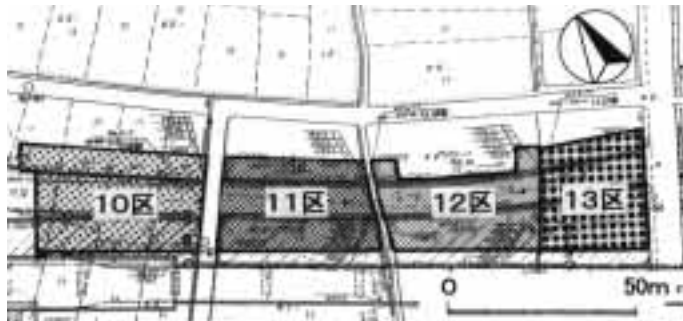
【上層調査】

10区 中世の水田跡を検出した。畦畔は不明瞭な部分が多いが、現在の水田区画とほぼ同じ方角で区画されている。東西軸は南北軸と比べて広く、水口と思われる窪みを2箇所確認している。また、足跡と推測される不定形の窪みを多数検出している。北側の区画で特に多く見られるが、形が不明瞭なため、移動方向の傾向などはつかめていない。

11区 自然河道(SD01・02・03)を検出した。SD01上位層、SD02・03では主に弥生時代、平安時代、中世の遺物が出土している。SD01下位層では、上位層の遺物も含むが、主として縄文時代後晩期の遺物が出土している。

他に、水田跡、溝、ピット、浅い落ち込みを検出したが、いずれからも遺物は出土せず、時期は不明である。水田跡は10区のものと同様の方向がずれており、時期差があるものと見られるが、現段階では確定できない。

12区 この調査区でも水田跡とみられる区画を検出している。また、調査区の北西隅にSD01を、調査区東半で13区へ延びる自然河道SD04を検出した。この他にも、溝(SD05)1条と貯蔵穴(SK01)1基を確認している。SD04・SD05ともに、SD01同様、縄文時代後晩期の遺物を最下層に含む。貯蔵穴は直径約80cm、深さ約20cmで、袋状の断面形を呈しており、覆土下部ではトチの実数個が出土し



調査区区分割図 (S=1/2,000)

た。年代については、最下層で出土した土器片から縄文時代後期頃のものと考えている。

13区 2条の自然河道が調査区北西で合流するSD04を検出した。平成8年度に5区で検出された河道の続きであり、出土する遺物は、奈良・平安時代の須恵器、土師器(墨書土器を含む)などの他に弥

生時代の土器を少量含む。また、特に河道下位層からは縄文時代後晩期の遺物が多量に出土している。他に、11・12区で検出した水田跡と比較的区画方向が近い畦畔状の高まりや、溝を検出しているが、遺物は出土していない。

上層全体を見ると、過年度の調査区同様、包含層から多量の木製品が出土している。特に11・12区での出土量が多い。また、包含層や河道から一定量製塩土器や土錘が出土している。人々の居住域と思われる山手から流れ込んだ遺物群ではあるが、地形と生業の変遷を垣間見ることができる資料である。
(湊屋)



10区完掘状況（北東から）



11区完掘状況（北東から）



12区完掘状況（北東から）



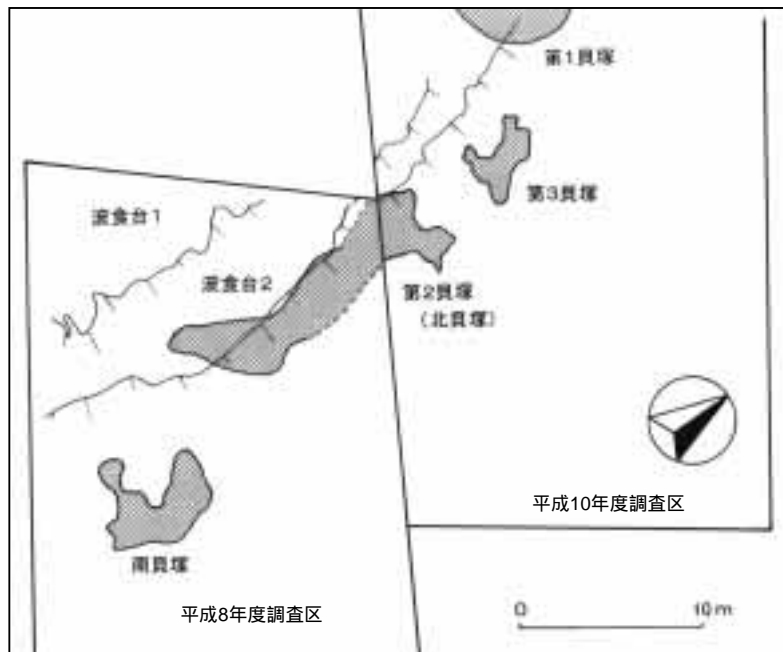
13区完掘状況（北西から）



上層調査区全景（北から）

【下層調査】

下層調査は10・11区を対象として実施した。調査の結果、10区では1箇所、11区では2箇所、両調査区合わせて3箇所、両調査区合わせて3箇所で貝塚の分布を確認した。特に、10区の貝塚（以下第1貝塚）は当初の想定を遙かに上回る、南北約30m、東西約8mの県内最大級の貝塚であることが判った。第1貝塚分布範囲の確認に至り、降雪前の調査完了は困難であると予想されたため、本年度の10区調査については貝塚分布範囲の確認に止め、本格的な調査は次年度に繰り延べることとなった。したがって、以下、11区の調査成果を中心に紹介することとした。



平成8・10年度調査区遺構略配置図

11区

本調査区では、3箇所で貝塚を確認している。但し、10区から本調査区に延びる第1貝塚については、本調査区にかかる東端部のみ平成7(1995)年度に既に調査済みであるため、今回の調査で検出したのは第2・第3貝塚と名付けた2貝塚となる。いずれもこれまでに確認されている他の貝塚と同様、



第2貝塚検出作業風景



貝塚中遺物出土状況

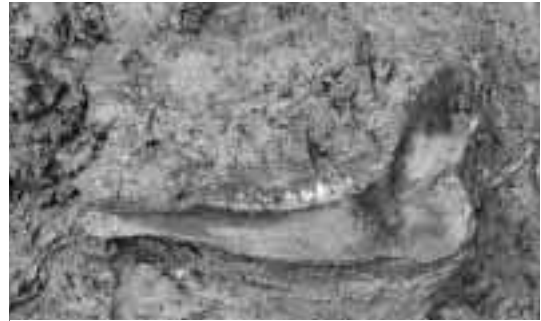
縄文時代前期初頭に位置付けられる。調査はこれらの貝塚が分布する上位層と、貝塚基盤層以下の下位層に分けて実施した。以下にそれぞれの概要を記す。

(1) 上位層

2つの貝塚は共に約5度の緩傾斜面上に、等高線に沿うように形成されている。調査区南西隅に位置する第2貝塚は、平成8(1996)年度の調査で確認された北貝塚の続きに相当すると考えられる。先の調査で確認済みの範囲を合わせると、南北約16m、東西約5mの広がりをもつ貝塚であることが判った。貝層は標高約0.5mから始まり、末端の標高は約-0.2mを測る。最も厚い部分でも30cm程の貝層には、内湾の潮間帯に生息するハイガイやサルボウが最も多く、その他、アサリ、カキガイ、オキシジミなども見られる。

第3貝塚については新発見の貝塚であるが、南北約6m、東西約4mの小規模なものである。貝層は第2貝塚と同種の貝で構成され、標高約0.1mから約-0.1mに堆積、貝の密度も第2貝塚に比して著しく低い、約10cmの薄層である。断面観察の結果、第2貝

塚のみ、貝を殆ど含まない間層を挟んでいたため上下2層に分層することができたが、それ以上の細分は不可能であった。このため、層毎の貝層土採取は断念し、50cm四方のグリッドに基づき、厚さ10cm毎に貝層土全ての採取を行った。一部保存資料を除き、採取した土壌は全て水洗選別を行い、現在も継続中である。水洗後の資料中には、シカを主体とする獣骨や、微細な種子や魚骨が多量に含まれていることが判っているが、それらの同定作業については殆ど進んでいない状況である。



シカ下顎骨出土状況

その他、水洗資料からは土器や、礫石錘を中心に磨製石斧、石鏃、珓状耳飾などの石器が数多く確認されている。特に珓状耳飾については、未製品を含めると現在までに約10点が見つかっており、今後の選別作業によりその数は更に増加するものと考えられ、注目される。

なお、調査区は異なるが、10区の第1貝塚中から鹿角製の単式釣針が1点出土している。太平洋側では出土例の非常に多い資料であるが、同時期の日本海側では富山県の小竹貝塚の資料が挙げられる程度である。針先は欠失しているが、チモト部は3段の袂りを良く残す、全長約7cmの大型品である。



単式釣針

(2) 下位層

貝塚は、人頭大の角礫や直径20~30cmの倒木、多量の小木片などを含む砂混じりの粘質土を基盤としている。この層には、貝塚の分布域に重なるように、貝塚とほぼ同時期

に属すると見られる遺物が多量に含まれていた。同層出土の注目される遺物に、カヤの木から削り出した櫂があげられる。現存長は約63cmで柄の大部分を失っているが、水掻き部はほぼ原形をとどめている。それまで国内最古であった福井県鳥浜貝塚の資料より僅かであるが遡る資料であると考えられる。釣針と共に、当時の漁労活動をこれまで以上に具体的に復元する好資料となろう。



櫂

なお、本包含層下では、深度が増すに従い、遺物量は激減する。砂層と湿地堆積の互層からなる下位層泥岩層の除去後には、南西から北東にかけて急激に傾斜する珪藻の地山を検出した。調査区南西隅は標高0.5mを測るが、そこから7m北東の地点では2.7mも落ち込んでおり、最深部の標高は-2.2mに達する。標高0~0.5mの範囲には、縄文海進により形成された波食台と見られる階段状の平坦面2面を確認しているが、その他の遺構については確認できなかった。

本遺跡は、縄文海進の痕跡を実際に目の当たりにできる稀少な遺跡である。波食台が検出されたことから、時期は不明ではあるが、遺跡が位置する湾奥まで海水が浸入していたことは間違いない。そしてそのような海水準の変動は、人々の生活に大きな影響を及ぼしたことであろう。貝塚と共に、こうした周辺の古環境の変遷についても、これまでの調査結果や自然科学分析の結果をもとに、詳細に検討していく必要がある。

(金山)



第2貝塚検出状況（北東から）



第3貝塚検出状況（北東から）



第2・第3貝塚検出状況（北東から）



下層完掘状況（南東から）

13 まわきせいえん 真脇製塩遺跡 (第2次調査)〔遺跡分布図 No.10〕

所在地 鳳至郡能都町真脇地内

調査期間 平成10年10月13日～平成11年1月22日

調査面積 約400m²

調査担当 垣内光次郎 兼田康彦



遺跡位置図 (S=1/25,000)

真脇製塩遺跡の所在する真脇地内は能登半島内浦に点在する漁村のひとつで、富山湾に南面し、他の三方は山に囲まれている。この山裾には貼り付くようにして沖積平野があり集落の中心となっている。本遺跡は海岸線より250m程内陸寄りで、沖積平野の東端に位置し、東側には標高約100mを測る丘陵が迫る。本遺跡は平安時代と室町時代の複合遺跡で緊急地方道路整備工事及びふるさと支援道路整備工事に伴い調査が行なわれた。調査は平成9(1997)年度と今年度の2年度にわたり行なわれ、9年度調査では室町時代の礎石建物跡とその際に行なわれた盛土による敷地の造成が確認されており、建物の規模、構造、出土遺物等から当時の真脇村の

村堂ではないかと推測されている。今年度は室町時代の盛土の下層にあたる部分で、平安時代の製塩遺跡の調査を行なった。調査区は北西 - 南東のラインを長軸とした約30×17mのほぼ長方形に近い形をしており、遺構面の標高は1.8m～3.5mを数える。遺構は製塩炉16基、掘立柱建物跡、溝跡2条、護岸石列3箇所が検出された。遺物は「短脚大型尖底土器」を中心器形とした多量の製塩土器、須恵器、土師器、土錘等が出土している。

製塩炉は調査区の北側と南側の2箇所から検出した。北側の製塩面からは、楕円形の浅い穴の中に西側が開いた馬蹄状に炉材と思われる焼石が並べられているものや浅い溝の中に数箇所焼石が並べられているものなど12基の製塩炉が確認されている。またそれらの中には炉床部に製塩土器の細片や、粘土が敷かれているものも確認された。

この製塩面では東側の斜面の裾に並行して排水溝が掘られ、南側の端で曲がり南西に延びている。また調査区外のため確認できなかったが北端も同様に製塩面の端で末広りの形に延びていると考えられる。製塩炉は特にこの排水溝付近から多数が重層的に検出され、逆に製塩面の中心に位置する部分からは上面に1基の製塩炉が見つかったに過ぎず、厚い灰層が確認された。製塩面の西の端から更に3mほど西に南北方向に並べられた石列とその裏側に詰められた礫群等が確認できた。この石列は製塩面より一段低い砂の面にあり、かつて海岸だったと思われるこの場所で護岸として機能していたと考えられる。またこの石列の南端は石の上面が平端で、製塩面に向かう様に曲がっており、通路としての役割を兼ねていた可能性がある。

一方、南側の製塩面は北側より地盤が軟弱なためか、製塩炉は4基しか確認できず、操業時期も10世紀のみで終わっており、排水溝や石列等の様なものは確認されなかった。

以上から当遺跡は小規模ながらも製塩炉や作業場等が確認され具体的に平安時代の能登の塩生産の煎熬作業の過程を押さえることのできた遺跡として評価できる。

なお今年度調査をもって緊急地方道路整備工事及びふるさと支援道整備工事に伴う現地調査は終了した。(兼田)



遺跡全体図 (S=1/100)

14 ^{ちかおか}近岡遺跡〔遺跡分布図 No.37〕

所在地 金沢市近岡町地内

調査面積 2,000m²

調査期間 平成10年9月1日～平成10年12月28日

調査担当 土屋宣雄 菅野美香子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

近岡遺跡は、金沢市の北部を流れる大野川の左岸、標高0m前後の低湿地に立地し、昭和58年度調査区の南側、平成9(1997)年度の東側に位置する。金沢港南地区埠頭用地整備工事に伴う本遺跡の調査は今年度で2年目となる。

調査の結果、調査区西側に自然河道が流れ、河道以東の微高地に集落が展開していた様相が確認できた。出土遺物より、弥生時代末～古墳時代初頭に比定できる。

河道跡は上端幅6～12mを測り、流路は東から西である。昭和58(1983)年度調査区で確認された大溝の上流部分に相当すると考えられる。南側よりの部分には10本ほどの板が打ち込まれており、その様相から、それらは護岸用の矢板であったと

推測できる。また、河道の東側には南北幅約5m、東西幅約2m、厚さ約20cmの貝層が認められる。

調査区東側の微高地では、柱穴や溝が非常に高い密度で検出された。現状では掘立柱建物7棟、竪穴系建物1棟を確認している。柱穴には礎板や枕木を伴うものが多く、礎板には梯子などを転用している例も見られた。集落域東側で検出した布掘建物(SH1)では、長さ5mを超える枕木が対になり、良好な状態で出土している。同様な形態で、片側の枕木のみが出土した例は金沢市大友町の大友遺跡に見られるが、両側の枕木の出土は全国的にみても珍しく、現在のところ新潟県の蔵王遺跡に確認できるのみである。

遺物は非常に多く、特に河道跡では廃棄されたと見られる土器、木製品が高密度で出土している。集落域においても、柱穴に遺物の混入する例が多く、その数は700基以上に上る。土器はほとんどが破損した状態であったが、木製品に関しては状態の良好なものが多く、弓、鋏などがほぼ完形に近い状態で出土している。



集落跡完掘状況(南東から)



布掘建物(南から)

また、調査区北東隅の柱穴（P7）の底部付近からは銅鏃が出土している。石川県内では弥生時代に比定される銅鏃の出土例は少なく、20例ほどである。当遺跡で出土した銅鏃は、長さ4.1cm、最大幅1.4cm、重さ3.4gを測り、茎が付けられ、中央に高い背をもち、根元には逆刺^{かえり}が入れていることを特徴とする。このような形態の銅鏃は、石川県内では金沢市無量寺B遺跡につづき2例目となり注目される。

今回の調査では、自然河道を挟み、東側の微高地には柱穴、溝などの遺構が密集した状態で検出されたが、西側ではほとんど遺構は検出されなかった。今後、昭和58年度調査、平成9年度調査の結果も考え合わせ、東西での土地の利用状況の差異について検討を進めていきたい。（菅野）



遺跡位置図（S=1/300）

15 倉見オウラント遺跡〔遺跡分布図 No.31〕

所在地 津幡町倉見地内

調査期間 平成10年7月21日～平成10年11月26日

調査面積 3,000m²

調査担当 松山和彦 湯川善一

本遺跡は、倉見川とその支流の宮谷川にはさまれた低丘陵上に位置する。今回の調査は北陸新幹線建設工事にともない実施された。調査区は丘陵の尾根上にあり、遺構検出面の標高は30～35mを測る。

現代の耕作に伴う表土の流出が地山まで達しており、遺構の残りは悪かった。しかし、竪穴住居跡4棟、掘立柱建物2棟、土坑1基、落とし穴1基、柵列1列などを検出することができた。遺物は、縄文土器や弥生土器などが多く出土している。

縄文土器は谷部埋積土からそのほとんどを得た。縄文時代中期前葉に属するものである。集落域は、本調査区周辺に存在した可能性が高い。調査区最高部の尾根上から検出された落とし穴は、この時期以降の所産と思われる。

上記の竪穴住居跡、掘立柱建物はいずれも弥生時代後期、なかんずく終末期に属するものである。竪穴住居跡は、馬の背状の丘陵鞍部を取り囲むように、建て替えを含め4棟の竪穴住居跡が配されていた。1号・4号竪穴住居跡は地山の流出により、その一部が残存するのみであった。しかし支柱穴や壁周溝の存在から、それぞれの規模は1号が一辺約6m以上、4号が一辺約4.5mの隅丸方形と推定される。重複する2・3号竪穴住居跡は、それぞれの中心がずれていないこと、すべての支柱穴が外側の支柱穴に切られていることなどから、3号から2号竪穴住居跡への建て替えに際して拡張したものと判断した。形状は2号が一辺約6mの隅丸方形、3号が一辺約7.5mの隅丸方形を呈する。特筆すべき遺物として、試掘調査時に2号竪穴住居跡の床面から直径約7mmのガラス小玉が1点出土している。深い藍色を呈し、径約1mmの孔が貫通している。ガラス小玉としては大きく、県内での類例は少ない。また、2号掘立柱建物跡もこの時期の竪穴住居跡の支柱穴である可能性が高い。

この鞍部からやや東に離れた場所には、1×2間の1号掘立柱建物が営まれていた。これは梁行約3.8m、桁行約4.3mを測る大型の建物である。その柱穴掘方は円形で、直径、現況での深さとともに1m近い大型のものである。吉野ヶ里遺跡など西日本では類例が多いものの県内では初例で、北陸地方でも希有な存在である。倉見川と宮谷川の流域が遠望できる尾根上のピークに位置し、居住地域から離れた位置に単独で存在することは、この建物が特殊なものであることをうかがわせる。この地域のシンボリックな建物、例えば高床式の神殿などの機能を想定すべきかもしれない。この建物のすぐ西側には3本一組で1単位をなす柵列が存在し、この建物を区画していた可能性がある。

今回の調査では、周壕などの防御施設を確認することはできず、高地性集落と判断することはできなかった。しかし大型建物の存在は、今後この時期の集落を考えるうえで大きな役割を果たすであろう。前年度に行われた津幡町教育委員会による調査では、今年度調査区南方の丘陵裾部において、同時期の竪穴住居跡や大型土坑などが検出されている。集落域は丘陵裾部へと更に広がるものと考えられる。本遺跡の調査は今年度も引き続き行われており、この遺跡の性格がより鮮明になるとと思われる。今後の調査に期待したい。

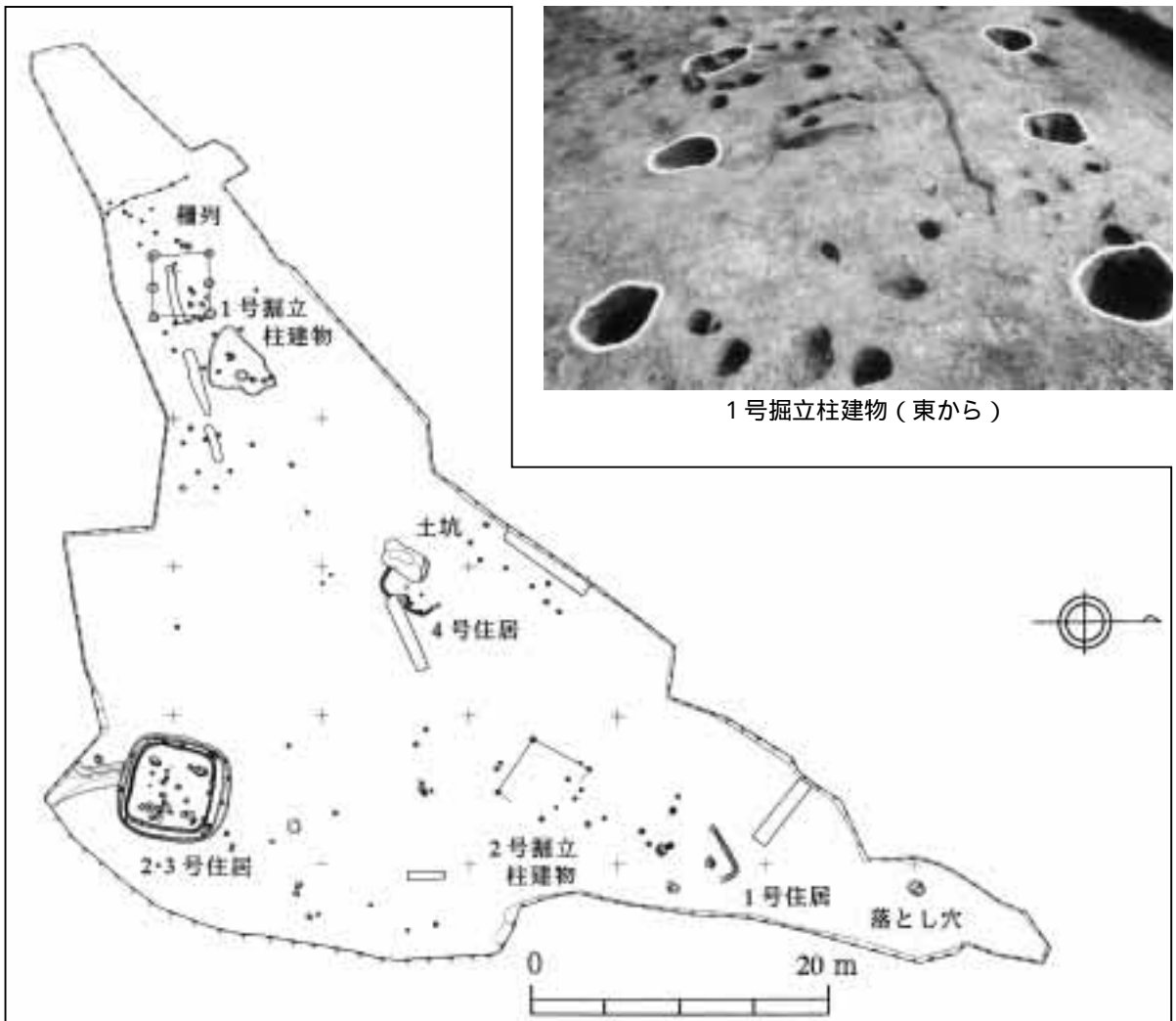
(湯川)



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査区遺跡（南から）



調査区全体図

16 ^{かなざわじょうせき}金沢城跡^{ぼり}いもり堀発掘調査〔遺跡分布図 No.46〕

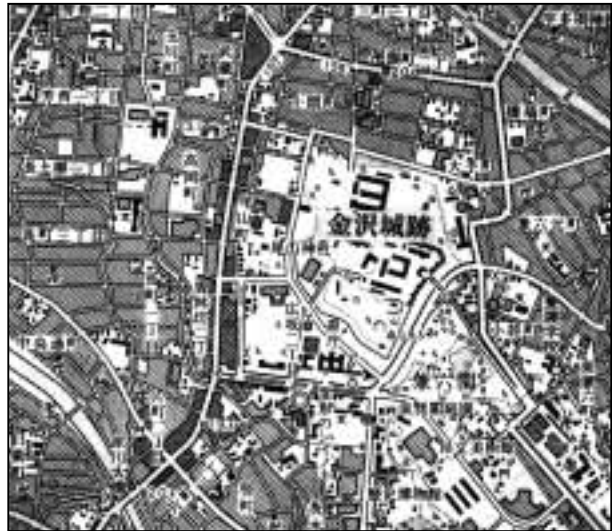
所在地 金沢市丸の内地内

調査期間 平成10年7月21日～同年10月30日

調査面積 3,300m²

調査担当 端 猛 三浦ゆかり

いもり堀は、金沢城本丸跡の南に位置していた堀で、車橋門から始まり東の丸、本丸高石垣下のお花畑に沿い鼠多門に至る水堀の通称である。明治40(1907)年3月に堀の背後の本丸高石垣が崩壊したことをきっかけに陸軍によって埋め立てられ、第九師団の被服庫5棟が建設された。戦後は第2回国民体育大会の庭球競技会場として整備され、平成9(1997)年まで石川県営兼六園テニスコートとして利用されてきた。今回の発掘調査は、土木部公園緑地課が進める金沢城址公園整備を原因とするもので、いもり堀の復元とその周辺整備工事の事前調査として実施された。



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査では、近代以降の整地土と堀の埋土を除去した結果、江戸時代後期の『金沢城絵図』(成巽閣蔵)とほぼ一致する位置で、石垣からなる櫓台といもり堀を検出した。櫓台は石垣4と2から構成され、高さは『加賀国金沢之図』(寛文8年金沢市立図書館蔵)によると「水底より八間」と記されていることから、石垣4の検出面より約7～8m程高かったと推測される。また、櫓台の西に検出したいもり堀の土羽も、石垣4と同じ高さであったと思われる。堀幅については、上記の『加賀国金沢之図』によると拾五間(約27m)とあり、対岸は県庁舎前の道路中央付近であったとみられる。

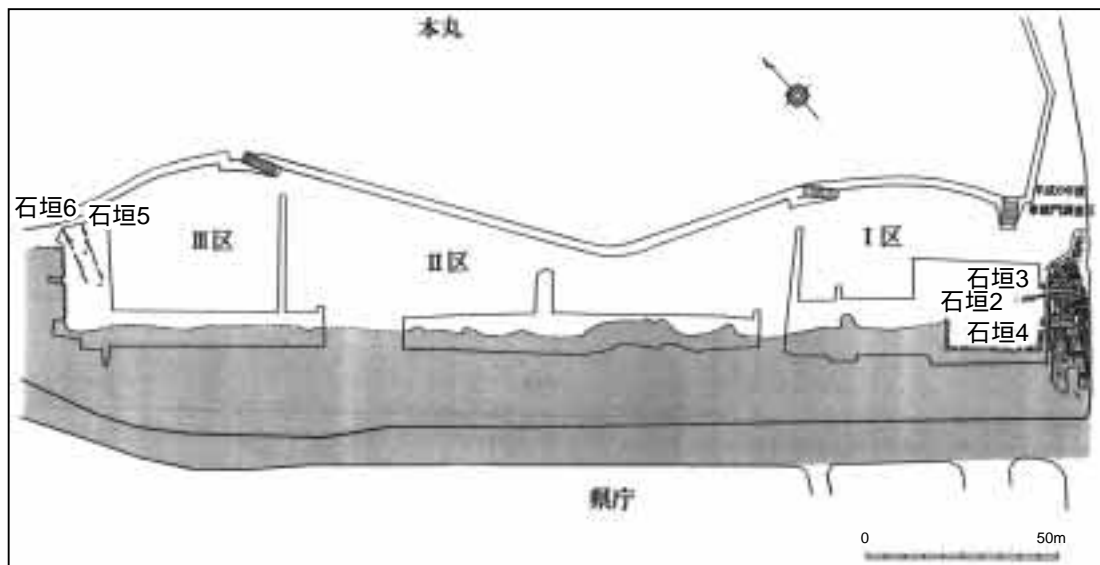


調査区位置図 (S=1/5,000)

一方、石垣4の構築の際に、鉄製のくさびが使用されていたことが新たに確認された。鉄製のくさびは、櫓台の二箇所が存在する算木積みからなる出角部分の角石上面に置かれており、石の上面に錆が付着していたことから、構築時に置かれたものと判断した。鉄製くさびの用途は、上下の角石を固定する必要から胴部の特定の箇所に配し、石に安定性をもたせたものであろう。

さらに絵図には描かれていない、築城初期の古い堀と同時期の土橋を検出し、いもり堀が改変されていることが明らかになった。古い堀は、いもり堀より城側に掘削されていたことが調査区全域で確認でき、百間堀方向へ続いていたとみられる。土橋はいもり堀口近くの調査区で検出された。石垣5・6は土橋の東と西面に築かれたものである。現存する最大長は15.1mであるが、県庁側で石垣が抜き取られていることから、本来はもう少し長かったものと思われる。石垣5と6の間の最大幅は4.76m最小幅は3.74mを測り、北側に広がりをもつことから北側が高く、南側が低かったと推定される。石垣5・6は戸室石の割り石と自然石を使用しており、築石の勾配も緩いことから築城初期の所産とみられる。このため、古い堀の構築時期もこの時期と考えることができる。

これらのことから、堀が三期にわたって変遷することが明らかになった。すなわち、第一期に古い堀が掘削され、第二期に新たに掘削した土砂で古い堀を埋め、さらに高く盛土をして「お花畑」と呼ばれる平坦面を造成し、第三期には石垣からなる櫓台と車橋門石垣台が構築されるといった変遷が認められた。それぞれの構築時期の特定は、次年度の調査成果を待たねばならないが、石垣の構築方法や文献、絵図等の資料から推測すると、第一期は築城初期である文禄年間頃、第二期と第三期は17世紀前半頃と推測することができる。 (三浦)



調査区平面略図 (S=1/2,000)



いもり堀調査区全景 (南東から)

17 ^{の とくこうかんれん}能登空港関連遺跡群 (第2次調査) [遺跡分布図 No.8]

所在地 輪島市三井町洲衛

調査期間 平成10年4月16日～平成10年10月16日

鳳至郡穴水町木原

調査担当 辻本 馨 砂上正夫 宮腰慶子(以上併任)

鳳至郡能都町太田原 各地内

端 猛 中西洋司 宮川彩子

調査面積 11,000m²

本遺跡群は、能登半島北部にある木原岳(標高277.8m)周辺に広がり、行政的には上記の3市町にまたがる場所に位置する。当遺跡群の調査は、平成15(2003)年度開港を目指す能登空港建設工事に伴うもので平成9(1997)年度から進められ、今年度は第2次の調査である。調査の対象は、主として昨年度同様に踏査によって確認された炭窯跡であるが、今年度は更に、土砂の堆積で埋没した炭窯の有無を確認するために、山裾の表土を重機で除去した上での調査も併せて実施した。



遺跡位置図 (S=1/50,000)

今年度調査した炭窯跡の数は、半地下式白炭窯(通称「堅窯」)66基、半地下

式黒炭窯(通称「改良窯」)15基、地下式黒炭窯3基、製炭土坑5基、土取り穴8基である。半地下式の白炭窯と黒炭窯との相違点は、生産される木炭の質と、炭窯の規模・形状である。白炭窯は、直径1～2m程度の円形もしくは楕円形に近い比較的小型の窯で、木炭焼成の最終段階で1,000を越える高温で焼きしめることから、高熱に耐えるように窯の床面や壁面に石を張り付ける場合が多い。白炭窯で生産される白炭は、金属のように非常に堅く重みがあり、今静かな人気の「備長炭」もこの白炭である。それに対して黒炭窯は、奥行3～4m程度、最大幅3～4m程度の逆三角形に近い比較的大型の窯で、400～800程度で炭を焼き上げることから、白炭窯で見られるような窯の床面や壁面の貼り石はほとんど見られない。黒炭窯で生産される黒炭はパサパサした感じでもろく、しかも軽い。

発掘した炭窯跡は、ほぼすべての炭窯について天井部が崩れ落ち、窯壁や床面の焼け土が削られている状態のものが多い。また半地下式白炭窯については床面や壁面に用いられたと思われる貼り石もはずされているものが大半で、作業当時の形態を残すものはほとんど見られなかった。一般的に炭窯の構築に関しては、新しい炭窯を構築する際に、古い炭窯で用いられた焼け土や石をはがして新しい炭窯に再利用する傾向がある。こういった理由だけで考えることはできないが、炭窯跡が1基単独で存在することは非常に希であり、複数の炭窯跡がまとまって確認されることが多い。

炭窯跡からの出土遺物としては、ごく数片の近世陶磁器片や炭窯構築の際に使用されたと思われる鍬や砥石などの道具類、それに焼け残った木炭片などを挙げるができる。しかし、その出土量は極めて少なく、時代判定の手がかりにも乏しいことから、個々の炭窯について作業時期を特定することは困難である。調査したほとんどの炭窯は近代以降の作業と推測されるが、近世に遡る炭窯の存在も完全に否定できない。ただ、これについても決め手に欠け、強いて考えられるとすれば、3基確認された地下式黒炭窯がそれにそれに該当する可能性もあるが、これらの窯跡も遺存状態が悪く、これ以上の追求も難しいと思われる。

また今年度の調査では、木原岳の南東中腹（標高238m地点）で直径4m程度の塚状遺構らしきものが確認されたが、調査の結果、当初考えられた人工的な構築物ではなく安山岩系岩塊が斜面に露頭したものと判明した。ただ、この場所から70～80m南方にある山道の小さな峠（標高230m）に15世紀頃のものとして推定される板碑が存在することからも考えると、この安山岩系岩塊はいわばこの地において信仰の対象の一つになっていたとの見方もできる。

なお、この事業に伴う能登空港関連遺跡群の現地調査は今年度で終了となる。

（中西）



半地下式白炭窯（B区125号炭窯）



左：正面から 右：上方から



半地下式黒炭窯（I区111号炭窯）



左：正面から 右：上方から



地下式黒炭窯（G区158号炭窯）



左：正面から 右：煙道部拡大

春期の整理作業報告

整理課

4月、三引C・D号は、大量の縄文土器をのせて出航しました。船上では年老いた黒田船長以下、北、河崎、今井、吉野という若いクルー達が、縄文やその他の土器の分類接合の作業をしています。実測はもちろん、パソコンにも精通している彼女達は経験の浅い吉野さんを引っぱり、三引C・D号の力強いスタッフです。5月半ば、担当者の懇切な指導のもとやっと実測までこぎつけました。三引C・D号がタイタニック号のように沈没しないよう、無事、実績報告書にたどりつくまで航海できるようながばっています。(黒田和子)

今回、松山C遺跡という墨書土器の多い遺跡の整理にあたっている。調査面積に比べ遺物量が多く、多くは故意に細片にされているため、接合を予定時間内で行うには無理があった。墨書は鮮明で、「米」が圧倒的に多い。墨書の実測は、埋文スコープによって行っているが、以前より効率良く実測できる。他に、須恵器の羽釜や円面硯等、貴重な遺物も多く、時間をかけてじっくりと取り組みたい遺跡である。しかし、現状ではそれも困難であり、整理作業の限界を感じている。(横山そのみ)

現在珠洲の南黒丸遺跡の整理を行っている「私は整理の仕事始めて2年と半年で特技は特になく、南黒丸遺跡の重い珠洲焼で、腕の力をつけたいと思っている朝倉。」「私は3年目でこれからの新屋。」「私は7ヶ月の新人で、南黒丸遺跡を整理して小さな破片が元の形になるのに感激している北。」「私は4月からのホヤホヤの新人ですが、去年まで現場に居たのでこの先何か役に立つ事を願う国。」「年数だけは長い松田。」「5人で大量の珠洲焼に奮戦奮闘。(松田智恵子)

<三社町遺跡'97>整理作業期間は平成11年4月28日から平成12年1月初旬頃まで、担当は河村裕子、角間律子、岩井郁恵、中村静絵の4名です。17C後半以降の遺跡で「こんな家にもあるわ」と言った茶碗からなんともユーモラスな土人形など扱う遺物はバラエティに富んでいます。鋭い洞察力と記憶力それに感がたよりの分類接合作業を終え、只今陶磁器類の実測中です。複雑な染付け模様など実測の難しい物がいっぱいですが、そこは腕の見せ所、なんとか期間中に作業を終えようと頑張っています。(河村裕子)

「女は弱しされど母は強し」これが、整理課で唯一全員主婦の我班5人の原動力である。そんな私達は現在、国道159号線鹿島バイパス改築工事に伴い、羽咋市四柳町地内にて発掘調査された四柳白山下遺跡(1次・2次の一部)の土器実測・トレースを担当しています。縄文から近世迄、主に奈良~平安前期の須恵器(墨書土器含む)を中心に、土師器、中世土師器・陶磁器など870点の実測を完了させるべく、食器と深く関わり、使う立場の主婦の目で、土器と睨めっこの日々が続いています。(馬場正子)

私達は復元班です。整理室では唯一の男性小間さんと二人で作業を行っています。今は相川新遺跡や四柳白山下遺跡で破片のない部分に石膏を入れる作業を行っています。パズルのように全部が埋まるとは限りません。内外面やハケ目、文様を見ながら接合をし、最終的に破片がなければ石膏を埋め込みます。センターが新しくなっからは、修復室に排気装置が設備されてからは粉を吸い込むことはなくなりました。また復元のない時には、注記や土器の洗浄もすることがあります。(前田すみ子)

この4月に新人3名を迎え、7人衆となった我が班は整理課一の大所帯。1年をかけて『藤江C遺跡7次』を整理します。木器の保存処理優先の方針で、従来の仕事の流れとは変則的に木器実測からスタート。壊れ易く、また加工痕の判別がしづらい木器と格闘していた新人さんも、点数をこなすにつれ木器の雰囲気の出た図面があがって来ています。おっとり型の多い我が班ですが徐々にエンジン回転をUPして、長丁場を無事乗り切りたいものです。（新谷由子）

<猫橋遺跡> 弥生後期の標式遺跡として有名な所です。よくここまで細かくなると難度の高いジグソーパズルの様な接合作業を経て、弥生後期から古墳中期の遺物を中心に実測しています。接合で苦労したのに実測中もポロポロ壊れて、又一苦労です。木製品の中には、船の底板に使われた物など大型の製品が多いとか・・・他班の大型木製品の実測を見ていると格闘技にも似て体力と持久力が必要なようです。6月1日より末頃まで、小林、宮本、藤崎、池田、横田、橋本の6名がリングに上がります。（小林直子）

現在整理している遺跡は、小松市八幡遺跡。江戸時代末期の19世紀頃の遺跡である。今年度は染付と窯道具の実測、トレースが主体だが、窯道具の整理は珍しく、資料も少ないサヤ、ハリ、タコハマ、ツク等聞き慣れぬ名前の物ばかりだ。これらは窯で焼く時に、製品が重ならないようにするための道具である。また製品の中に、「老婆萬病園」と書かれた薬容器がある。少々怪しげな薬だが、女性の老化を防ぐための物が、しわの1本でも消してくれるなら、私も使ってみたいものだ。（正木直子）

新センターに移って、大きく変わったことは土器の乾燥方法です。今までは自然乾燥でしたが、昨年からは乾燥機を使用していますので、一週間かかっていたものが、わずか2日間で済みます。本年度、最初の仕事は大長野A遺跡でしたが木製品ばかりで、乾燥機は必要なしでした。でも五月からは、藤江B遺跡、近岡遺跡と沢山の土器の洗浄が続く予定です。これから乾燥機はフル回転で大活躍することになります。（末富しげ子・中村真弓）



大型木器と格闘中



井戸に転用された大 達

[発掘余話] 金沢城跡五十間長屋出土「鍬始」刻石

その2 ~ ジンザ登場 ~

北野 博司

8 加賀藩の石垣普請

石垣普請にあたる人たちが属する組織と藩の機構について触れておきたい。

藩主 - 年寄 - 普請奉行 - 穴生

石垣普請を担当するのは「普請奉行」(役所名は「普請会所」)であり、その下に「穴生」があった。穴生は江戸時代中後期には定員4名前後で構成され、後藤家、奥(穴太)家といった家柄の者が代々これを勤めた。「穴生」は石垣築成技術をもって仕える職であり、いわば技官である。普請奉行の上には「年寄」衆(本多、村井、前田などの八家)があり、石垣普請のことも彼らが決裁した。

「穴生」は石垣普請に際して、工事仕様書及び費用見積書を作成し、材料調達や施工管理、労務管理など一切をとり仕切る。普請がない場合でも穴生役所へ出勤し、毎朝、御扶持人石切等と城内の石垣などを点検して回るのも勤めであった。

穴生 - 御扶持人石切 - 二十人石切 - 杖突 - 役小者

穴生の下には「御扶持人石切」(扶持を受けている石切、足軽と同列) - 「二十人石切」 - 「杖突」 - 「役小者」らが連なる。石切り・石引きの際には、他にも手木之者(手木足軽)や日用之者(日雇い人足)などが多数仕事に携わった。石切り、石積みの実際の現場では穴生の指図を受けた御扶持人石切が指揮し、二十人石切、役小者が作業にあたった。新丸の西側にあった普請会所内には穴生役所があり、「穴生」「御扶持人石切」が詰めていた(第2図1)。

9 後藤彦三郎和睦

加賀藩の穴生として最も有名なのは後藤家第6代「後藤彦三郎」(宝暦五~文政十一)であろう。彼は没落著しい後藤家(5代用助の娘)に婿入りし、一代で家を復興した。俸禄は切米50俵から始まって最終的にはライバルの奥(穴太)家を追い越し、知行100石へと躍進したのである。もともと石垣について素人の彼はお家大事の一念で勉強に励み、陰陽五行思想などにより石垣構築理論を体系化し、口伝、一子相伝の世界を秘伝書としてまとめた(北垣聰一郎『石垣普請』)。

後藤家文書は由緒書・相続・俸禄・縁組・遺書といった「家」に関するものから、加賀藩の石垣普請の歴史や石垣構築理論をまとめた秘伝書類、石垣積様秘伝絵図等からなっている。北垣氏によれば、秘伝書類のうち彦三郎署名・筆跡のものが82%、息子の小十郎書写のものと合わせると95%が彼らの手によるものという(北垣前掲書)。希代の努力家、理論家であり、記録魔でもあった彦三郎。今、彼の残した文書が城石垣に携わる我々(私)を十二分に楽し(苦し)ませくれる。いずれにしても、これらの文書・絵図類は我が国の土木技術史、加賀藩の藩政史を考える上で第一級の史料である。

付言しておくが、橋爪門続櫓台石垣(切り込みハギ)はカミソリの刃一枚も入らないと言われるほど精緻に積まれた石垣であり、直接は穴生後藤小十郎(徹丞)が担当したものとはいえ、同時に穴生でもあった実父彦三郎の作品とも言える。細工物を得意とした後藤彦三郎父子、生涯の最高傑作が橋爪門続櫓台石垣なのだ。

10 五十間長屋台を修築したのは誰だ?

後藤家文書を見ていくうちに、自然と頭に浮かんできたのは「宝暦十三年に五十間長屋を修築した

穴生は誰か」という疑問である。おそらくその人物が「鋤始」刻石を作り、宝暦九年の大火復興を印象付ける盛大な鋤初めのセレモニーを挙行した張本人に違いない。

まず、宝暦十三年に穴生を勤めた人物を探してみた。幸い、家柄の後藤・奥家は先祖由緒が整っており、すぐに分かった。後藤家は4代目空兵衛友和、奥家は6代目奥源右衛門茂勝である。

4代目後藤空兵衛は穴生の中でも最も多くの石垣修築工事に携わった人物であるが、宝暦七年の勤めを最後とし、宝暦十三年の翌年明和元年八月に74歳で死亡している。その年二月に、もはや老年で御用が勤められず、息子の用助に代役を願い出たばかりであった。

奥家では源右衛門が当年68歳、すでに年齢はピークを過ぎていた。宝暦五年に7代目源左衛門が石垣普請見習となり、後藤家同様、世代交代の最中であった。

いずれの穴生が五十間長屋を修築したのか。はたまた第三の人物か。

11 鋤初めとはなんぞや ～宝暦十三年六月二十五日朝の出来事～

宝暦十三年の穴生方の探索と同時に、鋤初めのセレモニーについても調べが進められた。後藤彦三郎が書き表した秘伝書「唯子一人伝」には、鋤初めの由来及びその儀式作法等が詳しく述べられている(第3図)。また「御鋤初式之図」「御鋤初略記」といった絵図の類も残されている(第2図2～4)。

「鋤初式」は、初めて石垣を築いたり、修築で根石(最下段の石)を取り替える場合に行う。吉日、吉刻、吉方を選び、角石を所定の場所へ引き寄せる。祭壇を設け、神酒・するめ等を供え、松の枝を敷き、九字を切る。松の枝は根石の下に敷く場合や角石の後ろに敷く場合があり、普請の大小によって松の枝の本数が5本、7本、9本であったり、敷き方にもそれぞれ作法があった。この陰陽思想に基づく儀式を執り仕切るのも穴生の仕事であった。

ある日、現場で「鋤始」刻石が出土した五十間長屋東北角の真下、堀底の根石のあたりにふと目をやった(写真2)。

あ!!どこかで見た風景……。脳裏に浮かんだのは「御鋤初略記」の図である(第2図4)。そこには角石に似た切石が不自然に横たわっているのではないか。他の隅角部の根石付近にこんな石はない。

宝暦十三癸未年六月二十五日、ぬけるような晴天の朝(午前六時～十時)、木具に設えられた神饌、角石の脇に並べられた普請道具を前に、縁取りに座した穴生某はじめ御扶持人石切らは、南に向かいまさに盛大な鋤初式を挙行しようとしていた。「宝暦の御焼失」を払拭し、加賀藩復興を告げる特別な意味を持つ「鋤初式」であった。五十間長屋の丑寅の方角・鬼門にあたる場所で、「臨兵闘者皆陣列在前」怨敵悪鬼退散、石垣の長久を祈って九字が切られた。

穴生某はすでにこの時、鋤初めの記念の石を石垣出来後に、最上部に埋め置くことを決めていた。それは全く異例のことであった。

12 ジンザ静かに登場

「唯子一人伝」には後藤彦三郎(せがれ小十郎)が関わった鋤初めが出てくる。文化五年の橋爪門続櫓修築、寛政十二年の大手石垣修築、文化七(十三)年の本丸高石垣修築である。根石を取り替えない場合でも鋤初めは行われたようであるが、彦三郎は普請の大小によって儀式の軽重を考えるべきであるとしている。

加賀藩の鋤初めは、小松に隠居中の三代利常自らが出向いた明暦三年(1657)の江戸城天守台普請にかかるものが有名であり、あまりの派手な演出に江戸中の貴賤老若が見物した、と記録にある。

「唯子一人伝」を読み進むと鋤初めの記載の後段に「宝暦年中に正木故甚左衛門なる人物が大が

りな鍬初めを行った」と書いてある。「正木甚左衛門」聞いたこともない名前である。果たして穴生なのか。正木甚左衛門 - 人呼んでジンザ。出会いは静かであった。

13 「鍬初め」を訪ねて行脚する

宇佐美孝氏（金沢市立玉川図書館近世資料室）からは、明治三年の「先祖由緒并一類附帳」の正木家の一つに石切関係の家があること、東四柳史明氏（当時加能史料編纂室）からは、「唯子一人伝」中にある甚左衛門が「石居の規式」を習った「^{たい}泰ノ神主」とは、^{たい}田井天神（椿原天満宮、今は金沢美大前の坂下）の高井氏であること、長谷川孝徳氏（石川県立歴史博物館）からは「御鍬初式之図」の読みとり方等についてそれぞれご教示を賜った。この場を借りて御礼申し上げます。

なお、鍬初めの記念石を作る話は文献には全く出てこないという。建築の手（執）斧初は棟札に記録されるが、石垣に鍬初めの記録を残した例は今のところ全国でもない。この刻石が極めて特殊なものであることが分かる。

14 「戸室石引き道」との出会い

記者発表資料作りを始めた頃、市立泉野図書館で『戸室石引き道』（金沢市生活環境部発行、平成7年）なる本があるのを知った。著者は北島俊朗氏。金沢城石垣の石切丁場があった戸室山周辺から城内までの石引き道を現地踏査し、民俗調査や史料調査を踏まえてまとめられた報告書で、藩政時代の「石切り・石引き」だけでなく、近現代まで対象としたたいへんな労作である。

その北島氏がひょっこり金沢城跡の石垣調査を見学においでた。『戸室石引き道』は県教委文化財課や埋文センターになく、発行元にも問い合わせたが残部はなかった。そのことを知って北島氏はお手持ちから貴重な一冊をセンターに寄贈して下さることになった。

心待ちにした本が届いた。石切場、石切道具、石の運搬方法、石切の組織や生活などが非常に分かりやすくまとめられている。そして、後半は資料編として近年後藤文庫（金沢市立図書館）におさめられた「戸室山初年号等留帳」「河北郡戸室山開之事等留帳」、また穴生の職務について書かれている「穴生勤方帳」（金沢市穴生氏蔵）などが活字化されている。最後に用語集及び石垣関係の記事を整理した年表が付されており、これも手引きとしてたいへんありがたい。例によって古文書は読めないのので、元号と西暦年の対比のために年表をめくる日が続いた。

15 ジンザふたたび

ある日、『戸室石引き道』をめくっていると、古文書のページが開いた。ふと目をやると・・・えっ、我が目を疑った。漢字の海の中に目が一点にくぎ付けにされていく。そこには確かに「穴生正木甚左衛門」と書いてある。心の中に引っかかっていたものがこみ上げてきた。さらにページをめくると「甚左衛門」の名は一つや二つではない。夢中でジンザの名を探す。安永年間（1772～1780）に活躍した穴生のような。安永といえば宝暦十三年（1763）からさほど遠くない。宝暦十三年、五十間長屋、鍬初め、正木甚左衛門、キーワードが一本の線につながり始めた。いよいよ面白くなってきた！！

「宝暦十三年の五十間長屋台石垣修築は穴生正木甚左衛門が担当し、盛大な鍬初式を行い、記念の刻石を作り安置した」という仮説がたてられる。

「戸室山初年号等留帳」「河北郡戸室山開之事等留帳」の2冊については次号以降の主題になるのでここでは触れないが、「留帳」らしく後藤彦三郎の石垣普請に対する考え方や性格が非常によく現れている。内容が戸室本山を開いた宝暦五年以降、特に安永期が中心のため、正木甚左衛門の事績が

たくさん取り上げられている。興味深いのはその取り上げ方であり、徹底的に批判の対象としていることである。まるで親の敵^{かたき}のように。甚左衛門の名は両文書合わせて39回登場する。非難の文面からは、彦三郎にとって決して相容れないものと一方では自分にはないものに対するある種の憧憬とが入り混じった複雑な心境が読みとれる。この文書は、後藤彦三郎著「正木甚左衛門列伝」と呼んでも過言でない。

16 石垣解体調査進む ～石垣の修築過程が見えてきた～

史料調査の一方で現場も着実に進行していった。最上面の建物礎石を検出した段階ですでに現石垣台が単一時期のものでないことが予想された。理由は以下の通りである。

(1) 石垣立面に見える修築痕(写真2、第1図立面)

(2) 五十間長屋台平面に見える修築痕(写真1、第1図平面)

現存する菱櫓台から五十間長屋台、橋爪門続櫓台までの石垣が、現在までに少なくとも2回の修築を受けていることがほぼ確実となってきたのである。そして、境界部の土層の切り合い関係から、菱櫓 五十間長屋 橋爪門続櫓の順が確認された。

これにもう一つ付け加えれば、内堀側(打ち込みハギ)の石積みが五十間長屋台とそれ以外では明らかに違うのである。解体作業は横一列に積まれた(布積み)石を一段ずつはずして行くのであるが、菱櫓、続櫓では石列は上面が水平で歩くのに苦労はない。ところが五十間長屋の石はでこぼこして足を滑らしやすく危険である。要するに谷積み傾向があるのであり、明らかに積み手が違うのである(この違いは解体が進むにつれ多方面で検証できるようになっていく)。

創建時期は不明ながら、文献及び調査成果から五十間長屋台修築が宝暦十三年、橋爪門続櫓台修築が文化五年の年代が与えられることになった。なお、『加賀藩史料』等には天明八年にも橋爪門続櫓台石垣を修理した記録が残っている。少なくとも都合4時期の普請の手が加わっていたことが判明してきたのである(その後、菱櫓台が寛文8年(1668)に修築された可能性が浮上してきた)。

17 ジンザ眠りにつく ～記者発表～

いよいよ、記者発表資料のアウトラインが固まってきた。一点は「鋤始」刻石の発見、もう一点は石垣台の修築過程が発掘調査と文献で明らかとなってきたことである。

しかしここで大きな問題に行き当たった。「正木甚左衛門」をどうするかである。先の仮説を検証していくためには、後藤家文書を読破して宝暦十三年の五十間長屋にジンザが関わった記録をもっと探さねばならない。また石垣解体調査の中でも、各地区の石積みの特徴を詳しく分析せねばその特質は明らかにならない。ひょっとして、石垣の中から別の穴生の名前を書いた刻石が出土するかも知れない、等々調査員間で話し合った結果、記者発表ではあえてジンザに触れることはやめておこうということになった。ただし、発表資料にはジンザが宝暦年間に鋤初めをやったこと、安永年間に穴生であったことが書いてあるので、もし、五十間長屋台修築担当穴生について質問があった場合は、ジンザの存在をにおわす程度にとどめようと決めた。

平成10年12月9日、15:00現場事務所で報道関係者を集めてレクチャーが行われた。発表者は現場主任滝川重徳がつとめた。レクチャーは手はずどおり肅々と進んだ。一部、図面のスケールを間違ったり、刻石を出土地点での撮影に持ち運ぶのが遅れたり、どたばたした点もあったがなんとかやり過ごした。この日、ジンザはマスコミに目を覚まされることなく静かに眠っていた。(つづく)

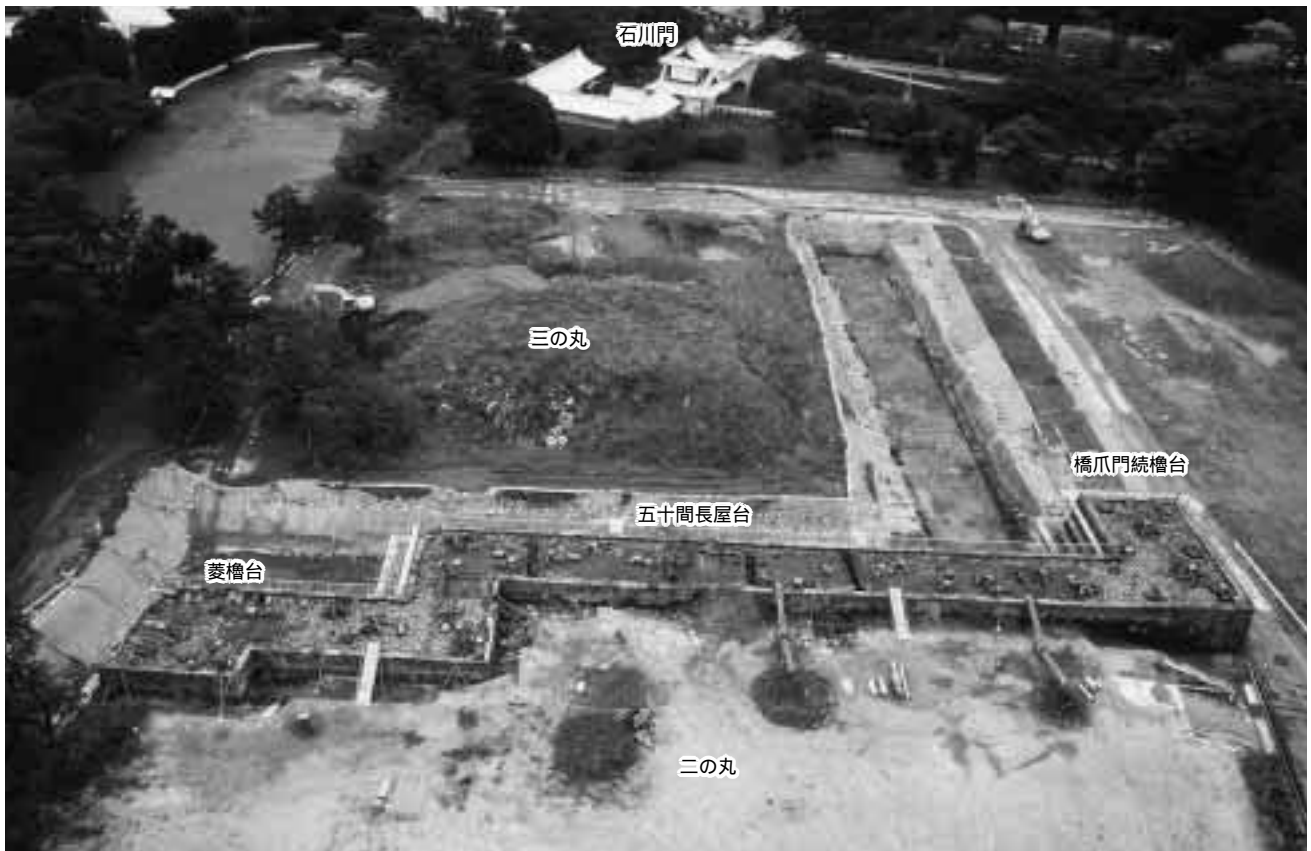
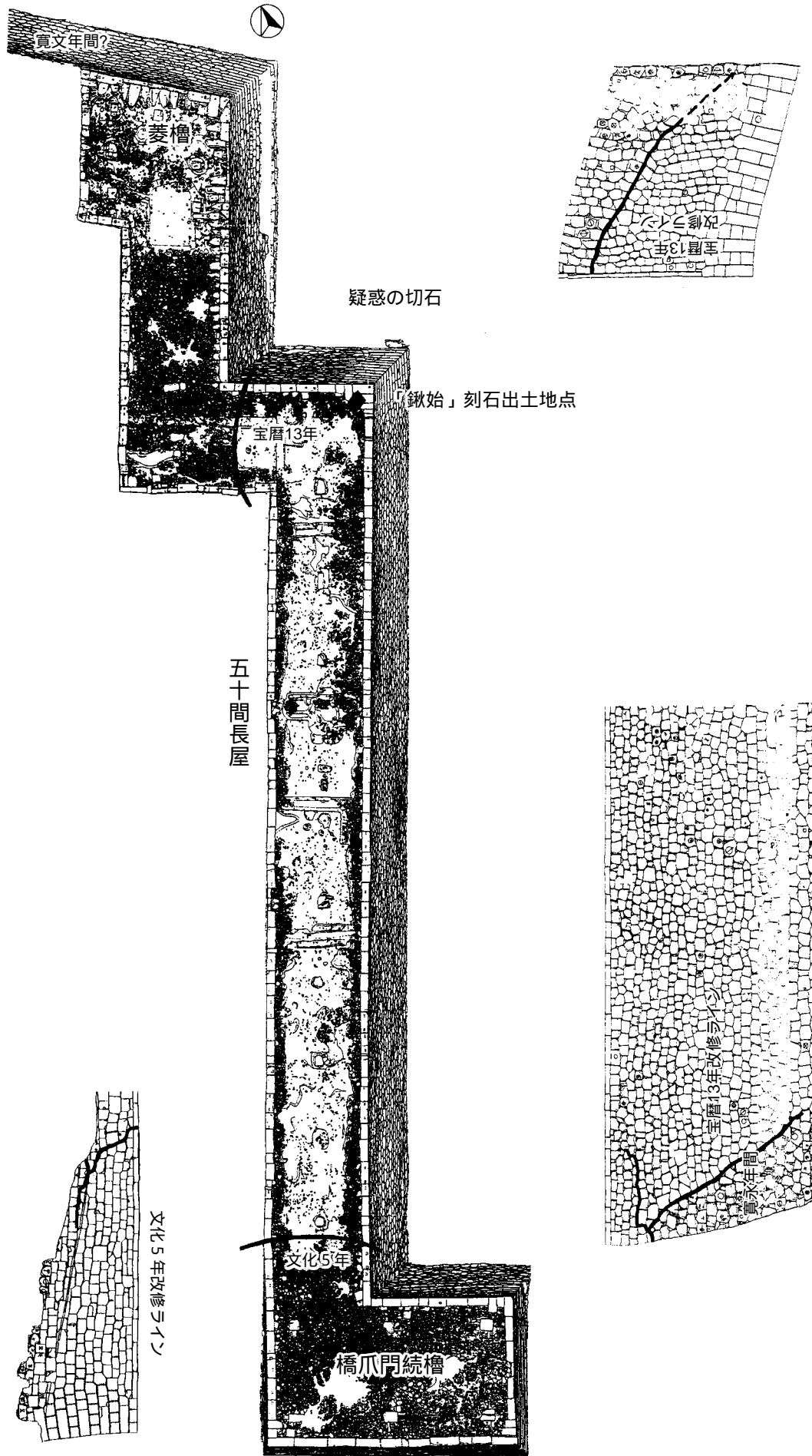


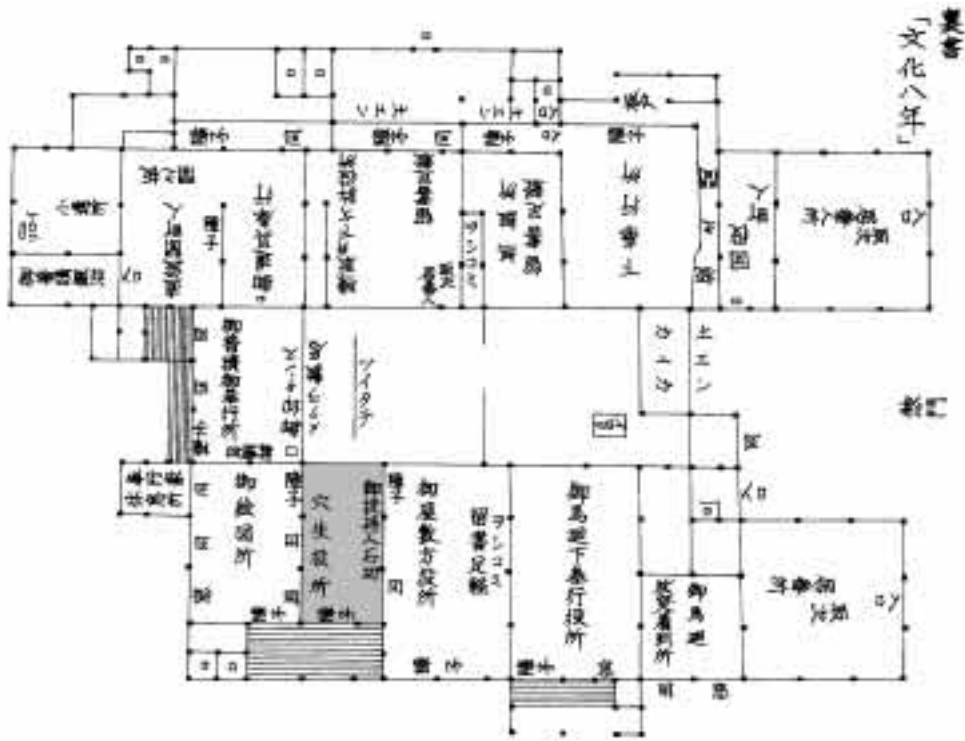
写真1 櫓台・長屋台石垣上面の様子（栗石の広がり注目）



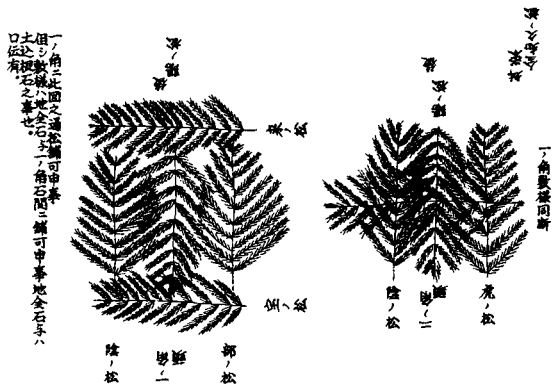
写真2 五十間長屋台北面石垣（宝暦13年の改修ラインが見える）



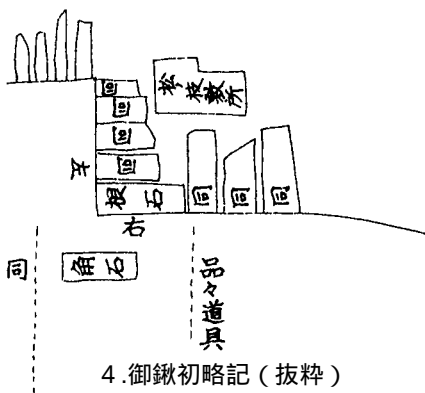
第1図 石垣の修築状況（平面図は1/400、立面図は1/300）



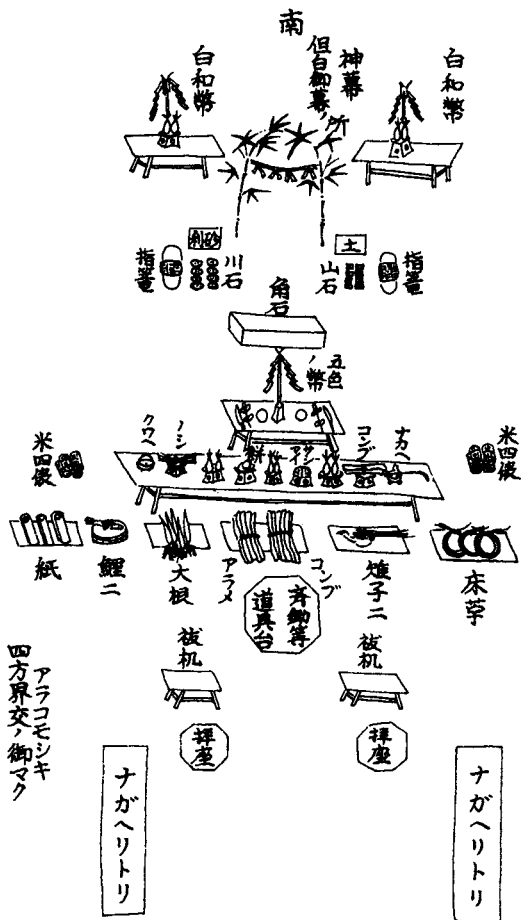
1. 穴生役所之図



3. 御鋤初式之図(三)



4. 御鋤初略記(抜粋)



2. 御鋤初式之図(二)

第2図 普請会所と鋤初め(後藤文庫 『金沢城郭史料』より)

農八國之大本也。依而普譜にも大本之第一之道具ヲ取
 歛初と名付。歛ハ第一番地形根切ニ用る具也。鉄八國
 中之宝也。兵具農具ニ用ヒ、金銀大切にするといへど
 茂名付候時ハ鉄ハ武家也、金銀は公家と知べし。然者
 國之宝也。石垣積方野山の名有。野山あればこそ万民
 何之うれいなく百姓ニ作らせ豊に仕官をする事右鉄ノ
 徳タルべし。石垣積方も右之心を表シ目出度名目を付
 る。別書ニ而知べし。

一御石垣根石取除候時者歛初有べし。神酒ヲそなへ松の
 枝を敷九字ヲ切事也。是則怨敵悪鬼ヲ防ク為御長久を
 奉祈義也。石垣繩十字之繩根元ニシテ是ニ而も悪気等
 を防ク也。万物十字ノはなれ申事ハなく初リノ根也。
 一ノ上上江一ヲ重スレバ則十ノ字也。世界也。十方也。

世界ノ作法極る也。

臨兵闘者皆陣烈在前



石垣九字ノ積方別ニ有。

一角石一本石ヲ忌也。必一本石ノ下ニ一石有べし。一ノ
 文字ハサシシイトよむ也。其外にも忌事有。門台築天
 間四間ニ二間ハせぬ筈也。四二間といふて甚忌也。ケ
 様之所あらば尺ヲ付る事也。

一右歛初当日角石其所江引寄置、木具ニ神酒錫松之枝居
 備ル。酒ノ口ノ輕々蝶花形ヲ付ル。右木具ニ居置松ノ
 枝ヲ取、其所ニ依而敷方違ふ也。其日ノ吉方に向ヒ松
 之枝と錫を敷九字ヲ切押して終ル。夫々木具を為引賀

ヲ敷といへども松迄敷事輕キ本文御普請所江は普請道
 具歛玄翁羽釣鑿丸のミ小鎚タ、キノミ曲尺鶴嘴等筋ル
 也。角石作ラセ申節玄翁七五三ニ為打申也。右終而御
 当日ハ御丁場相止ルトいへど茂其時之様子次第相止メ
 申ニ而も有之間敷普請ハ片時茂はやく御成就專要とす。
 江戸御天守台御歛初、其時分は右様之義茂無御座、後
 出来タル事也。穴生装束は替ル事なし。御城中へ出候
 通、文化五年御歛初之節ハ、上下着用被仰渡、直ニ御
 能拜見、頂載物被仰付候。是は後例ニハ不成事。石垣
 ハ早ク御成就普請之大意也。治世之歛初は先如此也。
 木具も略してもよかるべし。御酒と錫と松ノ枝迄ニ而
 相濟事ニ候。尤吉日を撰べし。寅ノ日ハ大ニ忌也。大
 手御石垣之節輕ク歛初仕候。奉行衆へも相違不申輕ク
 仕候。高御石垣之時者御達ニ而少分拝領物被仰付候。
 普譜之大小もよるべし。ケ様之儀者其時之撰様次第也。
 宝曆年中正木故甚左衛門ハ御達申上被仰付候。御歛初
 ハ大キなる事ニ候。五貫目余之御入用相懸り候。泰ノ
 神主ハ石居ノ規式ヲ習請、ケ様之書物相伝候段御達申
 上、甚左衛門江被仰付。甚左衛門忝人江拝領物被仰付。
 外穴生ハ甚左衛門之手伝ニ候哉不相分、甚左衛門来リ
 御達申上候躰能々承り申候時成哉。當時左様之義
 申出シ候ても家柄之者ニ而もなく取上ハ有之間敷、人
 々正直之時節故也。是も甚左衛門仕合虚ヲよく実ニ仕
 成シ候事器量之者ニ候。家柄之者甚左衛門ノ指一本之
 値もなく残念成事ニ候。御歛初ニ度調候ニ付其端々ヲ
 調置。

第3図 「唯一人伝」にみえる歛初め（後藤文庫 『金沢城郭史料』より 傍線加筆）

金沢城跡石垣調査と刻印

土田 友信

金沢城跡は平成13(2001)年秋の全国都市緑化いしかわフェアの開催地であり、フェア開催にむけて金沢城二の丸北東から南東に位置する菱櫓、五十間長屋、橋爪門続櫓を江戸時代の姿に復元する計画が生じた。これらの建物は明治14年の大火で消失したのを最後に、建物の土台となる石垣台のみが存在していたが、一部にはらみが生じていることが判明した。建築物は華麗壮大な姿になる計画であるが、それとは裏腹に石垣が崩壊する危険性があった。これを理由に石垣の修築が決定した。調査は主に石垣の解体調査と石垣内側の平面調査である。石材建設業者の作業と同時に解体調査が行われ、もし遺構面が検出されると、その地点で解体作業を一時中断し平面調査を行うものである。今回は石垣解体という県内でもあまり類例のない調査について、調査方法と現段階での大まかな結果報告、観察成果より石に刻まれている符号について紹介しよう。

1 石垣解体調査方法

現在幾つかのお城で石垣解体を行っている。仙台城(宮城県)や丸亀城(香川県)など、調査方法は各現場の状況に応じて異なっている。解体調査は緊張の連続である。金沢城の解体方法は業者と我々のペースを合わせたなかで進んでいく。一石にかかる所用時間は6~10分、この時間内に以下のことが行われる。

普通、解体には調査員2人が立ち会う。2人組は記録係、写真係にあらかじめ分けられている。まず、写真係が取り外す石の全体像と隣石との接点をアップで撮影する。記録係は用意してある記録用紙(図1)に、隣石の接点と取り外す石の下の状況を記録するため、取り外すべき石の輪郭を記入する。準備はこれで整った。「お願いします!」と威勢のいい調子で声をかければ、今度は石工が腕を振る番である。職人は慣れた手さばきで数百キロの石にワイヤーを掛け(写真1)、クレーンで吊り上げる。職人の背中からは長年の経験と厳格さがにじみでる。地上から2m位宙に浮くとすかさず写真係が石の裏面を撮る(何百キロある石の裏は一応この時しか見られない)(写真2)。無事に石が運ばれた後、解体した石の下には幾つかの川原石などが敷いてあり、たった今取り外した石の輪郭と矛盾しないように、その状況を記録せねばならない。しかし、たいてい事は簡単に運ばず、隙間から入った何百年の積みもった土や草木の根を取り除かねばならないという作業があるのだ。当然その仕事はフリーの身である写真係に降りてくる。写真係といってもあちらこちらと大変である。掃除後、きれいになった状態を撮る写真係を横目に記録係の最大の山場がやってくる。記録用紙に河原石等の配置を図式化し寸法を計り、石垣の石と噛み合っていた接点の箇所等、気づいた点を暗黙の制限時間の中で記入する(写真3)。記録係は沈黙のプレッシャーを感じつつペンをとる(そんな時にクサ



調査区 (S=1/2,000)



明治初期の菱櫓、五十間長屋、橋爪門続櫓

ピヤカスガイが出てくると10分以内で終われない)。あらゆる重圧の中での格闘は終了と同時に一時の満足感にひたれる。感動のあまり心なしか「お願いします」が誇らしげな美声と変わる調査員もいる。こうしてできた一枚の記録用紙は今後の貴重な資料となって整理される。これを朝8時半から夕方5時まで繰り返せば一日60~80石になり、石垣内部で遺跡が検出されない(平面調査のない)時期は毎日これを繰り返す。解体数は約3500石、調査員は5人、単純計算すると、一人当たり700石分瞬時の記録をとらねばならない。

ここまでだけでも唾然とするかもしれないが、話はまだ終わらない。今度は解体し終わった石自体の観察記録を二の丸広場で行わなければならない。さらに一人700石、これで合計1400石。こちらの場合、多少調査側のペースで許される。だが遺構面の調査や資料作りで手がとられ観察できない時期など、気が付くと数百個の石がたまってしまいう難点もある。調査の視点は、戸室山(石は戸室石と呼ばれる安山岩で戸室山から切り出した)の石をどう割って加工したのか、火災などで受けた傷害、石垣に積むということを考えるとどういった点を意識して石を形創ったのかなどである。記録方法は前述と同様の記録用紙を活用する。火災時に焼けた痕跡や鉛瓦が溶け落ちた鉛の付着ヶ所、面縦横の最大幅と洞の最大長の計測、矢穴(という石を割るための穴)の間隔や大きさの計測、加



写真2 石の裏面

No.	6			日付	990331				
地点	続槽	東	西	(南)	北	五十間長屋	東	西	
	廊下	東	西	南	北	菱槽	東	西	南
番号	ト283								
石質	戸室	色調	赤	(青)?	加工	割石	(切石)	菱石	()
	計測値	控長	幅	重量kg					
刻印	最大長	最大幅	最大厚	面縦径	面横径				
介石									
備考									

記録 Tc1

図1 解体時の記録用紙



写真1 石垣の解体風景



写真3 解体後、記録をとる調査員

工調整方法をA～Eなどで表しノミの入れ方などから、加工方法や技術を調査していくものである。果たして菱櫓、五十間長屋、橋爪門続櫓では特徴が違うのか。そして、観察を通して石垣の表面や胴に符号が打ち込まれているのに気が付いた。その種類は数十種類にもものほり大きさも大小様々でノミでくつきりと彫られているものもあれば、彫られた後に一部ハツられ不鮮明になったものもある。これは「刻印」と呼ばれるもので、観察を進めるに従って石垣改修と関係してきていることが判ってきた。



写真4 「ひょうたん」の刻印

2 江戸時代の改修範囲

菱櫓、五十間長屋、橋爪門続櫓はそれぞれ違った方法で独自に造られており、少なくとも江戸時代の中期と後期で大々的に改修を行っている。石垣の積み方や石材の加工状況、さらには石垣を背後で支える裏込め石、ないし土の切り合い関係などで明らかになってきた。改修箇所は、江戸中期頃の場合、五十間長屋（五十間長屋折れ曲がり部分から橋爪門続櫓の手前まで）が相当する。五十間長屋北東隅に宝暦13年の年号と鍬始鋤始の文字を刻んだ刻石が出土したのもさらに裏付けの一つとなる。江戸後期頃の場合、橋爪門続櫓石垣台が相当する。ということは菱櫓から五十間長屋折れ曲がり部分が一番古い様相を留めており、次に五十間長屋、橋爪門続櫓の順で新しくなっている。文献でも何度かの修築記録がある。宝暦13年(1763)五十間長屋石垣改修の記録(註1)、天明7年(1787)橋爪門続櫓石垣普請の記録(註2)、文化5年(1808)同石垣改修のための図面等(註3)が存在する。これらは上記調査結果と大略合致するものである。

3 刻印と改修

金沢城の石垣をじっくり観ると「卍」「萬字」"〇" "ひょうたん" "松ノ葉" "三ツ団子" (写真4) (註4) などが刻まれている。これらの刻印は主に石垣の正面に多く、正面に二種類あったり、正面以外の胴部分にも刻まれている。また、石垣裏の補強石や栗石中の戸室石といった石垣内部にも刻印が存在していた。橋爪門続櫓内部から検出された高さ約2mの石積み最上部の南西角には「三ツ団子」が、五十間長屋内堀側補強石からは二石、「御用」の文字と共に「丸ノ内十文字」が打ち込まれていた(写真5)。刻印は城内だけではなく戸室山に近い、丁場と推定されるキゴ山の自然石と加工石にも発見されている。これらの石には幅約2cmと城内のものよりも太い線ではっきり



写真5 「御用」と「丸ノ内十文字」



写真6 菱櫓石垣にある「一」「二」の刻印

と刻まれているものもある。実に様々な場所で刻印の存在を確認することができた。

当調査区の刻印の傾向を見ると改修された範囲とそうでない範囲では、刻印の多さや使われている種類に違いが見受けられる。石垣表面の刻印に限った場合、一番古いと想定される菱櫓から五十間長屋折れ曲り部分の石垣には比較的多くの刻印が残るが、改修された江戸中期の五十間長屋部分はそのよりも少なく、さらに江戸後期に改修した橋爪門続櫓の切り込みハギ石垣（石の表面を丁寧に調整した切石造りの石垣）には全くない。種類では、菱櫓から五十間長屋折れ曲り部分の内堀側では漢字の“一”“二”“三”“大”に似た刻印（写真6）がまばらにあるが、他の箇所にはほとんど見られない。

これはどういったことであろうか。よく云われているように、寛永8年(1631)の大火により、藩主の御殿が本丸から二の丸に移行した時に最初の石垣が築かれたとしたならば、最初の普請ではどれだけの刻印が存在していただろうか。もし菱櫓がその頃の面影を残すなら、菱櫓から橋爪門続櫓にかけての広い範囲で多くの量の刻印が存在していた可能性が出てくる。後世の改修において火災やはらみなどでもろくなった石をそのまま使うのではなく、加工調整を施し再び石垣に戻してやるという方法をとった場合、当然改修以前の刻印もハツられ部分的に残ったり又は消失するものである。五十間長屋では確かに薄くなったものや削られて半分になったものがある。もちろん新素材を新たに使用することだって考えられる。

刻印付けは江戸初期の頃が最も多く、その当時の形態を菱櫓が留め、時代が降るに従って刻印付けの量が減少したと考えるなら、五十間長屋や橋爪門続櫓が改修された事実と一致し、刻印と改修との関係が明らかになる。つまり、刻印という側面から改修を裏付けられることになる。しかし現段階では、あくまで可能性に留めて置きたい。なぜなら、刻印の起源や意味がわかっていないからである。なぜ改修された石に刻印を打たないのか理由付けができないのである。前田藩の家臣の合紋とも考えられているが（註4）（表1）これだけの刻印があっていつ誰がどこで打ったのか確かな文献、史料が現在ないからである。石垣、石採場が揃っており、あとは文献だけなのだが…。判らないことが多いこれらの符号を今後も調査していきたい。





刻印	名称	諸士録	石高
卍	萬字	横山山城守長知	三萬石
	ひょうたん	村井左衛門長家	一萬六千五百六十九石
	松ノ葉	本多安房守政重	五萬石
	三ツ団子	寺西若狭秀勝	七千石
	丸ノ内十文字	奥村伊予守永福	一萬一千九百五十石

表1 刻印照合一覧表（田端實作 金沢城石垣刻印調査報告書より）

註1 「文禄年中以来等之旧記」 『金沢城郭史料』 194頁

註2 「文禄年中以来等之旧記」 『金沢城郭史料』 198頁

註3 「橋爪一之門台並櫓台石垣積直指図繪図」 『金沢城郭史料』 445頁

「橋爪櫓台石垣積直出来曲尺台等之控繪図」 『金沢城郭史料』 446頁

「橋爪門櫓台下石積之図」 『金沢城郭史料』 453頁

註4 田端實作 1976年 金沢城石垣刻印調査報告書 城郭石垣刻印研究所

「九 泉」

田村昌宏・滝川重徳

1. はじめに

古代～近世の墓にまつわるもろもろの事象を、考古学的な視点を軸として考えてみようというのが、この連載の主旨である。今回は前号からの続きとして、中世編・近世編の二本立てで責めを果たすこととしたい。研究グループの活動原点である「墓地を歩く」ことは、まだ地に足のついたものではないが、これは今回掲載できなかつた古代編と共に、次号に報告を期したい。

2. 中世墓研究—これまでの軌跡—（加賀編）

本稿は「石川県下ではこれまでどのような中世墓の資料が紹介されているのか。」という素朴な疑問から始まった。今回は加賀編及び前号能登編で漏瀾したものを掲載した。一般的な様相を見ていくと、加賀地域は能登地域と比べ資料が少ない傾向にある。これは、石造遺物の数量の差異によると思われる。また、最近では加賀地域の中世墓の発掘件数が増加している。近年は三浦純夫氏と垣内光次郎氏が墓における地域の特性や石造遺物の概観などについて報告されている。

番号	執筆者名	発行年	遺跡名等	題名	書名	発行機関	備考
1	山森茂	1991	宇ノ気町 多田 (西ヶ峰)		宇ノ気町史 第二輯 集落編	宇ノ気町史編纂委員会	円形墳墓 刀
2	西山憲治	1991	宇ノ気町 気屋 神徳寺		宇ノ気町史 第二輯 集落編	宇ノ気町史編纂委員会	宝篋印塔 卵塔
3	西山憲治	1991	宇ノ気町 気屋 中屋		宇ノ気町史 第二輯 集落編	宇ノ気町史編纂委員会	石仏
4	西山憲治	1991	宇ノ気町 気屋 蘭塔		宇ノ気町史 第二輯 集落編	宇ノ気町史編纂委員会	三味伝承地
5	橋本豊善 小池田	1991	宇ノ気町 鉢伏 閻神社 宇ノ気町 谷 ホウジンボウ		宇ノ気町史 第二輯 集落編	宇ノ気町史編纂委員会	五輪塔
6	富士男	1991	宇ノ気町 上田名		宇ノ気町史 第二輯 集落編	宇ノ気町史編纂委員会	五輪塔
7	杉本長勇	1991	宇ノ気町 大日堂境内		宇ノ気町史 第二輯 集落編	宇ノ気町史編纂委員会	五輪塔
8			宇ノ気町 余地		河北郡誌		すり鉢 鏡 剣
9	櫻井甚一	1974	津幡町 鳥越 弘願寺	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔 宝塔
10	櫻井甚一	1974	津幡町 鳥越 大国主神社	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	宝塔
11	櫻井甚一	1974	津幡町 領家 富士神社	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
12	櫻井甚一	1974	津幡町 能瀬 日吉山王神社	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
13	櫻井甚一	1974	津幡町 北中条 三輪神社	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
14	櫻井甚一	1974	津幡町 御門 白山神社	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
15	櫻井甚一	1974	津幡町 七野 貴船神社	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
16	櫻井甚一	1974	津幡町 富田 白山神社	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
17	櫻井甚一	1974	津幡町 河内 八幡神社	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
18	櫻井甚一	1974	津幡町 加茂 加茂神社	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
19	櫻井甚一	1974	津幡町 下矢田 諏訪神社	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
20	櫻井甚一	1974	津幡町 市谷 八幡神社	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
21	櫻井甚一	1974	津幡町 太田 住吉神社	津幡町の造形文化資料	津幡町史	津幡町史編纂委員会	五輪塔
22	芝田 悟	1988	津幡町 鳥越弘願寺跡	津幡町の造形文化資料	石川考古185号	石川考古学研究会	
23		1980	津幡町 北横根遺跡	鳥越弘願寺跡の寶塔一城郭寺院調査の記録(3)-	津幡町谷内石山遺跡	津幡町教育委員会	珠洲焼壺(13世紀後半)
24		1988	津幡町 刈安野々宮遺跡		刈安野々宮遺跡	石川県立埋蔵文化財センター	
25	辻森由美子	1991	津幡町 越中坂	河北郡津幡町越中坂地内の遺跡について	石川考古205号	石川考古学研究会	珠洲焼 塚 五輪塔 板碑 石仏 (14世紀後半 - 15世紀)
26		1970	金沢市 普正寺遺跡		普正寺遺跡	石川考古学研究会	
27	吉岡康暢	1989	金沢市 普正寺遺跡	学史に残る普正寺中世墓石塔群の調査	石川考古189号	石川考古学研究会	
28	吉岡康暢	1970	金沢市 小坂1号		石川考古学研究会会誌第13号	石川考古学研究会	土坑墓 珠洲焼壺 (14世紀中 - 後)
29		1971	金沢市 高尾城跡	金沢市小坂第1号墳の調査	高尾城址調査概報	石川県教育委員会	五輪塔 土坑墓 珠洲焼壺 骨 (15世紀)
30		1976	金沢市 塚崎遺跡		北陸自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書	石川県教育委員会	
31		1978	金沢市 二塚・二ツ寺		二塚郷土史	二塚郷土史編纂委員会	五輪塔
32		1978	金沢市 二塚 赤土		二塚郷土史	二塚郷土史編纂委員会	五輪塔
33		1978	金沢市 二塚 佐寄森		二塚郷土史	二塚郷土史編纂委員会	五輪塔
34		1978	金沢市 二塚 稚日野		二塚郷土史	二塚郷土史編纂委員会	五輪塔
35		1978	金沢市 二塚 北塚		二塚郷土史	二塚郷土史編纂委員会	五輪塔
36	宮本哲郎	1993	金沢市 御廟谷墳墓群	額谷御廟谷遺跡について	石川考古学研究会会誌第36号	石川考古学研究会	
37		1995	金沢市 額谷カネカヤブ遺跡		金沢市文化財紀要121 額谷カネカヤブ遺跡	金沢市教育委員会	
38		1996	金沢市 金石本町遺跡		金沢市文化財紀要125 金石本町遺跡	金沢市教育委員会	五輪塔

番号	執筆者名	発行年	遺跡名等	題名	書名	発行機関	備考
39		1997	金沢市 梅田B遺跡		社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報9	社団法人石川県埋蔵文化財保存協会	宝篋印塔
40		1998	金沢市 藤江C遺跡		藤江C遺跡現地説明会資料	財団法人石川県埋蔵文化財センター	
41	上田永吉	1970	松任市 剣崎 寺田家		林中のうつりかわり	林中村誌編集委員会	五輪塔
42	上田永吉	1970	松任市 剣崎 郷宮 白山神社		林中のうつりかわり	林中村誌編集委員会	宝篋印塔
43		1972	松任市 中奥 五器山遺跡		石川県中奥村誌	中奥村誌編集委員会	五輪塔 宝篋印塔 珠洲礎 古瀬戸
44		1972	松任市 幸明 西方寺址		石川県中奥村誌	中奥村誌編集委員会	五輪塔 経石
45		1972	松任市 倉光 神社		石川県中奥村誌	中奥村誌編集委員会	五輪塔
46		1972	松任市 三浦 中川家		石川県中奥村誌	中奥村誌編集委員会	五輪塔
47		1972	松任市 乾 高田家		石川県中奥村誌	中奥村誌編集委員会	五輪塔
48		1972	松任市 橋爪 地藏堂		石川県中奥村誌	中奥村誌編集委員会	五輪塔 宝篋印塔
49		1972	松任市 福正寺 地藏堂		石川県中奥村誌	中奥村誌編集委員会	五輪塔 宝篋印塔
50		1972	松任市 幸明 共同墓		石川県中奥村誌	中奥村誌編集委員会	五輪塔 宝篋印塔
51		1975	松任市 村井 円寿寺跡		石川県一木村誌	一木村誌編集委員会	五輪塔
52		1975	松任市 米永 菅原神社		石川県一木村誌	一木村誌編集委員会	五輪塔
53		1986	松任市 剣崎遺跡		剣崎遺跡		石川県立埋蔵文化財センター 五輪塔 越前焼甕 (14世紀末-15世紀前半)
54		1989	松任市 中村ゴウデン遺跡		松任市中村ゴウデン遺跡	松任市教育委員会	木棺墓(12世紀)
55		1989	松任市 宮永坊の森遺跡		宮永坊の森遺跡	石川県立埋蔵文化財センター	土墳墓
56		1990	松任市 徳光		徳光町誌	徳光町誌編集委員会	五輪塔
57		1990	松任市 御廟谷		徳光町誌	徳光町誌編集委員会	五輪塔 宝篋印塔
58		1991	松任市 村井キヒダ遺跡		宮丸遺跡・村井北遺跡 北出遺跡・村井キヒダ遺跡 米永古屋敷遺跡	石川県立埋蔵文化財センター	火葬土坑 (15世紀後半-16世紀前半)
59		1996	松任市 宮永市カキノキバタケ遺跡		松任市宮永市カキノキバタケ遺跡	松任市教育委員会	土墳墓
60		1997	松任市 中奥・長竹遺跡		第5回石川県内市町村埋蔵文化財連絡協議会資料	石川県内市町村埋蔵文化財連絡協議会	五輪塔
61		1971	野々市町 末松庵寺跡		史跡末松庵寺	野々市町教育委員会 末松庵寺調査団	土墳墓か?(鎌倉期)
62		1998	野々市町 扇が丘ゴシヨ遺跡		扇が丘ゴシヨ遺跡	石川県立埋蔵文化財センター	地下式墳墓か?
63	吉岡康暢	1963	鶴来町 日吉町墳墓		鶴来町の古代中世遺跡		加賀焼甕(13世紀)
64		1974	鶴来町 館畑・行町共同墓地				
65		1985	鶴来町 白山町遺跡		館畑のあゆみ	館畑のあゆみ編集委員会	五輪塔
66	垣内光次郎	1989	鶴来町 白山町遺跡	中世鶴来の遺跡と文化財「鶴来びとの暮らしと祈り」	鶴来町史 歴史編 原始・古代・中世	鶴来町史編集室	
67	三浦純夫	1989	鶴来町 白山町遺跡(白山町墳墓)	中世鶴来の遺跡と文化財「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史 歴史編 原始・古代・中世	鶴来町史編集室	五輪塔 宝篋印塔
68	高堀勝喜	1989	鶴来町 白山カッサカ遺跡(白山町遺跡)	鶴来町域における古代・中世の歩み「調査、研究の足どり」	鶴来町史 歴史編 原始・古代・中世	鶴来町史編集室	65. 66. 67 と同遺跡
69	三浦純夫	1989	鶴来町 浄養寺墓地	中世鶴来の遺跡と文化財「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史 歴史編 原始・古代・中世	鶴来町史編集室	五輪塔 文明2年、3年、5年、16年、延徳3年紀銘(宝篋印塔)
70	三浦純夫	1989	鶴来町 三宮共同墓地	中世鶴来の遺跡と文化財「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史 歴史編 原始・古代・中世	鶴来町史編集室	五輪塔 宝篋印塔
71	三浦純夫	1989	鶴来町 三宮墓山遺跡	中世鶴来の遺跡と文化財「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史 歴史編 原始・古代・中世	鶴来町史編集室	五輪塔
72	三浦純夫	1989	鶴来町 三宮町カヌシヤマ	中世鶴来の遺跡と文化財「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史 歴史編 原始・古代・中世	鶴来町史編集室	五輪塔
73	三浦純夫	1989	鶴来町 白山上野B遺跡	中世鶴来の遺跡と文化財「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史 歴史編 原始・古代・中世	鶴来町史編集室	五輪塔
74	三浦純夫	1989	鶴来町 三宮町レンゲシ	中世鶴来の遺跡と文化財「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史 歴史編 原始・古代・中世	鶴来町史編集室	五輪塔
75	三浦純夫	1989	鶴来町 白山青年の家前	中世鶴来の遺跡と文化財「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史 歴史編 原始・古代・中世	鶴来町史編集室	五輪塔 宝篋印塔 (室町後期)一石 五輪塔(室町後期)
76	三浦純夫	1989	鶴来町 白山町かたがり地蔵橋	中世鶴来の遺跡と文化財「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史 歴史編 原始・古代・中世	鶴来町史編集室	五輪塔(室町後期)
77	三浦純夫	1989	鶴来町 日御子町神影荘	中世鶴来の遺跡と文化財「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史 歴史編 原始・古代・中世	鶴来町史編集室	五輪塔 宝篋印塔
78	三浦純夫	1989	鶴来町 普谷町	中世鶴来の遺跡と文化財「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史 歴史編 原始・古代・中世	鶴来町史編集室	五輪塔
79	三浦純夫	1989	鶴来町 安養寺町釣鐘堂跡	中世鶴来の遺跡と文化財「鶴来地域の石造遺物」	鶴来町史 歴史編 原始・古代・中世	鶴来町史編集室	五輪塔
80	三浦純夫	1990	鶴来町	加賀鶴来における有紀年銘五輪塔とその周辺	石川考古学研究会会誌第33号	石川考古学研究会	白山比 神社周辺の石造物を紹介
81		1998	鶴来町 古宮遺跡		古宮遺跡	鶴来町教育委員会	
82	吉岡康暢	1965	小松市 正蓮寺	小松市正蓮寺地内で礎石・陶器・五輪塔・炭化材が発見された	石川考古29号	石川考古学研究会	五輪塔
83		1972	小松市 津波倉ホットシ遺跡		紀要第7号	北陸大谷高等学校地歴クラブ	
84	宮下幸夫・小村茂・上野与一	1978	小松市 津波倉ホットシ遺跡	小松市津波倉ホットシ遺跡	石川考古学研究会会誌第21号	石川考古学研究会	地下式墳 美濃天目 (15世紀中-16世紀前半)
85		1973	小松市 軽海中世墓群		軽海中世墓址群 - 発掘調査概報 -	小松市教育委員会	配石墓(14-15世紀前半)
86			小松市 牧口中世墓地		小松市史 第四巻	小松市教育委員会	塚 加賀焼甕 (13世紀末-14世紀前半)
87		1988	小松市 佐々木アサバタケ遺跡		小松市 佐々木アサバタケ遺跡	石川県立埋蔵文化財センター	五輪塔 宝篋印塔 宝塔
88	藤田邦雄	1989	小松市 牧口中世墓地	中世土器素描	北陸の考古学	石川考古学研究会	
89		1995	小松市 白江梯川遺跡		社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報7	社団法人石川県埋蔵文化財保存協会	五輪塔 宝篋印塔
90		1996	小松市 額見町西遺跡		石川県立埋蔵文化財センター年報第18号	石川県立埋蔵文化財センター	火葬場遺構

番号	執筆者名	発行年	遺跡名等	題名	書名	発行機関	備考
91		1997	小松市 八里向山F遺跡		第5回石川県内市町村埋蔵文化財連絡協議会資料	石川県内市町村埋蔵文化財連絡協議会	積石塚2基 珠洲、加賀焼壺・鉢(13世紀後半)
92		1998	小松市 八幡遺跡		小松市八幡遺跡	社団法人石川県埋蔵文化財保存協会	土塚墓 五輪塔(15世紀前半)
93		1982	辰口町 下開発茶臼山遺跡		辰口町下開発茶臼山古墳群	辰口町教育委員会	土葬墓(14世紀)
94		1987	辰口町 ツカ遺跡		辰口町史 第二巻 前近代編	辰口町教育委員会	塚 土塚墓 五輪塔(13世紀-14世紀中)
95		1985	辰口町 湯屋チョウツカ遺跡		辰口町湯屋チョウツカ遺跡	辰口町教育委員会	塚 土塚墓 五輪塔(13世紀-14世紀中)
96		1987	辰口町 和佐谷墓地		辰口町史 第二巻 前近代編	辰口町史編纂室	五輪塔 石積施設
97		1987	辰口町 金剛寺坂中世墳墓群		辰口町史 第二巻 前近代編	辰口町史編纂室	塚 五輪塔 宝篋印塔(13世紀)
98	宮本哲郎	1989	辰口町 金剛寺坂中世墳墓群	中世墳墓の盗掘について	石川考古188号	石川考古学研究会	
99		1987	辰口町 鍋谷中世墓		辰口町史 第二巻 前近代編	辰口町史編纂室	五輪塔
100		1987	辰口町 岩本中世墓		辰口町史 第二巻 前近代編	辰口町史編纂室	五輪塔 宝篋印塔
101		1987	辰口町 大口中世墓		辰口町史 第二巻 前近代編	辰口町史編纂室	五輪塔
102		1998	辰口町 宮竹沙弥城山遺跡		能美丘陵東遺跡群	石川県立埋蔵文化財センター	
103		1998	辰口町 宮竹墓谷中世墳墓群		能美丘陵東遺跡群	石川県立埋蔵文化財センター	
104		1993	根上町 西任田 西大御神社		根上町史 史料編 上	新修根上町史編纂専門委員会	五輪塔(15世紀)
105		1993	根上町 俱神社		根上町史 史料編 上	新修根上町史編纂専門委員会	五輪塔 宝篋印塔(15世紀)
106		1993	根上町 トウバ		根上町史 史料編 上	新修根上町史編纂専門委員会	宝篋印塔(15世紀)
107		1993	根上町 西二口町墓地		根上町史 史料編 上	新修根上町史編纂専門委員会	五輪塔 宝篋印塔(15世紀)
108		1993	根上町 福島 旧日吉神社境内跡		根上町史 史料編 上	新修根上町史編纂専門委員会	五輪塔(15世紀)
109		1993	根上町 浜開発 西川排水路		根上町史 史料編 上	新修根上町史編纂専門委員会	五輪塔(15世紀)
110	牧野隆信・小森秀三・田嶋正和	1979	加賀市 柴山中世墓	柴山町出土の蔵骨器	石川考古学研究会会誌第22号	石川考古学研究会	火葬墓 珠洲焼壺 越前焼鉢(13世紀後半)
111		1987	加賀市 敷地天神山遺跡		敷地天神山遺跡群	石川県立埋蔵文化財センター	地下式塚 土塚(15世紀後半) 墓か
112		1987	加賀市 三木だいもん遺跡		三木だいもん遺跡	加賀市教育委員会	木棺墓(13世紀後半)

中世墓研究 これまでの軸跡 (能登 補遺編)

番号	執筆者名	発行年	遺跡名等	題名	書名	発行機関	備考
1	橋本澄夫	1989	珠洲市 法住寺墓地	惨! 珠洲法住寺墓地の盗掘現場を見た	石川考古192号	石川考古学研究会	
2	加賀真樹	1990	珠洲市 法住寺墓地	珠洲古陶関係遺跡詳細分布調査について	石川考古197号	石川考古学研究会	
3	加賀真樹	1992	珠洲市 法住寺墓地	珠洲焼を巡る最近の状況について	石川考古213号	石川考古学研究会	
4	三浦純夫	1999	珠洲市 法住寺墓地	石造遺物 考古史料	法住寺史料調査報告書	珠洲市教育委員会	
5	芝田 悟	1995	輪島市 三井町	輪島市三井町小泉の石造遺物 一 大用寺の五輪塔 所刻板碑一	石川考古231号	石川考古学研究会	
6	吉岡康暢	1966	柳田村 黒川	柳田村五十里にて横穴墓1基、同黒川白山神社境内に中世墓地を確認	石川考古35号	石川考古学研究会	珠洲蔵骨器
7		1977	能都町 藤波遺跡	能都町で中世遺跡発掘	石川考古109号	石川考古学研究会	蔵骨器
8	橋本澄夫	1974	中島町	能登縦貫自動車道建設工事で中世?墳墓を破壊	石川考古84号	石川考古学研究会	
9		1977	中島町 長浦中世墓地	中島町で中世墳墓群発見	石川考古104号	石川考古学研究会	
10		1977	中島町 長浦中世墓地	長浦の中世墓地を発掘	石川考古105号	石川考古学研究会	五輪塔 蔵骨器 石仏
11		1977	中島町 長浦中世墓地	県道工事で中世墳墓出現	石川考古111号	石川考古学研究会	
12	三浦純夫	1996	中島町	板碑の立つ風景	中島町史 通史編	中島町史編纂専門委員会	
13	高堀勝喜	1961	鹿島町	鹿島町の耕地整理中に四耳壺と地蔵板碑が伴出	石川考古5号	石川考古学研究会	蔵骨器
14	吉岡康暢	1966	鹿島町 徳前	鹿島町農協裏山にて人骨を包蔵した珠洲焼壺を発見	石川考古38号	石川考古学研究会	
15	橋本澄夫	1975	鹿西町 円正寺	金丸で中世墓が出現	石川考古85号	石川考古学研究会	珠洲蔵骨器 人骨
16	金沢大学文学部考古学研究室	1990	鹿西町 阿弥陀敷遺跡	鹿島郡鹿西町西馬場阿弥陀敷遺跡の発掘調査	石川考古203号	石川考古学研究会	
17		1977	志賀町 坪野遺跡	坪野の中世遺構発掘	石川考古110号	石川考古学研究会	塚 蔵骨器

3. 近世北陸農村部の墓地

前号では、金沢城下町における近世墓地の発掘調査例を紹介した。そこでは、土葬が主体というそれらの非在地性を論じるのに急で、真宗地帯・農村部における火葬の普及という事象を、自明のこととした感があった。大局的にはともかく、その起源、浸透の在り方、非真宗農村の葬法、その他の諸点で、本来一言で済ます問題ではなかった。その反省も込めて、今回は石川県とその隣県における、近世農村墓地の発掘調査例に焦点を当てることとしたい。

石川県を始め、北陸四県での近世墓の発掘調査例は、単独に検出されたものを含めても少ない。近年目覚ましく類例が増えつつある中世墓に比べると寥々たるものである。東京都など特異な地域を除けば、近世墓の調査例の少なさは全国的趨勢であるとはいえ、地方単位の比較では、九州・中四国・近畿・関東に遠く及ばないものと思われる。これは立地・継続性の他、北陸における近世墓・墓地の本質的な属性とあるいは関わるのかも知れないが、今は指摘のみに留め、数少ない調査例を概観したい。

石川県では、乾遺跡上面（松任市）¹⁾、上町和住下遺跡（鳳至郡柳田村）²⁾等が調査されている。

乾遺跡は加賀平野の中央、典型的な平野部農村地帯に立地する。上層（近世）の遺構は方形（隅丸方形）・円形（楕円形）を呈する、一辺ないし径1～3mを測る土坑が主体で、内部に集石を持つものも認められる。土坑内の出土遺物として、中国・肥前・越中瀬戸・越前等の各種陶磁器の他、漆器椀、煙管、経木塔婆、被熱により溶着した銅銭等がある。人骨は未検出であるが、遺物の性格から、墓地跡である可能性が高い。また陶磁器各製品の特徴から、遺構面の年代は17世紀前半頃を中心とすることが考えられる。なお溶着銅銭の出土は火葬を示唆するが、経木塔婆の墨書は、宗派上真言宗に関連するものとされる。

上町和住下遺跡は能登半島北部、いわゆる奥能登の丘陵地帯に位置する。縄文時代中期の集落が主体であるが、台地縁辺部において火葬骨を埋納した土坑・ピット11基、火葬炉跡1基が検出された。下部の炭層と上部の地山質土との間に火葬骨が集中する、径40～100cm前後の土坑が多い。陶製蔵骨器を用いた土坑は1基のみであり、副葬品はみられない。陶製蔵骨器は内面に格子目状の当て具痕を残す肥前陶器タタキ小甕で、17世紀後半～18世紀前半頃の生産年代が考えられよう。なお火葬炉跡は炭化材・焼土塊を含む溝状の遺構で、通風溝部分が遺存していたと思われる。

富山県では、印田近世墓（魚津市）³⁾、安養寺遺跡（富山市）⁴⁾、下老子笹川遺跡A2地区（砺波郡福岡町）⁵⁾、中名 遺跡A2区・持田 遺跡（婦負郡婦中町）⁶⁾等がある。

印田近世墓は魚津市街東郊、純水田地帯に立地する。調査前は水田畦畔上に残された、わずかな塚状高まりといった外観を呈し、中世後半の板石塔婆（板碑）が1基立てられていた。調査の結果、塚状高まりを構成する盛土中から越中瀬戸の蔵骨器6点が出土した。蔵骨器のうち3基には、銅銭がそれぞれ2枚・7枚・1枚副葬されていた。銅銭は確認できるものはすべて寛永通宝であり、寛文8年（1668）初鑄の文銭等いわゆる新寛永が含まれる。報告では改葬の可能性も指摘されている。

安養寺遺跡は富山平野の中央、神通川支流の熊野川右岸に立地する。近世墓関連の遺構として、一辺2～3mの略形状を呈する土坑中に、礫をコの字状に配する「配石墓」3基、径1m強の略円形を呈する「土墳墓」2基の二種が検出されており、双方から越中瀬戸の皿、「土墳墓」からは加えて鉄製品・釘が出土している。遺構の形状から墓である可能性は強いが、いずれも人骨は未確認である。

下老子笹川遺跡は砺波平野を構成する庄川扇状地扇端部に立地する。A2区は近世村落の縁辺部に相当し、火葬骨・炭片を大量に含む土坑1基の他、火葬炉の可能性のある長円形の皿状土坑が検出されている。A2区周辺から出土した遺物の時期は、近世後半が主体となる。

中名 遺跡・持田 遺跡はともに富山平野の西南部に位置する。中名 遺跡 A 2 地区では中近世の屋敷地の一角が検出されており、近世土台建物に近接して炭化物・焼骨片が含まれる土坑が 2 基認められる。調査担当者は茶毘の場である土坑をそのまま墓にしたものと評価し、一般に葬儀の簡略化を教是とする浄土真宗の影響を指摘している。持田 遺跡 B 区では楕円～長円形の配石墓が 3 基検出された。焼骨片・中世陶器（八尾窯）以外に出土遺物はないが、覆土から近世に属すると考えられている。

新潟県では大墓遺跡（西蒲原郡黒埼町）⁷⁾、焼屋敷遺跡近世墓（燕市）⁸⁾等が調査されている。

大墓遺跡は新潟平野の一角、信濃川支流の自然堤防上に所在するもので、調査前は約 5～7m 四方、高さ約 70cm を測る土壇状地形を呈していた。調査の結果、土壇＝墳丘上部・下部とその周辺において、蔵骨器 10 点以上・火葬骨埋納穴 51 基が検出された。陶製蔵骨器は主として墳丘上部に、火葬骨埋納穴は墳丘中部・下部に分布している。墳丘中部の火葬埋納穴から肥前陶器碗・皿、瀬戸美濃系陶器灰釉内禿皿等 16 世紀末～17 世紀前半頃の製品が出土しているが、蔵骨器を含め墳丘上部の出土陶磁器は 17 世紀後半以降の製品で占められる。

焼屋敷遺跡近世墓は新潟平野の中央、大墓遺跡と同じく自然堤防上に発達した集落のはずれに所在する。近世墓は一辺 12～13m、高さ約 1m の土壇＝墳丘を盛土造成し、この上部に蔵骨器を埋納するものである。蔵骨器は墳丘上径 2m 程の範囲にのみ 5 点検出された。蔵骨器は、素焼陶器（土器？）壺 3 点、肥前陶器タタキ小甕 1 点、同松絵水甕（刷毛目系二彩手）1 点で構成される。確実な副葬品は認められない。本近世墓は「登坂家」という旧家が所有していたもので、かつて天保 3 年（1832）銘の墓標が 1 基残っていたが、調査前までに移転した。また蔵骨器の少なさは、近年の改葬の結果によるものと思われる。

以上の例が全てではないにしろ、まとまった発掘調査報告としてはめばしいものである。だがわずかな事例とはいえ、何らかの傾向を見いだすことは不可能ではない。

まず乾遺跡上層・安養寺遺跡で検出されたやや大型の土坑・「配石墓」であるが、これらは年代上、近世でもごく初期に位置付けられ、むしろ中世墓との近縁性・連続性を感じさせる。

一方、印田・大墓・焼屋敷の近世墓はいずれも水田に囲まれた塚状高まりとして存在していたものである。立地こそ違え、上町和住下の場合も、報告によれば近世土坑一帯は周囲より一段高く、土壇状の構造物があった可能性が指摘されている。この例を含めても、土壇（墳丘）の大きさは一辺 10m 前後に収まる。焼屋敷の例を敷衍すれば、これらは家単位の墓地であった可能性が考えられる。

また中名・下老子笹川・持田 各遺跡の事例は、屋敷地内に営まれるか、もしくは集落域に近接し、墓坑が集中しないという特徴が類似する。加うるに副葬品・蔵骨器の欠如等、全般に簡素な印象を与えるものである。

以上発掘調査の成果からは、一応 3 タイプの近世墓の存在が認識できる。この中には、典型的な集落単位の墓（村墓）が含まれないが、現在加賀平野の各集落に見られる墓地は、近代以後移転を繰り返した場合もあるが、存在自体は近世に遡るものと考えられるので、偶然か、あるいは現代への継続性に関わるのか、何らかの理由で発掘調査が及んでいないのであろう。

葬法については、取り上げた事例がいかにも少なく、全体の趨勢が判明するわけではないが、火葬の普遍性は否定し難いところであろう⁹⁾。それはともかく、火葬の普及と、浄土真宗の浸透、そして全国的には戦国期以後進行する百姓層の墓地形成というそれぞれの事象がどのように関連し、17 世紀後半以後の近世的百姓の墓制へ帰結してゆくのか¹⁰⁾、また小稿で確認した近世墓の各タイプはこの流れの中でどう位置付けられるのか¹¹⁾。これらを「九泉」の課題の一つとしておきたい。

今回は紙幅の都合もあって発掘調査のみの紹介に終始したが、近世墓地にしても発掘調査の対象となるものは、大抵の場合、上部施設が失われている。この点で発掘調査は必ずしも全てを解明できる方法とは言えない。むしろ近世の景観を残した墓地が消えゆく中、現存墓地の踏査が急務であり⁽¹²⁾、発掘調査と相互補完的に成果を挙げてゆくことが望まれる。

註

- 1) (社) 石川県埋蔵文化財保存協会 1992 「乾遺跡」『社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会年報 3』
- 2) 小嶋芳孝・岩瀬由美他 1998 『上町和住下遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 3) 斉藤隆・麻柄一志 1981 『印田近世墓発掘調査報告書』 魚津市教育委員会
- 4) 藤田富士夫 1998 『富山市安養寺遺跡発掘調査報告書』 富山市教育委員会
- 5) 財団法人富山県文化振興財団・埋蔵文化財調査事務所 1996
「下老子笹川遺跡 A1・A2地区」『埋蔵文化財調査概要 - 平成7年度 - 』
- 6) 財団法人富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所 1997
「中名 遺跡 A2区」「持田 遺跡 B地区」『埋蔵文化財調査概要 - 平成8年度 - 』
- 7) 新潟県教育委員会 1973 「西蒲原郡黒埼町大墓遺跡調査報告」『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 8) 新潟県教育委員会 1976 「焼屋敷遺跡」『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 9) 『富山大百科事典 下』(北日本新聞社 1994)によれば、富山県 = 越中のうち、大沢野・立山・大山・小杉・福岡の各町、及び五箇山地方では、江戸期の土葬跡が確認されるとある。近年小杉町高寺遺跡で近世土葬墓が発掘された例もある(宮田進一 1998 「各地域の動向 富山県」『北陸中世の金属器』 北陸中世考古学研究会)。但し高寺遺跡は真言宗蓮王寺の門前に位置する点に注意されよう。
- 10) 真宗地帯には、遺骸を茶毘に付した後、焼骨の一部を本山・檀那手寺に納めるのみで、墓(石塔)を設けない地域のあることが知られている。真宗の教義に照らせばこのような在り方がむしろ正統的であったと推測する向きもあり、本文の冒頭で触れた、北陸地方の近世墓地発掘調査例の少なさを考える上で示唆的である。
児玉識 1976 「真宗地帯の風習 - 渡りの宗教生活を探る - 」『日本宗教歴史と民俗』 隆文館
(最上孝敬編 1979 『葬送墓制研究集成 第四巻・墓の習俗』 名著出版 所収。)
蒲池勢至 1993 「「無墓制」と真宗の墓制」『国立歴史民俗博物館研究報告第49集』
- 11) 大墓遺跡では、土壇の基盤面・土壇の中位盛土面から切り込まれた火葬骨埋納穴が目目される。近世初期以前から墓地であった場を受け継ぐ一方、土壇構築という新たな区画原理を設けることにより、家単位の墓 = イエ八カが形成されてゆくプロセスが、ここから読み取れはしないだろうか。
- 12) 発掘に抛らない、現存墓地についての優れた研究として、石川県では輪島市時国家墓地の調査がある。
吉岡康暢他 1995 「奥能登時国家墓地の調査 - 上時国家“古墓”を中心に」『奥能登と時国家調査報告編 2』 神奈川大学日本常民文化研究所奥能登調査会編 平凡社

弥生時代中期の複合口縁壺について

林 大智・河合 忍

はじめに

この発端は2月後半、新潟県の調査員から金沢市戸水B遺跡等の土器を見たいという話があり、土器を準備していた際に、林が戸水B遺跡出土土器のコンテナの中に見慣れない白い土器を見つけたことに始まる。それは北陸ではあまり見慣れないタイプの壺形土器（以下「形土器」を省略）の口縁部破片であった。調べてみると、それは石川県教育委員会が刊行した戸水B遺跡（1次調査）の報告書に掲載されているものであった（第12図21⁽¹⁾）。何回もこの報告書を見ていたつもりではあったが、見過ごしていた理由の一つとして、実測図の土器の傾きが少々間違っていたことがあった。図を修正したものが第2図1である。頸部より口縁部下端まではゆるやかに外湾し、そこから口縁端面までは内湾気味に立ち上がる形態を持つものである。このような形態を有する壺に見覚えがあった筆者は同じ時期の土器が出ている報告書を調べてみた。すると、似たような土器は戸水B遺跡に隣接する藤江C遺跡や犀川を越えて南側に所在する金沢市専光寺養魚場遺跡にあった。北加賀にある程度まとまりをもって存在することが予想できた。しかし、調査を進めてみると、この土器が主に分布する地域は九州～西部瀬戸内であることがわかってきた。

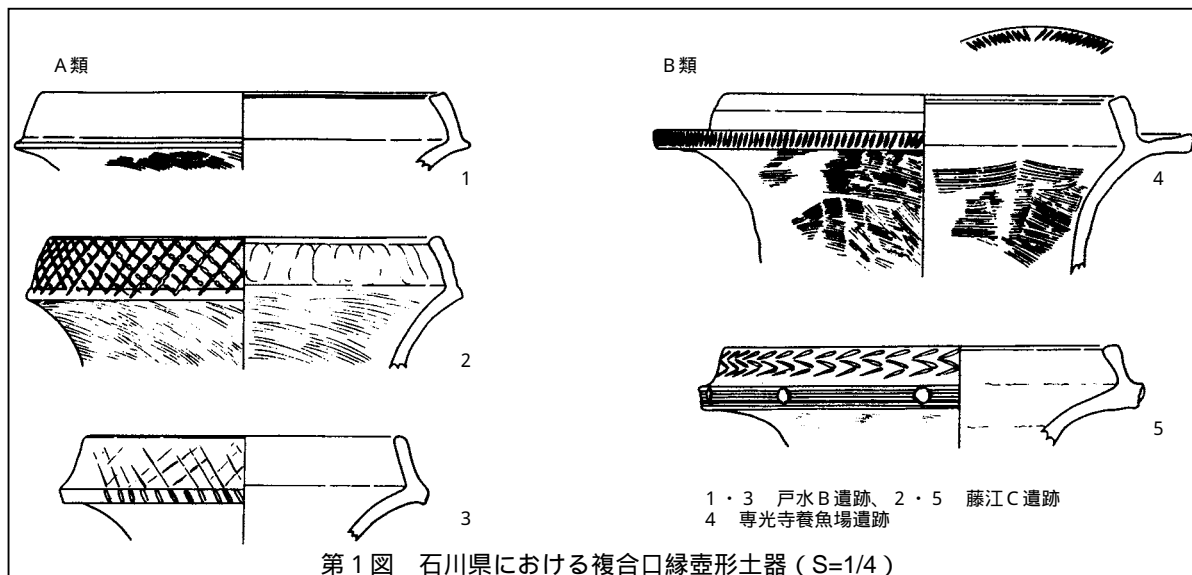
本稿はこの特徴的な口縁部形態を有し、かつ分布が捉えやすい複合口縁を持つ壺に焦点を当て、若干の考察を行い、そこから派生する問題を整理し、提起することを目標としたものである。

本稿における一連の作業等は全て林と河合が協力して行い、河合が執筆・構成を行った。本稿に関する文責は全て河合にあることをまず断っておきたい。

北陸における複合口縁壺

まず、北陸における複合口縁壺について調べてみた。今のところ、全て北加賀（金沢市）からの出土であり、合計6点を確認することができた。

第1図はそのうち5点を図示したものである。順に説明を行いたい。第1図1は戸水B遺跡（第1次）出土遺物であり、2号土坑と3号溝が切り合った遺構から出土している。どちらの遺構に帰属するものかは不明である。前章において簡単に説明した土器である。法量・調整等を補足しておきたい。口径は20.8cmを測る。口縁端部は面を持ち、やや中央が凹む。口縁部下端は横方向に突出する。口縁部内外面は共に、ヨコハケ調整後にヨコナデ調整を行っている。口頸部外面は斜め方向にハケ調整、内面はヨコナデ調整をそれぞれ行っている。内面口縁部下端には口縁部を接合する際にハケ状工具を用いた痕跡が残り、凹んでいる。灰白色を呈し、焼成は極めて良好である。第1図2は藤江C遺跡（第2次）出土遺物であり、河跡の第2層から出土している。口径は20.8cmを測る。調整や形態・作り方はほぼ1と共通する。相違点を挙げておきたい。口縁部形態は面取りを行わず、丸く仕上げる。口頸部内面は斜め方向にハケ調整を行う。口縁部内面および口縁下端内面には指押さえの痕跡が残る。後者は1におけるハケ調整が指押さえに置き換わったものと判断できる。さらに口縁部外面にはヨコナデ調整後にハケ状調整具を用いて斜格子文を施している。色調は戸水B遺跡や藤江C遺跡近辺に多く見ることができるにぶい黄橙色を呈し、焼成はやや不良である。第1図3は戸水B遺跡（第3次）出土遺物であり⁽²⁾、35P（35号ピット）から出土している。口径は17cmを測る。1・2と同様に、頸部より口縁部下端まではゆるやかに外湾し、そこから口縁端面までは内湾気味に立ち上がる形態を有



第1図 石川県における複合口縁壺形土器 (S=1/4)

する。口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面共に摩耗が著しく、不明である。口縁部外面にはヘラ状工具を用いて斜格子文を施し、口縁下部外面にはハケ状工具を用いて刻目文を施している。にぶい黄橙色を呈し、焼成はやや不良である。第1図4は専光寺養魚場遺跡出土遺物であり、SD02(2号溝)から出土している。口径は21cmを測る。大きく外反する口縁部(第1次)をもち、口縁部内面からさらに斜め方向に直立した口縁部(第2次)を呈する。いわゆる「つば」が付く土器である。口頸部内外面にはヨコハケを施し、第1次口縁部内面および第2次口縁部内外面にはヨコナデ調整を行う。口縁端部は両方共に面取りを行い、ハケ状工具を用いて刻目文を施している。黄橙褐色を呈し、焼成は良好である。第1図5は藤江C遺跡(第1次)出土遺物であり⁽³⁾、河跡から出土している。口径は20.8cmを測る。4と同様に、大きく外反する口縁部(第1次)をもち、口縁部内面からさらに斜め方向に直立した口縁部(第2次)を呈するものである。内外面共に摩耗が著しいが、おそらく調整も4と同様であると考えられる。第1次口縁部端部には面取りを行った後に3条の凹線文を施し、その上から円形浮文を等間隔に8つ程貼り付ける。第2次口縁外面にはハケ状工具を用いて、綾杉文を施している。にぶい黄橙色を呈し、焼成はやや不良である。その他にここでは掲載していないものの、金沢市上安原遺跡にも上記の4・5に類する口縁を有する完形に近い壺が出土しているのを確認している⁽⁴⁾。上安原例は口径23.2cm、頸部径15.4cm、胴部径36.7cm、底部径10.6cm、器高60.7cm、容量24.6リットル⁽⁵⁾をそれぞれ測り、かなりの大型品である。上記の1～5も口径から類推すると大型品になるものと推測できる⁽⁶⁾。いずれも中期後半(北陸第 様式)に編年される⁽⁷⁾土器と共伴しているものである。

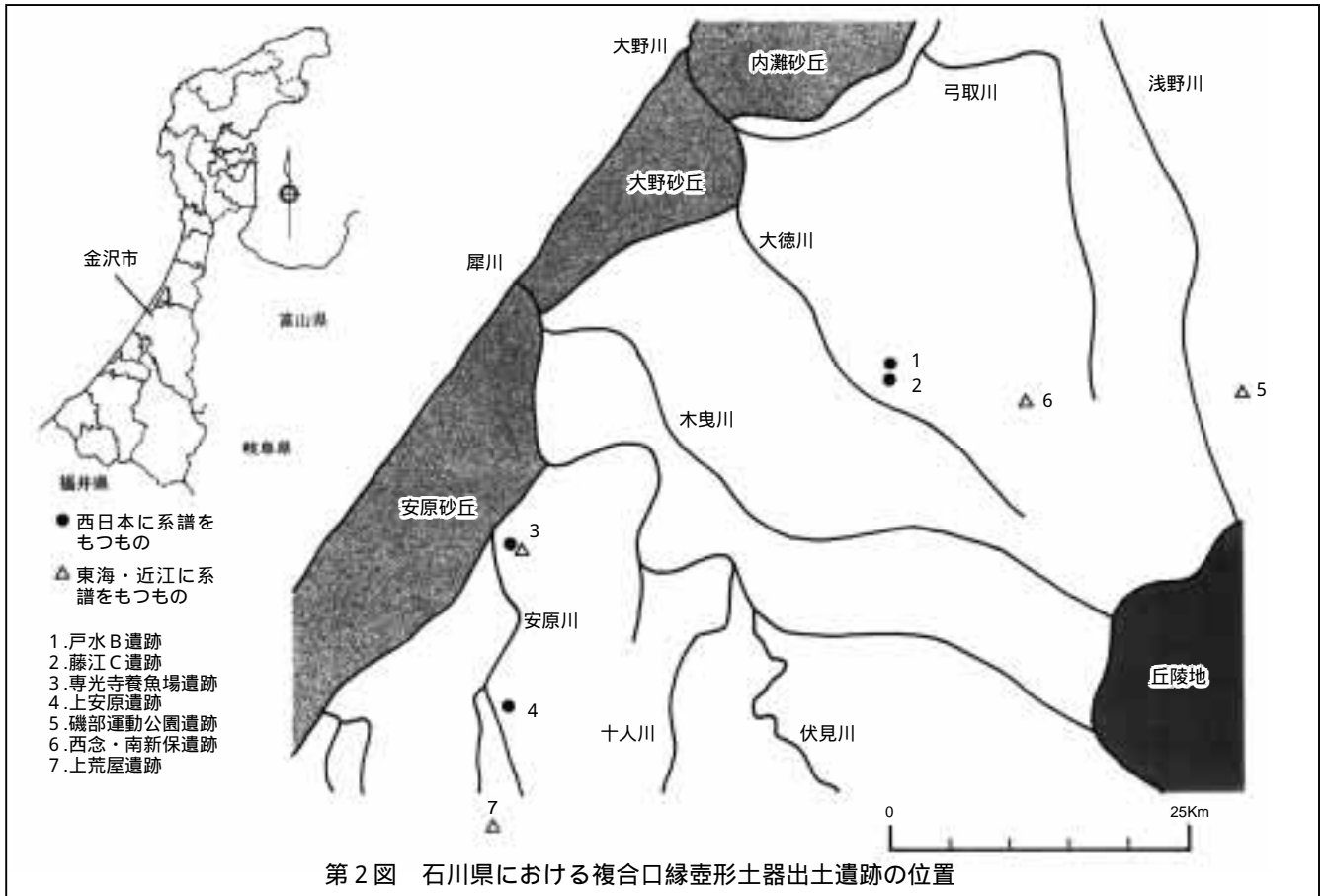
複合口縁壺の分類

以上の複合口縁壺は、その口縁部形態から大きく2つに分けることができる。

A類：第1図1～3が相当する。頸部より口縁部下端まではゆるやかに外反し、そこから口縁端面までは内湾気味に立ち上がる形態を有するものである。

B類：第1図4・5、上安原遺跡出土例が相当する。いわゆる「つば」がつく土器であり、大きく外反する口縁部(第1次)と口縁部内面からさらに斜め方向に直立した口縁部(第2次)をもつものである。

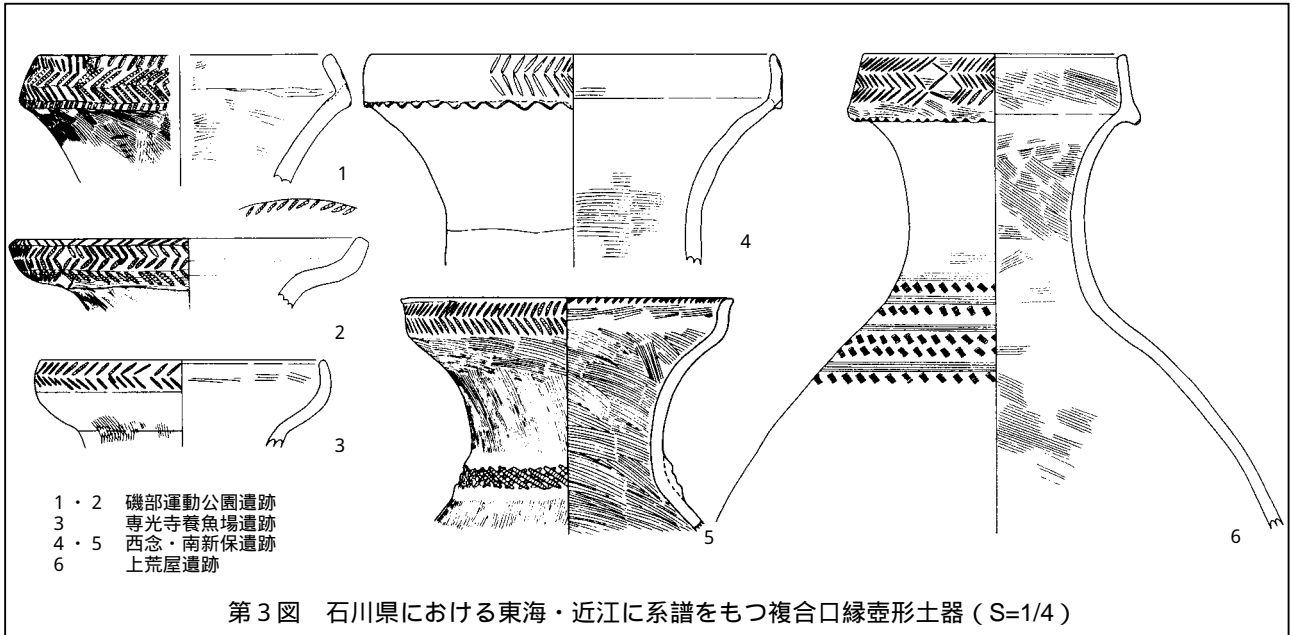
さらに文様の有無で細分できると考えているが、ここでは細分しない。



複合口縁壺の系譜

この複合口縁壺はカタチこそ九州～西部瀬戸内の壺に似ているが他人のそら似であるかもしれない。この土器の系譜を明らかにするためにはやはり、その土地の人に見ていただくのが確実な方法である。幸い私たちは2月末に福岡県甘木市で行われた第45回埋蔵文化財研究集会（九阪研究会）に参加する機会を得たので、これらの複合口縁壺もついでに持って行くこととした。研究会の休憩時間の合間を縫って、近畿から九州で埋蔵文化財に携わっている方々に見ていただくこととした。林が以前より知り合いであった愛媛県松山市の梅木さんにまず見てもらい、その梅木さんが知り合いの土器に詳しい研究者の人たちを次々に紹介して下さり、廊下は見る見るうちに人だかりになった。愛媛県の柴田さん、愛媛大学の吉田さん、兵庫県芦屋市の森岡さん、大阪府寝屋川市の濱田さん、福岡大学の武末さん、福岡市の吉留さん・久住さん、島根県の中川さん、覚えているだけでもこれだけ沢山の方々、実際はさらにもう何人かの人たちにいろいろと教えていただくことができた。

みなさんの検討の結果としては、B類はよくわからないが、A類は西部瀬戸内～九州のものによく似ており、その形態や調整法からみて九州ではなく、西部瀬戸内のものと類似するということであった。近畿にはまず見られないものであり、山陰にはまれに見られるものであることも教えていただいた。西部瀬戸内といっても、愛媛・広島・山口県があるが、どちらかといえば、山口県のものに近いのではないかと教えていただいた。たまたま教えていただいた人のなかに山口県の人がいなかったため、確証は得られなかったものの、これらの土器の系譜についておおよその見当を付けることができた。しかし、大きな問題があった。それは時期の問題である。北陸で出土したものはその全てが中期後半に編年されている土器と相伴しているものであるが、西日本で出土しているものは、そのほとんどが後期中葉以降に編年されているものであり、両者の間には大きな隔りがある。これについてはいろいろな可能性が考えられるのであるが、次項以降で検討することにしたい。



別系譜の複合口縁壺

中期後半の北陸にはさきほどから話題に挙がっている複合口縁壺のほかに、別系譜の複合口縁壺がある。この別系譜の土器とは筆者がかつて壺A類として報告した⁽⁸⁾、東海地方を中心として分布する条痕文系土器の系譜を引く壺である。類似した土器は近江にも確認できるため、ここではひとまず東海・近江に系譜をもつ土器として扱っている⁽⁹⁾。

先程の研究会で土器を見ていただいた際に、この系譜の土器との関係はどうなのかとの声があったため、ここで紹介しておきたい。第3図は石川県内の中期後半に属する事例の集成である。第3図6が中期中葉にさかのぼる可能性を残すほかは中期後半の古い段階に属するものであり、第3図3がもっとも新しい事例である。これらについて若干の説明を行いたい。ラッパ状に開く頸部をもち、口縁部は直立するか、やや内傾する形態をもつ。古い形態を残す第3図4・6は口縁部外面の下部に突帯を貼り付け、指やハケ状工具で刻むが、新しくなるにつれ、突帯の貼り付けがなくなり、口縁下部の刻みもなくなっていく。口縁部外面にはハケ状工具を用いて、綾杉状刻みを施す。口縁部の下部形態は新しくなるにつれ、丸みを帯びていく傾向がある。

これらの土器と第1図の複合口縁壺は形態等において大きく異なると考えざるを得ないものであり、第1図の複合口縁壺の系譜が東海・近江に追えないことが明らかである。滋賀県栗東町の近藤さんや愛知県の宮腰さんにも第1図の土器を見ていただいたが、どちらもこのような土器を見たことがないとのことであり、この考えを補強する意見をいただくことができた。

問題点の整理と今後の展望

本稿で主に問題として扱ってきた土器は、中期中葉以前から北陸に存在する複合口縁壺の系譜として捉えることができるものではなく、中期後半以降に新たに出現する形式のものであることが明らかとなった。その詳しい系譜等について、A類については調査の結果、西部瀬戸内、中でも山口県周辺地域の可能性が強いと判断したが⁽¹⁰⁾、北陸と西部瀬戸内とは時期が違うという大きな問題が存在することも明らかとなった。また、B類についてははっきりした情報を得ることができなかった。そこ

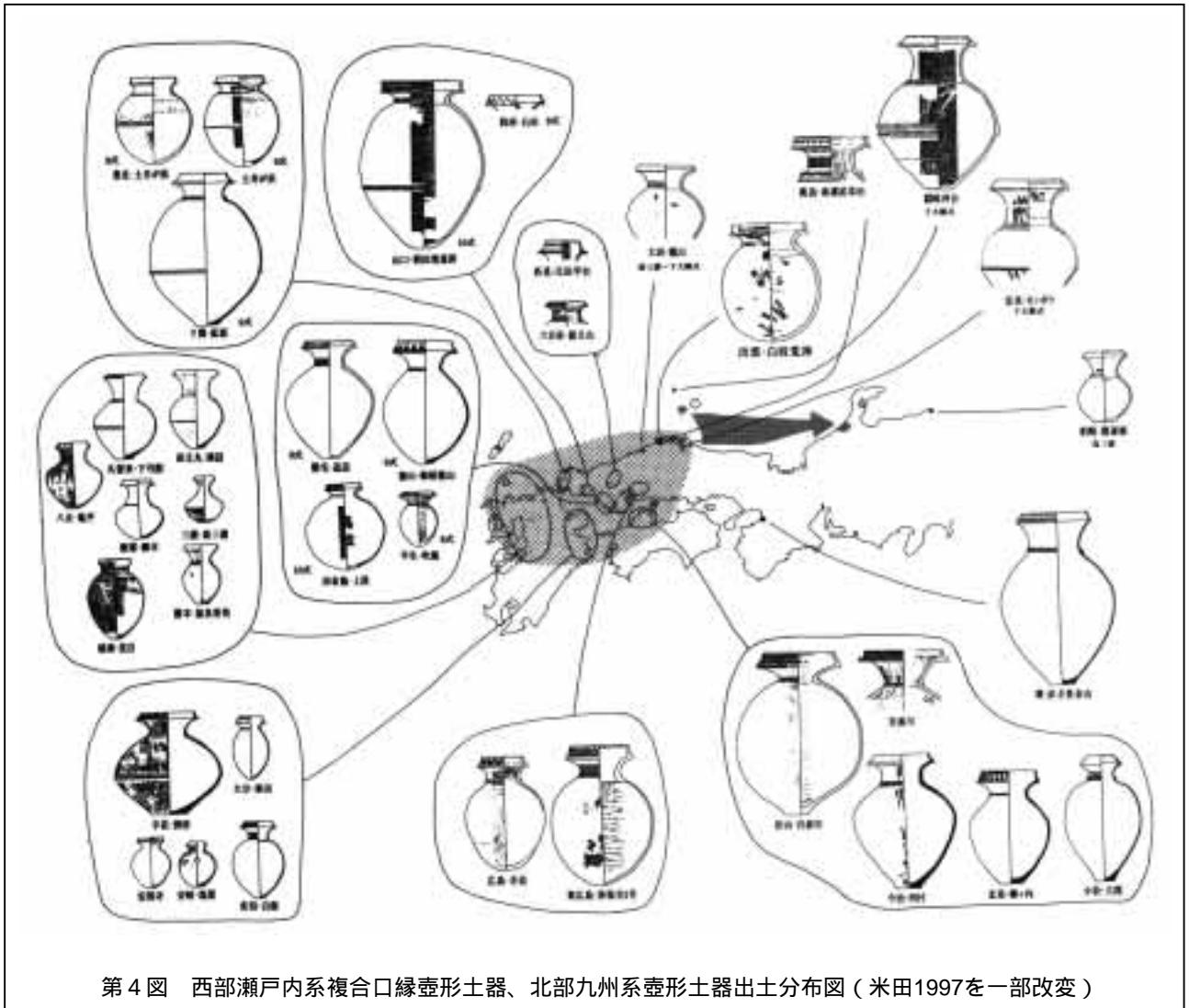
で最後にこれらの問題点について、まず事例の紹介を行い、その後に考え得る解釈を挙げ、今後の課題・展望をはっきりさせておきたい。

第4図は西部瀬戸内系・北部九州系複合口縁壺の分布状況について、島根県出雲市の米田美江子さんがまとめたもの⁽¹¹⁾に一部加筆を行ったものである。これらは全て後期以降に属するものであり、その分布は、A類が北部九州・東部九州・西部瀬戸内に集中、山陰地方に点在し、B類が西部瀬戸内・山陰に点在する。中期に遡る例はここでも紹介されていないが、1点は確実に存在することが新たに明らかになった。第5図はその1点、山口県阿東町宮ヶ久保遺跡出土例である。時期は中期後半であり、本稿のB類に相当する。A類とB類についてはB類が九州に存在しない以外は、基本的に両類で分布に偏りが無いが、A類とB類が揃って出土する遺跡は、管見に触れた限りにおいては、藤江C遺跡例以外は愛媛県松山市宮前川遺跡例(第6図)があるのみである。しかし、基本的には両類で時期的な差や分布状況の差はあまりないものと考えておきたい。時期の問題が解決されるならば、西部瀬戸内系の複合口縁壺は分布状況等から判断して、山陰を越えて日本海ルートでA・B両類(もしくはそれらの土器作りに関わる情報)が同時期に伝わってきたものと判断できる。

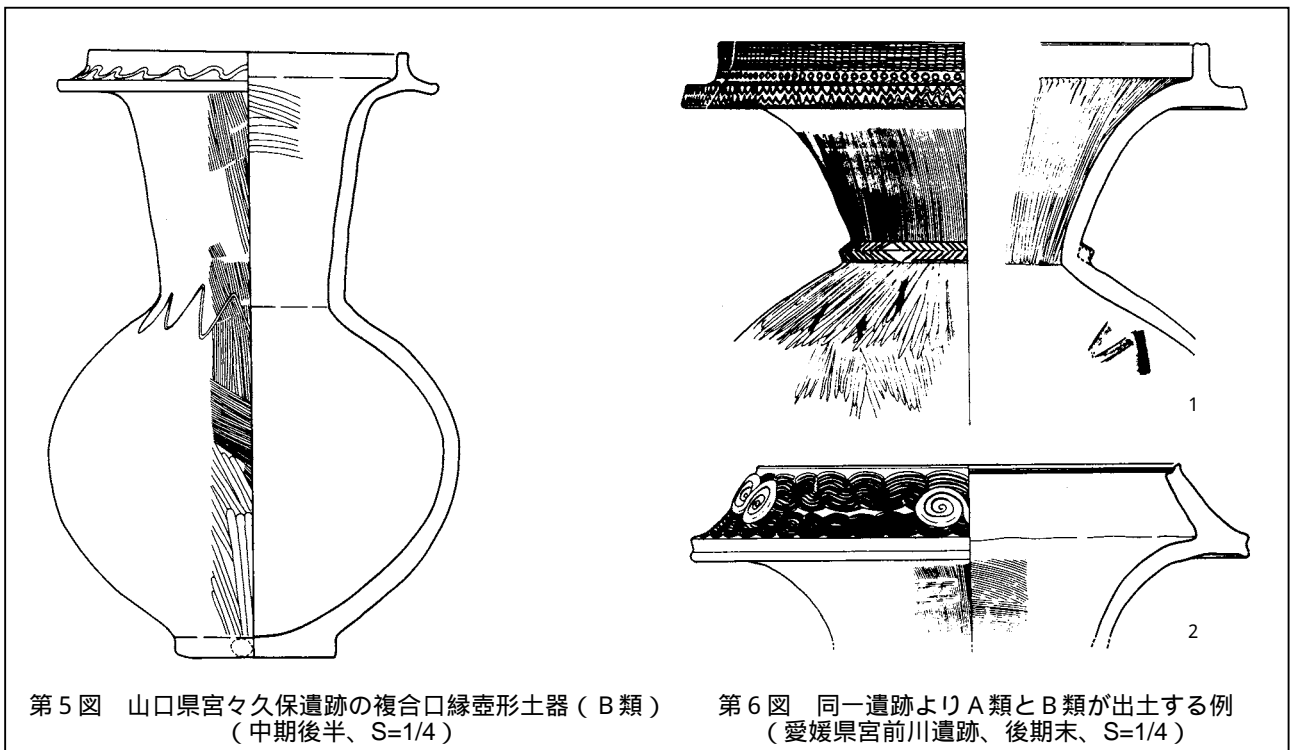
最後に時期の問題について触れておきたい。前提として北陸・西部瀬戸内両者の複合口縁壺に関係があるということが必要であるが、西日本においてもA類・B類が共に存在すること、大型容量であること、調整方法が類似すること、中期後半以降北陸(北加賀)において西日本に系譜をもつ土器が増加することなどからこの前提が成り立つ蓋然性が高いと考えている。そこで、考え得る解釈は次の2点に集約できる。まず土器編年自体に誤りがあるという解釈が浮上してくる。これについて戸水B遺跡・藤江C遺跡出土土器やこれらと同時期と考えられる遺跡出土の土器を現在検討しているが⁽¹²⁾、これらの土器は時期が下っても後期前半であり、現在西部瀬戸内で編年されているように後期中葉以降に時期が下ると考えることはできない。北陸同様、西日本においては後期前半の資料が少ないため、複合口縁壺が後期前半に存在する可能性は十分にあると考えることができれば⁽¹³⁾、後期前半で両者が時期的に合致するという考え方が第1点目としてある。第2点目としては、後期中葉以降に西日本において主流となる複合口縁壺の祖型となるものが、中期後半に遡る可能性があるという考え方がある⁽¹⁴⁾。これは現状では北加賀例と宮ヶ久保例の断片的な情報からの判断ではあるが、中期後半に西部瀬戸内から北陸を結ぶ広い範囲に複合口縁壺の祖型となるものが分布していたとみる考え方である。筆者はこの考え方が蓋然性が高いのではないかと理解している。

いずれの考え方を選択するにしても、まだまだ解決して行かなければいけない課題は山積みであり、筆者はまだ考えを固定するつもりはなく、これからも様々な可能性を模索していく必要が有ると感じている。偶然の発見から編年の問題や交流の問題などを考える契機が得られたのは幸いであった。中期後半から後期前半の土器の編年的な問題や交流の具体的な様相については次号以降でも扱って行きたいと考えている。

本稿をなすに当たっては、実に様々な方々からの御教示・御協力を得ました。複合口縁壺については、梅木謙一・柴田昌児・吉田広・森岡秀人・濱田延充・武末純一・吉留秀敏・久住猛雄・中川寧・近藤広・宮腰健司各氏に実物を見ていただき、御教示をいただきました。また、深沢芳樹氏は議論につき合っただき、御教示を与えて下さったり、関連した資料を送って下さったりと貴重な時間を割いていただきました。田畑直彦氏には図面を送って土器の図を見ていただき、土器と関連文献についての御教示をいただきました。小嶋芳孝・栃木英道・沢田まさ子・久田正弘・中屋克彦・大西顕各氏には資料の取り扱いに便宜を図っていただいたり、御教示をいただいたりしています。今秋に立ち



第4図 西部瀬戸内系複合口縁壺形土器、北部九州系壺形土器出土分布図（米田1997を一部改変）



第5図 山口県宮々久保遺跡の複合口縁壺形土器（B類）
（中期後半、S=1/4）

第6図 同一遺跡よりA類とB類が出土する例
（愛媛県宮前川遺跡、後期末、S=1/4）

上げを予定している弥生文化研究会の準備会の席では楠正勝・小西昌志・景山和也・安英樹・安中哲徳各氏に議論につき合っていたり、資料を実見させていただいたりしています。以上の方々の他にも沢山の方々の御教示・御協力をいただきました。文末ながら記してお礼申し上げます。また、本稿に対する御意見や本稿で取り扱った土器についての情報等があれば是非御教示下さいますようお願いします。

脱稿後、本稿に関連したものとして、田崎博之氏の論文の存在を知った。田崎氏によれば、西部瀬戸内では、複合口縁壺は後期初頭に北部九州の高三瀨式土器の影響を受けて出現すること、中期後葉の壺の形状に近似した例があること、ほとんどが大形品であることなどが指摘されている。本稿の内容を考えていく上で興味深い指摘である。

註

- 1) 石川県教育委員会 1975。なお、再実測・トレースは筆者が行った。
- 2) 未公表資料であるが、調査者の小嶋芳孝氏に資料の取り扱いに便宜を図っていただいた。
- 3) 未公表資料であるが、調査者の中屋克彦氏に資料の取り扱いに便宜を図っていただいた。
- 4) 未公表資料であり、調査者の金沢市埋蔵文化財センター小西昌志・景山和也両氏の御厚意により実見する機会を得た。法量に関しては景山氏から御教示を得ている。
- 5) 容量については、実測図をもとに小川貴司氏の考案した1/2法(小川1993)を用いて頸部までの容量(実質容量)計算を行った。
- 6) 第3図1・2・4・5は口径がほぼ同一であり、注目される。
- 7) 河合 忍 1996。
- 8) 前掲7)
- 9) 本稿では東海・近江に系譜をもつ土器として取り扱っているが、元々の系譜がこれらの地方に辿ることができるという意味であって、同時期の東海・近江地方にこのような土器があることを示しているのではない。筆者はこの時期のこの形式の土器は北陸で独自に変化をしている形式であると理解しており、本来ならば在地系土器という表現が適当であると考えている。
- 10) 山口大学の田畑直彦氏に土器のコピーを送り、見ていただいたところ、時期には問題があるものの、土器自体は山口県周辺の土器と比べても、違和感がないとの御教示を得た。
- 11) 米田美江子 1997。なお、文献については久田正弘氏の御教示を得た。
- 12) 今秋に立ち上げを予定している弥生文化研究会の準備会にて、楠正勝・小西昌志・景山和也・安英樹・安中哲徳氏とともに検討を続けている。戸水B遺跡・藤江C遺跡から出土する土器群は基本的に凹線文系土器が主体を占めるものであって、これらと共伴する外来系土器も中期後半の範疇で捉えられるものが主体を占める。後期前半に時期が下る土器群がある可能性があるものの、主体を占めないことは確実である。また、専光寺養魚場遺跡出土土器は中期後半でも古い特徴をもつ一群であり、後期に時期を下らせて考えることは難しい。
ちなみに、今秋開催予定の弥生文化研究会のテーマは中期後半から後期前半の土器である。興味をお持ちの方は是非参加していただきたい。
- 13) 山口大学の田畑直彦氏から山口県においては後期前半の資料が少ないため、このような可能性も考えられるとの御教示をいただいた。
- 14) 栃木英道氏からも同様の御教示をいただいた。

参考文献

- 石川県教育委員会 1975 『金沢市戸水B遺跡調査報告』
 石川県立埋蔵文化財センター 1997 『金沢市藤江C遺跡』
 金沢市教育委員会 1983 『金沢市西念・南新保遺跡』
 金沢市教育委員会 1988 『金沢市磯部運動公園遺跡』
 金沢市教育委員会 1992 『金沢市専光寺養魚場遺跡』
 金沢市教育委員会 1992 『金沢市西念・南新保遺跡』
 金沢市教育委員会 1995 『金沢市上荒屋遺跡』
 阿東町教育委員会 1998 『宮ヶ久保遺跡』
 愛媛県埋蔵文化財センター 1986 『宮前川遺跡』
 小川貴司 1993 「土器容積の計算法と器体積」 『二十一世紀への考古学』 雄山閣
 河合 忍 1996 「北陸弥生土器様式の変革過程」 『石川考古学研究会々誌』 39 石川考古学研究会
 米田美江子 1997 「一考察」 『白枝荒神遺跡』 出雲市教育委員会
 田崎博之 1995 「瀬戸内における弥生時代社会と交流 土器と鏡を中心として」
 『瀬戸内海地域における交流の展開 古代王権と交流6』 名著出版

第1表 西部瀬戸内に系譜をもつ複合口縁壺形土器一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺構名	時期	器種	口径cm	頸部径cm	胴部径cm	底部径cm	器高cm	容量ℓ
1	戸水B	金沢市戸水町	2号土坑・3号溝	中期後半	壺	20.8					
2	藤江C	金沢市藤江北	河跡(第2層)	中期後半	壺	20.8					
3	戸水B	金沢市戸水町	35号P	中期後半	壺	17					
4	専光寺養魚場	金沢市専光寺町	SD02	中期後半	壺	21	16.7				
5	藤江C	金沢市藤江北	河跡	中期後半	壺	20.8					
6	上安原	金沢市上安原町		中期後半	壺	23.2	15.4	36.7	10.6	60.7	24.6

第2表 東海・近江に系譜をもつ複合口縁壺形土器一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺構名	時期	器種	口径cm	頸部径cm	胴部径cm	底部径cm	器高cm	容量ℓ
1	磯部運動公園	金沢市磯部町	10号土坑	中期後半	壺	10.5					
2	磯部運動公園	金沢市磯部町	10号土坑	中期後半	壺	18.2					
3	専光寺養魚場	金沢市専光寺町	SK01	中期後半	壺	14.9					
4	西念・南新保	金沢市西念町他	L区SK01	中期後半	壺	21.3	13.5				
5	西念・南新保	金沢市西念町他	G-4区P-215	中期後半	壺	17.4	10				
6	上荒屋	金沢市上荒屋町	SK113	中期後半	壺	13.8	9.3				

よっさき すば 吉崎・次場遺跡出土の板状鉄斧について

今井淳一・林 大智

はじめに

昭和61(1986)年、羽咋市教育委員会による吉崎・次場遺跡(第11次)の発掘調査で、遺物包含層から多量の土器にともなって1点の鉄製品が出土した。

この鉄製品を実見したところ、板状鉄斧の基部であることが明らかとなった。これまで県内では、弥生時代の板状鉄斧と断定できる資料は出土しておらず、時期は不確定であるが、県内初出の資料であり、当該期における鉄製品の流通について考える際に重要な資料である。

そこで、この資料について紹介するとともに、その位置づけなどについて若干考えてみたい。

執筆に際しては、遺跡の概要を羽咋市教育委員会の今井が、その他の執筆および製図に関しては林が分担し、各項の末尾に文責を記した。 (林)

遺跡の概要

吉崎・次場遺跡は能登半島の入口にあたる羽咋市に所在し、標高2m前後の沖積地に立地する弥生時代の集落である。往時の地理的な環境をみると、集落付近は古代交通の要所であり、かつての邑知潟縁辺部の自然堤防上に一貫して営まれている。

これまで通算17次におよぶ調査成果によって、能登地域の拠点的な集落として認識されており、当該地域では最も早い段階で稲作農耕を取り入れながら、古墳時代の始まりまで存続した遺跡として知られている。

また、1983年には推定範囲の約20分の1にあたる11,057m²が国の史跡指定を受けたのを機に、土地の公有化や保存・復元的整備が図られ、遺跡発見から約半世紀を経て、1999年6月に「吉崎・次場弥生公園」という形で新たな活用が始まっている。

板状鉄斧は1986年に実施した農村モデル事業に伴う調査区の遺物包含層から出土している。現在これらの資料は再整理中であり、今回確認された鉄斧も未報告資料であることを、予め断っておきたい。



第1図 吉崎・次場遺跡位置図(S = 1/25,000)

通算第11次にあたるこの調査区は、遺跡確認範囲の北側にあたり、既往の調査区ではJ調査区(第6次:1980年)と北接する位置関係となる。農道舗装部分を対象としているため調査幅が3m前後と狭く、延長約80m、面積240m²を測る。調査区南側では溝などの遺構が存在するが、東区と呼称されている北側では、地表下約1mから青灰色砂層が堆積し、その中に板状鉄斧・土器・石器・獣骨・植物遺体など、弥生時代中期から平安時代に至る各時代の遺物を大量に包含した、いわゆる植物溜まりを形成している。

こうした堆積状況は、J調査区と共通するものであり、集落が形成されている微高地端部から古邑知潟縁辺部への移行地帯であったものと推定される。 (今井)

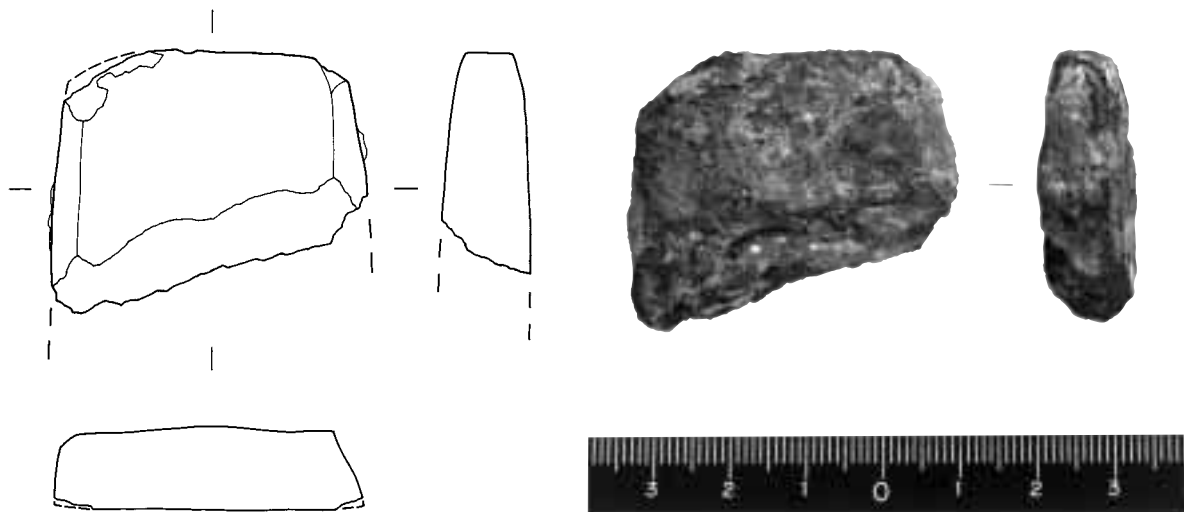
板状鉄斧の観察（第2図）

板状鉄斧は基部のみが残存しており、身部の大半および刃部は欠損している。法量は、現存長3.45cm、基部幅3.6cm、最大幅4.1cm、最大厚1.1cm、重さ33.4gを測る。基部はやや丸みを持ち、平面形は刃部に向かって徐々にひろがる形態を呈する。基部の左端は欠損し、背面は錆びにより板状に剥離している。縦断面は基部から刃部に向かって徐々に厚みが増す。横断面は台形を呈し、中央部および両端部でやや厚みを増す。縦・横断面などからは、この鉄斧が鍛打によって整形されたと考えられるが、台形の断面形態は扁平片刃石斧に類似するため、その製作工程に打割・研磨も行われた可能性が考えられる。身の厚みなどからは、伐採斧としての機能が推測できる。（林）

板状鉄斧の位置づけについて

県内で弥生時代の板状鉄斧である可能性が示唆されているものとしては、後期前半に属する松任市旭遺跡群の第43号竪穴住居跡出土資料(第2図1)や、後期後半に属する七ツ塚墳墓群B20号土坑出土資料(第2図2・3)、奥原遺跡の第2号住居跡(第2図4)をあげることができる。しかし、全ての資料が板状鉄斧としての機能を果たすだけの厚みを有しておらず、明確な刃部が認められないことから、板状鉄斧として認めることは困難である⁽¹⁾。それに対して当該資料は、形態的特徴・身の厚みなどから板状鉄斧と断定でき、県内で初出の資料として捉えることができる。

時期については包含層からの出土であるため明確でない。しかし、形態の特徴などから弥生時代に属するものと考えてほぼ間違いのないであろう。弥生時代後期後半～終末期の集落遺跡である金沢市塚崎遺跡は、竪穴住居跡・土坑などから96点の鉄製品が出土しており、当時期における鉄製品の器種組成を伺い知ることができる好資料である⁽²⁾。この遺跡からは、袋状鉄斧が2点出土しているにも関わらず板状鉄斧は出土していない(第4図1・2)。このことから、県内では板状鉄斧から袋状鉄斧への変換は後期後半以前に行われたと考えられる。県内において弥生時代の鉄製品は中期後半に導入が開始されることから、この鉄斧は弥生時代中期後半～後期前半(初頭)のものと考えることが妥当である。また、近畿地方など近隣の地域でも、板状鉄斧は中期後半に出現し⁽³⁾、さらに、台形の横断面を有する板状鉄斧が、大阪府芝谷遺跡の住居S12で認められ、時期は後期初頭に比定できる⁽⁴⁾。これらのことから、この時期決定が裏付けられると考えられる。（林）



第2図 吉崎・次場遺跡出土板状鉄斧実測図および写真（S = 1/1）

鉄製品の導入と集落の消長

弥生時代における鉄製品は、上述のように中期後半に導入が開始され、後期後半～終末期には出土量が急増するとともに、その製作・加工技術も同時に導入されたと考えられる⁽⁵⁾。この鉄製品の動向は、同期の集落遺跡の消長とほぼ一致する⁽⁶⁾。すなわち、集落の消長は、気候の変化や人口圧などによって生じる内的変化とともに、鉄製品をはじめとする物資・情報の伝達網の解体・再構築と密接に関連していた可能性が高い。特に鉄製品は、その利器としての優れた特性や、使用によって生産力の発展を促されることなどから、伝達システムの変化に大きな影響を与えたと推測できる。

また、日本海沿岸部に位置することで、物資・情報の伝達に比較的有利な地理的条件を有しているにも関わらず、県内における中期後半～後期前半に属する鉄製品は4遺跡4例⁽⁷⁾と極めて少ない。後期前半以前には、地域の中核的な集落が生産と流通の拠点として機能しており、物資・情報伝達網も当然それを中心として形成されていたと考えられる。鉄製品もその伝達網によって導入された可能性が高い。一方、後期後半～終末期における鉄製品は、玉作り技術と密接に関連することで、多量に導入されたと考えられ、伝達ルートは日本海沿岸部であると推定できる⁽⁸⁾。

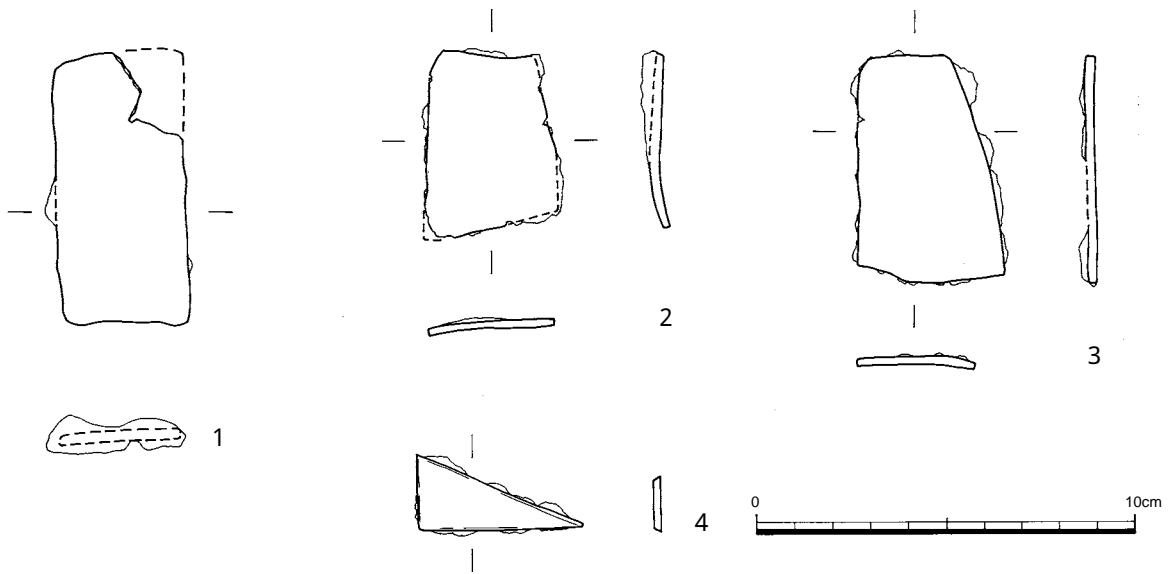
すなわち、中期後半～後期前半における鉄製品の導入源や伝達システムは、後期後半～終末期と異なっていたと考えられ、その差異が同時期の集落の消長に大きな影響を与えた可能性が高い。また、県内において弥生時代の鉄製品が目的的に導入されたものではなく、鉄製品導入の画期は、付随する事象（玉作り技術など）が変化することによって生じたものと考えられる。そしてその現象には、地理的な条件よりも、地域間の社会的関係が強く作用していたと考えられる。 (林)

註・参考

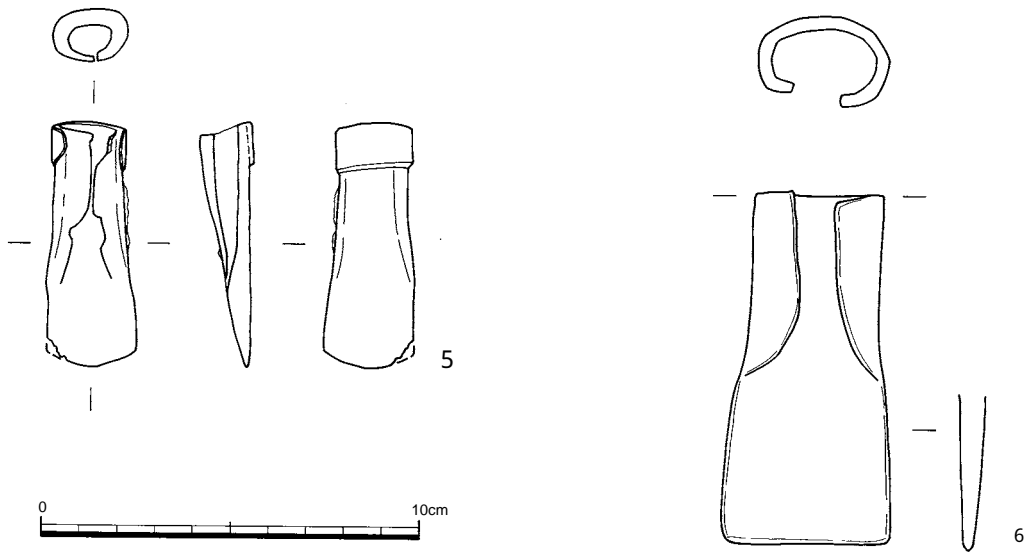
- 1) 奥原遺跡出土例に関しては、鍛冶作業の際に生じる三角形鉄片と考えられる（北陸弥生鉄器文化研究会の検討による）
- 2) 吉岡康暢・小嶋芳孝ほか1976『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 石川県教育委員会・石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団。
- 3) 川越哲志 1993「板状鉄斧」『弥生時代の鉄器文化』 雄山閣出版、p37・40。
- 4) 宮崎康雄 1996『古首部・芝谷遺跡 高地性集落遺跡の調査』 高槻市教育委員会、p296。図281・5401。
- 5) 林 大智 1999「石川県における農具の鉄器化と手工業生産の導入について」『農具』石川県考古資料調査・集成事業報告書 石川考古学研究会。
- 6) 安 英樹 1993「加賀における集落の消長」『東日本における古墳出現過程の再検討』 日本考古学協会新潟大会実行委員会。
- 7) 前掲註5)
- 8) 河野一隆 1997「玉作と鉄器文化」『東日本における鉄器文化の受容と展開』第4回鉄器文化研究集会発表要旨集 鉄器文化研究会。

図版出典

- 1 前田清彦1995『旭遺跡群』 石川県松任市教育委員会、p47.第40図223。
- 2・3 楠 正勝・栃木英道1999「弥生時代」『金沢市史』資料編19考古、p219.第186図54・55。
- 4 平田天秋・西野秀和1982『七尾市奥原縄文遺跡・奥原遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター、p47.第32図。
- 5・6 吉岡康暢・小嶋芳孝ほか1976『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 石川県教育委員会・石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団、p87.第85図18。同報告、p175.第194図5。



第3図 県内出土の板状鉄斧類似資料集成図(S = 1/2)
 1 旭遺跡群第43号住居跡、2・3 七ツ塚墳墓群B20号土坑、4 奥原遺跡第2号住居跡



第4図 県内出土の袋状鉄斧集成(S = 1/2)
 5 塚崎遺跡第21号竪穴住居跡、6 塚崎遺跡D6号土坑

第1表 県内出土の鉄斧計測表

番号	時期	長さ(cm)	基部幅(cm)	刃部幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
1	後期前半	7	3.4	3.4	0.2		
2	後期後半	4.95	2.45	3.55	0.2~0.28	17.3	一部欠員
3	後期後半	6	2.1	3.95	0.18~0.3	18.4	
4	後期後半	2.1		4.5	0.2	6.3	三角形鉄片?
5	終末期	6.5	1.9	2.4	0.3~0.5	21.2	袋端部折り返し
6	終末期	9.7	3.5	4.5	0.4~0.6		鈍2、刀子1、鍬・鋤先1と共伴

石川県埋蔵文化財情報 第2号

発行日 1999(平成11)年10月15日

発行者 (財)石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

電話 076-229-4477 FAX 076-229-3731

HP <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>

e-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 (株)橋本礎文堂
